

---

# 決闘者の道

あちゃべ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

決闘者の道

### 【コード】

N0485W

### 【作者名】

あちやへ

### 【あらすじ】

西条亨はある日、一人の少女に出会う。

その日から西条の日常は、非なる日常として歩む事となる。

これは、西条やその仲間達が人として、決闘者として成長していく物語である。

## 序章

精霊界。

そう呼ばれる世界の中心に、神々が封印されている神聖な塔がある。

しかし、その地は暗雲が立ち込める荒れ果てた荒野の大地と化し、その塔も神聖さからかけ離れたような…。

辺りの風景も相俟って、不気味な存在となっていた。

重鈍な空気を漂わせるその塔は非常に高く、地上から見上げれば空を覆う雲を貫き、見上げれば見上げるほど一体どれほどの高さなのか想像がつかない位のものだ。

その塔から遠く離れたとある里で、自室の部屋の窓からも見えるその塔を眺める一人の魔術師がいた。

紺色の魔導着を身に纏う魔術師は椅子に座り、近くの机に置いてあった一冊の魔導書を手にとる。

「…やはり…残された手段はこれしかないのか…」

魔導書に記された情報を読み取ると、魔術師は意を決した様に一人の少女の名を呼んだ。

「…ブラック・マジシャン・ガールよ」

魔術師が名を呼ぶと、部屋の扉がガチャリ…と開き、一人の少女が部屋の中に入ってきた。

ブラック・マジシャン・ガールと呼ばれた少女は部屋に入ると、真剣な面持ちの魔術師とは対照的な、どこか垢抜けた雰囲気話しかけてきた。

「お呼びですか、お師匠さま？」

「ああ…実はお前に頼みたい事がある」

魔術師の言葉を聞くとマジシャン・ガールは

「またお使いとかですかお師匠さま？食材とかはまだ沢山残ってますよ？それとも何ですか、あ…分かった！あれですね、被災地のモンスター達に支援をしに行くんですね！？」

「違う、話は最後までちゃんと聞きなさい」

勝手に話すマジシャン・ガールを一括する魔術師は、壁に立てかけてあった自分の杖を取り、マジシャン・ガールに説明を始めた。

「今の我々の世界は、復活した古の悪しき神々ゴーストによって破滅の道を

辿っている」

「悪しき神々…つまりは【三邪神】…ですよね」

「そう…邪神達は勢力を伸ばし、今やこの世界のほとんどの国々が邪神の手に堕ちてしまっている…」

二人は窓から見える外を眺めた。

空にはどす黒い雲が覆い尽くし、所々眩しい光を放っては青白い閃光と轟音が鳴り響いている。

「その邪神と対を成す【幻神獣】は、邪神が復活した際に奴らの手によって、その力を封印されてしまっている…つまりは奴らに対抗できる唯一とも言える手段を、我々は封じられている状態だ。…ここまではお前も知っているな？」

魔術師が確認をとるかの様に尋ねると、マジシャン・ガールも真剣な表情になってコクリと頷く。

「奴ら邪神達の力は強大だ…このままではこの【精霊界】は、奴らが支配する暗黒の世界となってしまう…!! それだけは何としても避けなければならぬ…!!」

魔術師の言葉、一つ一つに重苦しい感情がのし掛かる。

その意を汲み取ったマジシャン・ガールは、自分を呼んだ魔術師

に尋ねた。

「…お師匠さま。私に頼みたい事というのは一体…？」

弟子のマジシャン・ガールに尋ねられた魔術師は、先程まで読んでいた一冊の魔導書を広げて、それをマジシャン・ガールに見せる。

「この魔導書には、ある世界の事が記されている」

「…ある世界？」

マジシャン・ガールはその魔導書を受け取り、内容を読んでいく。魔術師は魔導書を読むマジシャン・ガールに構わずに話を続けていった。

「その世界というのは…【人間界】！！」

「人間…界…？」

「その書物に記された内容によると、人間界にも我々デュエルモンスターズが、カードとして存在している」

「…別の世界にも、私達と同じ…デュエルモンスターズが…！？」

「元より我々デュエルモンスターは、人の思想が詰まった夢の存在。」

そんな我々を作り出した人間界には当然、私達と同じデュエルモン  
スターズが存在するという事になる…！！ 人間界にデュエルモン  
スターズが在るならば、則ちそれは…幻神獣もカードとして存在す  
るという事になる！！」

「っ！？」

魔術師の話を聞き、大きく目を開くマジシャン・ガール。

その様子を見た魔術師は、マジシャン・ガールが自分の話を理解  
していると判断し、更に話を進めていく。

「今お前が手にしている魔導書にも、その事が書き記されている。  
その魔導書は、魔法都市の図書館の奥深くに封印されていた物だ…  
その魔導書に記された内容は、我らが王も既に知っておられる…そ  
して王より、一つの命がくだされた！」

「王さまからの命令…っ！？ まさか…っ！？」

「…そう、その魔導書に記されている世界【人間界】に向かい、そ  
の世界に存在する幻神獣を我らの世界に降臨させる…！」

魔術師はそう言うと、手にしていた杖を鮮やかに回し、杖に込め  
た魔法を床へと叩きつけた。

「ハッ！」

ドシューウッ!!

放たれた魔法は床にぶつかると、そこには円形の魔法陣が展開され、淡いピンク色の輝きを放ちはじめた。

「この魔法陣はあちらの世界、つまりは人間界へと繋がる門<sup>ゲート</sup>。この王より仰せつかった大命を…マジシャン・ガールよ、お前に頼みたい…!!」

「…お師匠さま」

正直、マジシャン・ガールは師匠である魔術師からの言葉が信じられなかった。

何をやるにしても「駄目だ。まだまだ。修行が足りない」と言われ続けて、自分の力不足を痛感していたマジシャン・ガールは、いきなり王よりの大命を任されるなんて思ってもみなかった。

はたして自分に、その様な重大な任を全うする事ができるのだろうか？

マジシャン・ガールは思わず師匠である魔術師に聞き返した。

「お師匠さま…そんな重大な任務を…何で私なんですか？」

「……」

「私…今までお師匠さまからの修行は頑張ってきたつもりです。…でも、今の私は…まだまだ力不足だと分かっています!…そんな重大な任務、私なんかよりもお師匠さまの方が適任だと思えます…!」



「！」

王からの勅命、その重圧がマジシャン・ガールを気持ち<sup>プレッシャー</sup>を萎縮させる。

今の自分の言葉がどれだけ情けない事だろう、とマジシャン・ガールは思った。自分はまだまだ力不足だと思うのは本当だ。何度修行をしても満足のいく結果が残せず、いつも師匠である魔術師に怒られてばかりだった。任務として師匠と一緒にモンスターの討伐に向かっても、足を引っ張るばかりでちつとも役にたてなかった。

それらの積み重ねが、マジシャン・ガールの自信というものをポロボロに崩していた。

「…マジシャン・ガール」

師匠である魔術師は、震える弟子を真っ直ぐに見つめて話し掛けた。

「弟子を信用しない師匠が…どこにいる」

「…え？」

「私はお前を信用しているから、この任務を任せようという気になったのだ。確かにお前自信の力はまだまだ未熟だ、だがお前の力と  
いうのは…ただ力だけではない！」

「お師匠さま…」

「自分に自信を持って、マジシャン・ガール…！！ お前はこの『ブラック・マジシャン』が認めた、唯一の弟子なのだぞ？」

ブラック・マジシャンはマジシャン・ガールの肩に手を置き、

「生憎と私は別の任務があり、暫くは動けないのだ…だから私の代わりに、この任務をお前に任せたい」

「…お師匠さま」

マジシャン・ガールは頷いた。

師匠であるブラック・マジシャンからの一言…

『弟子を信用しない師匠がどこにいる』

今の彼女には、この一言がとても嬉しく思えた。

「お師匠さま、私やります…やらせて下さい！」

マジシャン・ガールの言葉に力が籠もる。

それを聞いたブラック・マジシャンは、弟子に優しく微笑みかけた。

「頼んだぞ、マジシャン・ガール！」

「はい、行ってきます!!」

力の籠もった返事で返し、マジシャン・ガールは魔法陣の上に乗った。

パアアアア…!!

すると、魔法陣の輝きに強みが増してきた。

その輝きは次第にマジシャン・ガールを包み込んでいく。

そして遂に、眩い光に包まれたマジシャン・ガールは、やる気に満ちた瞳と共にその姿を消した。

そして彼女は出会う。

運命の相手と…

後に自分たちの世界で『英雄』と呼ばれる事になる一人の決闘者<sup>デュエリスト</sup>と…。

空は夕暮れの色に染まりつつも、未だ暑い日差しが降り注ぐ。

七月の中旬。

夏真っ盛りの中、三上市の街中で少年の声が響き渡った。

「ヤバい！！ 間に合わねーッ！！」

そう声をあげ、三上市の広場を全力で走り抜けていくツンツンウ二頭の一人の学生。

彼の名は西条亨。

ここ三上市に在る第七デュエル高等学校に通う生徒である。

本日の授業も終わり、放課後を友人等と遊びに行っていた西条であったが、その途中でふと友人が告げた一言がキツカケだった。

『そおいや西条ちゃん。もう6時半を過ぎてるぜい…行き着けのスーパーのタイムバーゲン、下手すりゃもう完売しちまうんじゃないの？』

「畜生ッ！！ 帰り際になって結締に誘われた時にはまだ覚えてたのに…！！」

そう。

放課後になって友人から遊びに誘われた時には、まだバーゲンの事は覚えていたのだ。

しかし、友人とカードゲームをやっていたらつい熱くなってしま

い、いつの間にか結構な時間が過ぎていた。

「くっ!? スーパーはもう目と鼻の先なのに、信号が赤から全然変わらねー!」

地団太を踏み、信号を今か今かと待ちわびる西条。

なぜ、彼のような高校生がスーパーのタイムバーゲンに?と思うかもしれない。

「ここ三上市は、遊戯王オフィシャルカードゲーム発祥の街として知られている。

街の中心にシンボルとして建設された大きなビルの会社が、その遊戯王カードを創設した大企業【トリティニーグループ】である。

西条が中学三年の高校受験シーズンの頃、このトリティニーグループはある一大発表をした。

その内容は、三上市に在る高校の授業に、遊戯王カードを取り入れるという前代未聞のプランだったのだ。

その狙いとしては、若者に遊戯王カードを知ってもらおう事で、トリティニーグループへの関心を高めさせ、高校卒業後の就職を希望する若者を引き抜く為の企画であったが、当時まだ中学生である西条やその友人等は…

「おお、すげえ…!! 高校の授業でデュエル出来るんだってよ!」

「なにっ!? デュエルが授業というのであれば、俺のブルーアイ

ズがクラスの成績でダントツで一位になってしまつてはいないか…！」

『っし！！ 俺の進学先は決まつたぜい！！ デュエルで授業なんざ、人生で滅多に出来る事じゃねえからな！！』

当時【デュエルⅡ遊び】だった西条達は即座に三上市の高校を受験し、足りない学力は気合いと根性とカンニングで補い、無事に合格した。

だが三上市は、西条達にとって実家から遠く離れた位置にあつた為、学校の寮に入らざるを得なかつた。

その寮生活も楽なものではない。寮にも食堂があるにはあるのだが、そのご飯がまた絶妙に不味いのだ。

入学当初、初めて利用した時に頼んだ親子丼は【親1：子9】と割合が凄まじい位に極端であつた。

最初から素直に卵丼と書けよ…と思つたのは、今では良い思い出である。

そんな理由から西条は、両親からの仕送りの中から食費を分け、自炊生活を始めたのである。

今では苦勞の甲斐あつてか、ある程度の料理は作れるようになっていた。

「…っ！！ 青だ！！」

何時もより長く感じる信号が青に変わり、一目散に走り抜ける西

条。

そして、いざスーパーの店内に入ろうとした瞬間…

「間に合えいグギツ！！　つて、によあああ…！！」

床の微妙なコンクリートの段差に躓き、見事に転んだ西条。

道を行き交う人達は、そんな急に転んだ西条を見ながら、ポカーンと口を開けて啞然としていた。

「痛つつてええ…。でも、こんな事でメゲる西条さんではないんですよ…！！　タイムバーゲンが…俺を待ってるんだああ！！」

ガバツと立ち上がる西条は、人目など気にしていらなかった。

転んだ拍子に顔や腕、膝が擦りむけてしまっが、そんな傷も気にしていらなかった。

部屋の冷蔵庫はスツカラカン。愛用の冷蔵庫ちゃんの空腹を満たしてあげる為にも、今回のタイムバーゲンには何としても参戦せねばならないのだ。

（今いくからな…待ってるよ…！！）

意気込んだ西条が足を引きずりながら店内に足を踏み入れたその時、店員の高らかな声が店内に響き渡った。

『ハイ!! 本日のタイムバーゲン、全て完売の為に終了とさせていただきます!! 本日はご来店、誠にありがとうございました!!』

「…な…っ、なにいいいい!？」

まるで図つたかのようなタイミングでバーゲンが終わってしまった西条は、へなへなとその場に崩れ落ちてしまった。

そんな西条を見ていたどこその幼稚園くらいの女の子は、指を加えて西条を指差しながら

「ママ、ママ!見て!あれが俗に言う“負け犬”って人なんですよ?」

「こら、あんなの見ちゃいけません!」

それを聞いた西条は重なる惨事に思わずホロリと泣きそうだった。

空の色も暗くなり、夜の冷たい風を浴びながら、西条は何とか寮へと帰ってきた。



「痛ッツ…」

吹き抜ける風が擦りむいた傷口に染みる。

結局、今日のタイムバーゲンに間に合わなかった西条は、安く済む焼きそばと具材だけを購入した。買物物は安く済めばそれで良いのである、と自分に言い聞かせる。

「バーゲン価格で卵や牛乳が買えなかったのは残念だったけど…まあ仕方ないか」

いつまでも凹んでたつてしょうがない。

気を取り直した西条はポケットから部屋の鍵を取り出し、軽い溜め息を吐きながら自室へと入っていく。

「ただいま」

ワンルームの部屋に響く自分の声。

しかし、彼の言葉への返事はない。

寮で一人暮らしをしてからは、初めこそ寂しさを感じはしたが、今ではこの環境に慣れてしまった。

テキパキと冷蔵庫に食材を仕舞い込み、ベッドの上にゴロンと寝転ぶ西条。

「ふう…今日は派手に転んじまったな…まあこの擦り傷もほっとけ

ば治るだろ」

自分の傷を見て呟く西条は、ふとある事を想像してみた。

(しっかし…あの転んだ場面を白石や結締に見られなくて良かった。見られてたら今度の学校で、絶対に笑いのネタにされちまうからな…)

「ん…そう言えば…?」

何かを思い出した西条は、鞆の中からデッキケースを取り出した。このデッキケースの中には、彼が昔から使い続けてきた、大切な仲間達が修まっているのだ。

「そう言えば…明日もまた結締や白石とデュエルする約束をしたっけ…」

今日の放課後、学校近くの行き着けのカードショップで、西条は友人等とデュエルをしていた。

西条のデュエルの腕は弱くはないし、強いとも言えない。勝つたりもすれば、負ける事もしばしばあるが、西条はデュエルが大好きだった。

机の上にカードを広げ、一枚一枚それぞれに眺めていく。

その中から、西条は一枚のモンスターカードを掴む。  
そんな彼の表情は、どこか懐かしむような目をしていた。

「『ブラック・マジシャン』…明日のデュエルは、絶対に勝とうな  
！」

当然、カードから返事がある訳ではないのだが、西条はついカード達  
に声をかけてしまう癖があった。

端から見ればイタい子に見えるが、それだけ彼が自分のカード達  
に愛情を注いでいる証でもあるのだ。

しかし、愛情だけ大きくても、デュエルの実力がついて来なければ  
意味がない。結論から言えば、西条は今日の友人等とのデュエル  
で負け越していた。

先日思い付いた戦術を試そうと思ってデュエルをしたは良いが、  
なかなか上手くデッキが回らなかったのだ。

「さてさて…どうデッキを組み直すかな…」

カッ…!!

そう言い、西条は部屋のカードを片付けてある棚に手を伸ばした  
時、ふと異変が起こった。

「…っ!?!」

一瞬。

カードを取り出す為に身体を柵の方に捻った時、自分の背後から何か光ったような気がしたのだ。

思わず振り返ってみるものの、特に光るような物はこの部屋には置いていない。

テレビも電源は切つてあるし、携帯電話だって鳴っていない為、気のせいだろう…。そう思って再びカードを取り出そうとしたその時。

…カツ…カツ…！！

机の上に広げたカードに背を向けた瞬間、再びピンク色の光が背後から発せられたのだ。

「…っ!？」

気のせいでは無かった。

条件反射で振り返った西条の目に最初に映ったのは、いつの間に出ていたのであろう、直径1.5メートル位のピンク色をした円形の魔法陣。

机の上に突如展開されるピンク色の魔法陣に驚いた西条は、思わず言葉を無くして後ずさった。

「な…っ!？ なん…だよ…っ」

後ずさるうにも背中が壁にぶつかり、これ以上後退する事が出来

なくなった西条は、吸い込まれるように宙に浮かぶ魔法陣を見つめる。

一段と、また一段と魔法陣から発せられるピンク色の光が強くなっていく。

突然の怪奇現象を前にし、西条はこれ以上動く事も出来ず、声を発する事も出来なかった。

カッ…カッ…カッツ…!!!

何度か光を発していた魔法陣は、遂には部屋を覆い尽くす勢いで強い光を解き放つ。

「つつ!!?!」

思わず目を瞑り、身構える西条。

一体どれくらいの間が経過したのだろうか。

部屋を覆い尽くす光は徐々に収まり、目を瞑る西条は恐る恐る、ゆっくりと前方の魔法陣があった場所に視線を向ける。

いったい何が起きたのか。

そう思い、確認しようとした西条は、更なる衝撃を受けた。

「…な…っ!?!」

目を見開き、唾然とする西条。

恐らく、西条でなくとも全員が唾然とするだろう。先ほど、突如

として現れた謎の魔法陣。

しかし、気付けば魔法陣はいつの間にか消失しており、消失した魔法陣の代わりに一人の女性が立っていたのだ。

西条は混乱しながらも、いつの間にか現れたその女性に対し、視線を上下させた。

特徴的な水色とピンクのラインが入った尖り帽子。背中まで届く金色の艶やかな髪。くりつとした目元。少し幼さが残っているような、端正な顔立ち。肩を大きく露出させた可愛らしい衣装。手にしているのは先端の丸い杖。ピンクのスカート部分から伸びる長い足爪先が丸みを帯びた、特徴的なブーツ。

突如として現れたその女性に見とれながらも、同時に西条はこう思った。

(だ…誰だコイツ…!?)

いきなり現れたその女性は辺りをぐるりと見渡した後、自分の目の前で座り込む西条に視線を合わせ、なんともあどけない表情で、こう尋ねた。

「あのお…」

「……」

「ここは…いったいどこなのかな？人間界で合ってる？」

「……………は？」

意味不明な女性の意味不明な質問に対し、西条は何とも答える事ができなかった。

そしてこの瞬間から、西条は日常から非日常の世界へと足を踏み入れる事となる。

この時の西条は、そんな事を知る由もなかった。

西条亨は生まれて初めて言葉を失った。生まれて初めて、夢なら覚めてくれと心から願った。

転んで擦りむいた傷痕を抓ってみてもただ痛いだけ。

( いたい…やっぱ…夢じゃねえ… )

いきなり彼の部屋に現れた謎の女性は、自虐プレイをする西条を見て「？」と首を傾げる。

何から話せば良いのか分からない。

まずこの状況が全く分からない西条を見て、謎の女性は何かを思い付いたかのように、手で相槌を打って

「あ、いきなりだったからビックリしているんだね。それに自己紹介がまだだったし…」

呆然とする西条は完全に置いてけぼりをくらい、その女性は一人でペラペラと話し始めた。

「私はね…精霊界から来た『ブラック・マジシャン・ガール』って言うんだ。貴方に聞きたいんだけど、ここは人間界で合ってるかな？お師匠サマの転移魔法がちゃんと成功したのか確かめたいんだけど…?」

「…ブラック…マジシャン・ガール…?」

「うん！そうだよ!」

名乗られてから西条は、ブラック・マジシャン・ガールと自称する目の前の不審者を一瞥する。

言われてみれば、確かにカードの『ブラック・マジシャン・ガール』に似ている…というよりは明らかにその姿は『ブラック・マジシャン・ガール』である。

だが何故、カードである『ブラック・マジシャン・ガール』が目の前に現れたのだろうか？

これまでの状況を頭の中で整理した西条は、ある考えにたどり着いた。

(待てよ…少し落ち着け、俺!!) ここは三上市…別名、決闘者の



街だ。こういったソリットヴィジョンを使つての悪戯なのかもしれない……！！）

このような悪戯をする人物は知人の中に……

（もしかして……結締や白石の仕業か？ いや、でもアイツ等がここまで手の込んだ悪戯をするとは……！！？）

自分の友人等の仕業かと考えたが、友人等の性格上、このような悪戯をするヤツらではない。

もしかしてドッキリなのか！？ と部屋中をぐるりと見渡してみるも、それらしき仕掛けはない。

「あの、さつきから聞いてるんだけど？」

「あ、ああ……悪い……」

つい条件反射で謝ってしまった西条だったが、ここまで来て遂に西条の中で何かがキレた。

「……って、ちよつと待て！？ お前いつたいドロからこの部屋に入ってきたんだよ！？」

「え？？」

「だいたい何だよブラック・マジシャン・ガールって!? それはカードの名前だろ!? それにコスプレするのは勝手だけだな、ドツキりにしちゃあハイレベルすぎるぞコラア!!!」

「なっ!? 質問の答えになってないんだよ!! コスプレってのが何かは知らないケド、言いぐさで偽物扱いされてるのくらい分かるし!! もっかい言っとくケド、私は真正正銘、本ツ物のブラック・マジシャン・ガールなんだよ!!!」

「コスプレじゃないとしたら何だお前!? いったいどこから入って来たってんだよ!!! 窓もドアも全部閉まってたんだぞ!?!」

「ドコからって、そんなの…私は転移魔法でこの世界に来たんだから、コッチにも門ゲートとなる魔法陣が展開されたハズだけど?」

「魔法陣…っ!?!」

その言葉を聞いて、西条はふと先程の光景を思い出す。

自称ブラック・マジシャン・ガールが言うように、確かに魔法陣らしき物が宙に浮かび上がっていた。

そしてその魔法陣が激しい光を放ち、気が付くとそこにはこの自称ブラック・マジシャン・ガールが立っていたのだ。

これまで起きた現象に変に辻褃が合う事で、西条はまさか…と思いは始める。

しかし、やはりまだ彼女の言うことが信用ならない西条は、試しにこう言ってみた。

「じゃあ…証拠を見せるよ?」

「証拠?」

「ああ…お前が“本当にブラック・マジシャン・ガールだ”っていう証拠だよ。正直に話すと、まだこの状況に混乱しているんだ。俺からすれば余りに不可解な事ばかり起きてるからな…」

「証拠…って言われても…何をすれば良いのか、いきなり言われてもサッパリなんだよ」

焦るとはまた違う反応を見せる自称ブラック・マジシャン・ガール。

もし彼女が偽物ならば…

普通の人ならば、嘘を吐いている場合、思わず顔に出るか、言葉に違和感のある詰まり方をするか、堂々と清々しい位にまで演じきるかのどちらかである。

しかし、彼女の反応はそのいずれかにも当てはまらない。

彼女の表情からは、どうしたら自分の事を信じてくれるのか?という真剣に悩む雰囲気漂っている。

その事からか、何となくこの自称ブラック・マジシャン・ガールが、まさか本物では…とさえ思えてきてしまう。

「…なあ」

真剣に悩む彼女を見て、西条は一つの提案を試してみる事にした。  
その案とは

「『ブラック・マジシャン・ガール』は、カードの種族じゃあ魔法使い族モンスターだ。お前が本当に真正銘本物のブラック・マジシャン・ガールだって言うんなら、何か魔法の一つでも使ってみよ」

「え、魔法…？」

自称ブラック・マジシャン・ガールは、西条からの案にキョトンとした表情を見せる。

そして何かを思い付いたかのように、一瞬だけ悪戯な表情を浮かべた彼女は、ニコツと西条に笑みを浮かべた。

「ホントに魔法…使っちゃっても良いんだね？」

「ああ。お前が魔法を使う所を俺に見せれば、俺はお前の事を信じてやる…って、なんで杖を俺に向ける？」

「なんでって、だから魔法を使うんだよ。正確には、これは私の魔法攻撃かな」

キヤハ っと無邪気な笑みを浮かべた彼女とは対照的に、西条の表情は徐々に青ざめていく。

その理由としては、彼女が自分に向ける杖の先端に、何やら不穏なエネルギーが凝縮していくのが見えているからである。

「お、おい…ちょっと待て…!!」

一歩、二歩と玄関に向かって後ずさる西条に歩調を合わせるように、自称ブラック・マジシャン・ガールも一歩、二歩と西条に詰め寄る。

「流石に攻撃するのはナニー」

「駄目だよ。コレはちゃんとした証拠なんだから 黒・魔・導・爆・裂・破!!」

「ま、待てまちよっ!? ぎゃああああ!!!!」

カアツツ…!!

ポバアンツツ!!!!

瞬間、彼女の魔法攻撃が西条に炸裂した。

彼女の放った魔法の余りの衝撃に、玄関のドアは勢い良く開いては閉まり。西条愛用の冷蔵庫はガタガタツ!!と有り得ない揺れ方をしながら横転し。

そして、西条自身は黒こげになり、体中の至る所から煙をプスプスと上げながら、ボタンと倒れ込んだ。

「…あ、やりすぎちゃった…」

どうやら加減を間違えたらしい自称ブラック・マジシャン・ガールは、今も体中から煙をプスプスとあげる西条に慌てて駆け寄った。

「ご、ごめんね！！ まだ上手く調整できてなくて！？ だ、大丈夫！？ 生きてる！？」

ガクガクと肩を揺らされながら、超至近距離で自称ブラック・マジシャン・ガールの揺れる胸をうつすらと見つめる西条。

(信じよ…コイツは本物だって…でないと…)

でなければ、命が幾つ在っても足りない。

たゆんたゆんに揺れる胸を前に西条は、薄れゆく意識の中でそう思う事にした。

爆風によって倒れた冷蔵庫やら散らばったゴミ箱やらを整理し終えた西条は、溜め息混じりに自室の広間へと足を踏み入れる。

そこには、ちよこんと女の子座りをしながら落ち込む魔法少女（？）の姿があった。

彼が部屋に入って来た事に気付いた魔法少女（？）は一瞬だけ顔を拳げると、直ぐに落ち込んだ表情で顔を下げる。

「...ごめん...なさい...」

ポツリと呟くように謝る彼女に、西条の口から再び小さな溜め息が零れる。

先程までの強気で無邪気だった彼女の姿勢は見る影もなく、落ち込んだその姿からは本当に反省しているのだろぅという姿勢が見られた。

そんな彼女の姿を見て、西条は先程の展開を思い返していた。

何もない所から魔法陣と共に現れ、更には魔法によって爆発を起こした。

あれから彼女が手にしていた杖を見せてもらったが、自分からすれば何の変哲もない普通の杖だった。

どこかにスイッチがあつて、押せば爆発するとかいった装置なんてなかった。

何の素材で出来ているかは分からなかったが、本当に只の杖。

今でも頭はパニックを起こしているが、彼女の話しを本当に信じてみても良いのではないだろうか。

西条は床に座ると、今も頭を垂れる魔法少女に向かって、こう告げた。

「…信じるよ」

「…え？」

「なにキョトンとした顔してるんだよ？お前が魔法を使ったら、お前の事を本物だと信じるって言うてただろ？」

未だに西条が言った事が信じられないのか、魔法少女のブラック・マジシャン・ガールは、ポカンとした表情をしていた。

「なんだよ…今度はお前が俺の事を信じれないって顔してるな？」

「ううん…違うの。ビックリしてただけ…」

徐々に表情に明るさを取り戻していくマジシャン・ガールは、自分の事を信じると言うてくれた彼に、恐る恐る聞いてみる。

「でもその…怒って…ないの？わたし、酷いことしちゃったし…」

「そりゃ…さっきまでは怒ってたさ。でも、元を辿れば俺がそうさせた様なものだし…それにさっきの爆発だって、本当にお前の魔法なんだから？」

「うん…」



「だったら、俺はやっぱりお前の事を信じるよ。最初からそういう約束だったからな……」

西条の話しを聞いて、マジシャン・ガールは思った。自分もそうだったように、彼も突然の状況に混乱していただけなんだと。

師匠であるブラック・マジシャンの転移魔法によってこの世界に来たは良いが、自分は彼に信じてもらう為に必死だった。

しかし、どう話せば良いのか。どう上手く説明すれば良いのかが分からなかった。

既にここまで色々とやらかしてしまっただが、彼は自分の事を信じてくれると言ってくれた。

見知らぬ土地で、見知らぬ世界で、マジシャン・ガールは初めて頼れる人を見つけた気がした。

「そう言えば…俺の自己紹介がまだだったな」

そんなマジシャン・ガールに、西条は

「俺は、西条亨。最初…お前の事を邪険にして悪かった。だからさ、お前の事を話してくれないか？」

「なる程な…精霊世界って所は、そんな風になってんのか…」

西条は腕を組みながら、うんと声を唸らせた。

マジシャン・ガールが何故、自分たちの住む人間界にやって来たのか？

そして、彼女から聞かされた精霊界の紛争。

邪神による制圧によって、精霊界は暗黒の世界と化してしまっている事。

それを阻止する為に、自分が人間界に派遣された事。

「んで、お前の使命ってのは…俺達の世界の【幻神獣】を持ち帰って、精霊世界に降臨させる事…って訳か」

「うん。だから私は、まずこの世界で幻神獣を探さなくちゃならないんだ…」

マジシャン・ガールの真剣な表情から、西条は再び小さく唸った。彼女からどんな話しが聞かされるかと期待していたら、結構重苦しい内容で、西条からすれば予想外だった。

抽選が当たりました的な感覚で話を聞き始めたばかりに、最初の淡い期待とは裏腹に、今ではかなり重苦しい雰囲気部屋中に漂っているように感じる。

唸る西条に、マジシャン・ガールは幻神獣の情報を聞き出そうとし

「さいじょおは幻神獣の事で何か知らない？居場所さえ分かれば、後は直接向かうだけなんだよ」

「幻神獣…って、俺の住む世界からして【神のカード】の事だろ？  
だったら、在処は知ってるけど…」

「ホントに!?!」

願ってもない返事に、マジシャン・ガールは即座に立ち上がり、  
座り込む西条の腕をグイッと引っ張り上げる。

「それなら話しは早いんだよ!!　さいじょお、わたしを幻神獣の  
所へ案内して!?!」

「あだだ!?!　ちょ、落ち着けて!!　まだ話しの途中だったの  
!?!」

マジシャン・ガールを再び座らせると、西条は神のカードに関する  
事情を説明する事にした。

「良いか？俺達の世界…つまり人間界では、お前たち精霊世界のヤ  
ツらは、カードとして存在しているんだ」

「うん。その事はこの世界に来る前に、お師匠サマから見せてもら  
った本に書いてあった」

知っているなら話しは早いと思った西条は、窓から見える三上市の中心地を見ながら言葉を続ける。

「あそこに大きなビルが見えるだろ？あれは【トリティニーグループ】って言う大企業で…俺達の世界じゃ、あの会社が遊戯王カードの製造や販売を取り仕切っている」

「……！！」

西条に言われてマジシャン・ガールは、窓から見える天に向かって聳え立つ巨大なビルを眺める。

トリティニーグループと呼ばれたそのビルは、マジシャン・ガールからすれば、自分の世界の神々が封印された塔と重なって見えた。

「何でも昔、あの会社は遺跡発掘の会社だったらしいんだけど…どこかの遺跡で三枚のカードが発見されてから、カード関係の会社に変わっていったって、学校の授業で教えられた」

「三枚のカード…っ！？　さいじょお、そのカードって…まさか！？」

「…ああ。そのカードが、お前が探し求めている…幻神獣と呼ばれるカードたちだ」

「…っ！！」

幻神獣。

その言葉を聞いて、マジシャン・ガールの表情がキリツと引き締められる。

「けど…幻神獣と呼ばれるカードは、俺達の世界じゃ一枚づつしか存在しないし、何よりもカードテキストが読めないんだ」

昔、トリティニーグループの社長が遺跡発掘の際に偶然に発見した神のカード。

そのカードに記された言語は自分たちの世界には歴史上、存在しない文字で記されており、その時点では解読ができなかった。

三枚の神のカードを遺跡から持ち帰ったトリティニーグループは、このカードを研究し、そこからイマジネーションを膨らませ、遊戯王オフィシャルカードゲームを作り上げた。

しかし、やはり神のカードに記された文字は未だ解読できず。今もトリティニーグループ内にて、解読作業が行われている。

「人間界に存在しない文字…もしかしたらそれは、精霊界の文字なのかも…」

不意に呟くマジシャン・ガールのその言葉に、西条は思わず目を見開いた。

それと同時に思う。

マジシャン・ガールの言うように、本当にあちらの世界の文字なのではないだろうか？と…。

「さいじょお。わたしを…あの建物に連れて行って！もし幻神獣のカードに記された文字が、精霊界の文字だとしたらー」

「ああ。お前の言いたい事は分かるよ…けど、時間がな」

徐に携帯電話を開き、時間を確認すると、何時の間にか大分時間が過ぎていたようだ。

「20時17分…流石にもう会社は閉まってる時間だろ。だから日を改めようぜ？明日は俺も、学校は休みだし」

人間界の事情を把握している訳でないマジシャン・ガールは、彼の言葉から何となくの事情を理解した。

「どうやら今すぐにとというのは無理らしい。」

「明日、一緒にトリティニーグループに向かおう。お前の世界が大変だっつてのは聞いてるけど、焦らずにな？」

マジシャン・ガールの緊張した面持ちを見て、西条は安心するように話し掛ける。

この世界に来て間もなく、右も左も分からないマジシャン・ガールは、とりあえず彼の言葉に頷くしかなかった。

「さて、そうと決まれば…飯にしようぜ」

気持ち切り替えた西条はそう言うと、冷蔵庫から夕方に買った食材を次々と取り出していく。

直ぐに目的が達成できなかった事で、今も神妙な表情のマジシャン・ガールは、台所に立つ西条に尋ねてみた。

「ねえ、さいじょお。今から何をするの？」

「なに…って…料理だよ？お前の世界じゃ、食事をするって習慣が無いのか？」

「あるには…あるけど…ギョルルルル…！！」

「へ…っ！？」

マジシャン・ガールが呟くと、途端に彼女のお腹から大きな音が鳴った。

自分でも予想外だったのであろう。とっさにお腹を押さえたマジシャン・ガールは、恥ずかしさで顔を赤面させながら

「なんだ…お前も腹が減ってたのか？」

「ち、違うもん！コレはわたしの新陳代謝が良いだけの話しであつて……！！別にわたしもご飯が食べたいなあとか！もしかしたら、わたしの分のご飯も用意してくれるかなあとか！淡い期待を抱いている訳じゃないんだからね！！」

「……………」

マジシャン・ガールさん、口から涎を垂らしながら話しても説得力は皆無なのでござえますよ？

「ハイハイ…分かった分かった」

「なっ！？ さいじょお！？ さいじょおだつて、人の話しはちゃんと聞くべきなんだよ！！」

「ちゃんとお前の分も作つてやるよ。だから隣の部屋で待ってるよ？…味は期待してて良いからな」

「…ッちゃんと大盛にしないと駄目だからね！！」

「……………」

先程までの発言は何だったのかと思わせる台詞を吐いて、マジシャン・ガールは浮き足立つように台所を後にした。

そんな仕草に思わず笑みがこぼれそうになる西条だったが、この後彼は知ることになる。



彼女の胃袋は、バケツという位に収まらない程の大食らいであるという事を…。

その日の夕食時、西条の部屋から彼の悲鳴が三上市の夜空に響き渡った。

「さいじょお、おかわり」

「もうやめてえ！！ 西条さんの冷蔵庫のライフはとっくに0なのよー！！」

食事を終え、放心状態の西条は台所で皿洗いをしていた。

「…三日分の食料が一食でパァ…三日分の食料が…たった一食でパァ…」

ブツブツと呟く西条の言葉を聞き流すマジシャン・ガールは、やる事がない為に彼の部屋を物色し始める。

精霊界にはない品物の数々に心を奪われるマジシャン・ガールは、部屋の隅に置かれた棚から一つの箱を取り出してみる。

「なにコレ…本？人間界にも魔導書とかつてあるのかな？」

他に何か無いかと、至る所から次々と物を取り出していくマジシヤン・ガール。

あらかた部屋を物色し終えたマジシヤン・ガールは、ふと机の横に置かれた小さなケースに手を伸ばす。

開けてみると、中には彼のデッキが入っていた。

「コレ…！？　もしかしてコレが、私たちデュエルモンスターズ…！？」

人間界での自分たち、デュエルモンスターズに出会えたマジシヤン・ガールは、胸が熱くなるのを感じた。

（こつやってデッキがあるって事は…さいじょお達も、デュエルをするんだね…！！）

自分たちも精霊界で敵と戦う時は、デュエルによって勝敗を決める。

世界と世界の繋がりを感じ、一人感傷に浸りながら次々とカードを広げていく。

すると、彼のデッキの中に、自分にとって馴染みのあるカードが入っている事に気づき、マジシヤン・ガールは思わずその手を止めた。

「あ…お師匠サマのカードだ…!!」

ブラック・マジシャンのカードを取り、マジシャン・ガールは此処に来るまでに師匠に言われた事を思い出す。

(待っていて下さい、お師匠サマ…!! わたしは必ず、幻神獣を精霊界に持ち帰ってみせます…!!)

まるでブラック・マジシャンのカードに祈るように、再び決意を固めるマジシャン・ガールは、ふとある事に気付いた。

「…あれ？」

よく見ると、他の彼のカードに比べ、ブラック・マジシャンのカードだけ至る所に擦り傷が目立っている様に感じる。

いや、明らかに傷物であった。

なぜ、自分のお師匠サマのカードだけ、こんなにも扱いが悪いのか!?

その事に激昂したマジシャン・ガールは

「ちょっと、さいじょお!! コレは一体どういう事なのか、説明して欲しいんだよ!!」

「ん…なにが…って、うライイツ!? 気のせいか!? いや、絶対  
対に気のせいじゃないですよね!? 何時の間にか部屋の中が、足  
を踏み入れる場所が無え位に散らかってるじゃねえか!?」

洗い物をする西条の時点に映るは、自分に詰め寄るマジシャン・  
ガールの背後に見えるゴツチャゴツチャに散らかった部屋の惨劇。  
自分が食器を洗っているものの数分の間に、一体なにが起きたと  
いうのだろうか?

「さてはお前、また魔法か何かで部屋をこんな状況にしまったの  
か!?」

「そんな事よりさいじょお!! 何でお師匠サマのカードだけこん  
な傷物になってるワケ!? 納得のいく説明が欲しいんだよ!!」

「その前に掃除に決まってるだろうがああ!!」

「掃除の前に、せえ、つう、めえ、いいいい!!」

「ちよつ!? 分かった!! 分かったから杖をコツチに向けるな  
!? 頼むから、頼むから魔法は止めてくれええ!!」

いきり立ち、自分に杖を構えるマジシャン・ガールに、西条はも  
う従うしかなかった。

でなければ…また自分が黒こげになり、部屋の中は阿鼻叫喚な地  
獄絵図と化してしまう。

本日、西条の三度目の悲鳴が学生寮に響き渡った。

徐々に徐々に、少しずつ少しずつ。

西条は半分涙目になりながら、マジシャン・ガールが散らかした部屋の中を整頓していく。

何だか今日はこの魔法少女ならぬ迷惑少女に振り回されてばかりな気がする。

（あ、考えれば考える程…西条さん、何だか切なくなってきちゃいました…グスン）

そんな西条の心境を知らず、彼を半泣きにさせた元凶の迷惑少女マジシャン・ガールは、彼の前に仁王立ち

「さいじょお！！ お師匠サマを侮辱した罪は、死んでも償いきれないんだよ！！」

「…俺だって、好きでそのカードをすり減らした訳じゃねえよ」

お部屋のお片付けを一時中断し、西条は部屋の中央に置かれた机

の前に座った。

机の上には、自分のカードが沢山広げられている。

「俺がデュエルモンスターズを始めたのは、中学に入って直ぐだった…」

その当時、自分が通う学校では遊戯王カードが大流行していた。そんな流行に触発され、自分もカードを始めた事を今でも覚えている。

始めたばかりの頃は、デュエルをする度に負けていた。

初期の遊戯王カードというのは、単純な攻撃力での殴り合いが主な戦術であった。

遊戯王カードを始めた当初、レアカードを一枚も持っていなかった西条は、友人等が持つ強力なカード達に散々にやられていた。

その当時の友人である白石直也は、主力の『青眼の白龍』でクラスで敵なし。

自分を遊戯王カードに誘ってくれた結締智恭は、様々な効果モンスターを取り入れてのテクニカルな戦いを駆使し、かなりの強敵だった。

何とかして彼らに勝ちたい。

そう願った西条は、なけなしのお小遣いを使って、店に売れ残っていた最後の一パックを購入した。

そのパックで、西条は生まれて初めてのレアカードと遭遇した。

そう。

そのカードこそ、『ブラック・マジシャン』なのである。

「初めて当たったのが、その『ブラック・マジシャン』のカードなんだ。俺…もの凄く嬉しくてさ…！！ それ以来ずっと、そのカードをデッキに入れてデュエルをしてきたんだ…！！」

西条にとって、初めてのウルトラレアカード。

余りの嬉しさから、西条は『ブラック・マジシャン』のカードをずっと使い続けてきた。それ故に、カードは使えば使った分だけ傷んでいく。

当時まだカードスリーブを付けていなかった西条は、その傷みがより顕著に現れてしまったのだ。

流石に傷みが酷くなってから西条はカードスリーブを取り付けたが、それでもこの『ブラック・マジシャン』のカードを使い続けた。

それだけ、このカードには西条自身の思い入れが詰まっているのだ。

「だから…好きで傷つけた訳じゃないんだ。むしろ今では、俺のデッキに欠かせない…大切なパートナーだな」

「そう…だったんだ…」

彼のカード、もとい自分たちデュエルモンスターズに対する気持

ちを聞いて、マジシャン・ガールは素直に自分の早とちりを反省した。

そういえば精霊界でも、自分の早とちりで師匠を色々困らせた事もあったな、と思い出す始末だ。

「ごめんね…わたしの…早とちりで」

「良しさ。それだけお前が、お師匠さんを好きだって証なんだろう？」

「…うん」

彼の優しい言葉に、マジシャン・ガールはどこか照れながら、自然と笑顔で頷く事ができた。

そして、そんなマジシャン・ガールと気持ちを同じとする様に、西条も照れくさそうに

「へへ…俺もだ」

互いに微笑みあい、少しだが気持ちを通じ合わせた二人。

しかし、二人は気付かなかった。その姿を、カーテンの開いた部屋の窓から見つめる、ある一つの存在を。

彼等の知らない場所で、闇の胎動は静かに脈打つ。



## 序章（後書き）

おはようございます。こんにちは。そして、こんばんは。

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

ここまで読んで、もう既にお気づきの方もいらっしゃるかと思いますが…この小説は以前に僕の書いた小説『頂を目指す者』の過去の内容となっております。

西条亨、マナ、白石直也、結締智恭が東区に来る前…三上市での活躍を描いた作品です。

以前に投稿していた同じタイトルの『決闘者の道』ですが、自分で内容が余りにも酷いと感じられ、そのデータを全て消去しました。

こちらの勝手な都合、言い分での行為に、もしかしたら不快に感じ方もいらっしゃるかと思えます。

前回の続きを待っていた方もいらっしゃるかと思えます。

それらにしましては、この場を借りて謝罪の意をお伝えしたいと思つ次第です。

今回の内容は、以前の投稿に比べ如何でしたでしょうか？

各状況のキャラクターの心理描写。その状況を伝えるための表現方法。

考えに考えたつもりですが、以前よりも楽しく読めた、と思つて下されば幸いです。

この小説は、僕にとって創作活動始まりの作品です。

なんとしてもこの作品は完成させたい。

この作品で皆様に有意義な時間を過ごして欲しい。

そんな想いで、今回の序章を書かせてもらいました。

さて、9月より遊戯王カードの制限改定が更新されました。その中でも多くの方が、このカードに注目したと思います。そのカードは…

《カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -》

かつて遊戯王カードの一時代を形成したカオスモンスターの一体でそのステータス、効果が非常に有用なモンスターの一体。

その効果は非常に優秀で、現環境でも1ターンキルをするに十分な力を秘めています。

このカードの復帰に思わず目を疑った方も多いのではないのでしょうか？

しかし、今は様々なデッキが生まれ、様々なカードが生まれています。

今回禁止となったカードや、制限・準制限となったカードをどう上手く使いこなしていくか？

代行天使やら暗黒界が登りつめそうな環境ですが、これからのカードに期待したい所です。

モンスターエクシーズ？

はいはいローチローチ…

ローチ買占められているのか、近くの書店では1冊も本が売ってない(涙)

さて、愚痴はここまでにして…

ちなみに今回の作品から、作中に使用する禁止・制限は2011年9月1日のを適用させていただきます。

それにしても『頂を目指す者』の時系列で言えば、過去の作品を書く訳ですので…気分はちょっととしたイリアステルです。

ZONE「過去の歴史を変えねば、未来は救われない！」

ちなみに第2話は、9月5日に掲載予定です。

それでは、今回はこの辺りで筆を置かせてもらいます。

次の話でまた皆様と合える事を願いつつ。新しい方に出会える事を祈りつつ。

長文、失礼しました。

## 追跡者

精霊界。

八畳程の石垣で詰まれた部屋に、重鈍な空気が辺りを包み込む。その部屋の照明は壁に設置された松明のみで、所々薄暗く感じられた。

小さな窓、もとい通気口から入る突き刺すような風が松明の炎を揺らし、部屋を覆う影は幻想的に揺らめく。

すると、その空間に似つかわしいくぐもった声が響いた。

「ふむ…。やはり次に動いたのは魔法都市であるか…」

その声の主は、異形な姿をしていた。

松明の明かりに照らされた獅子の顔、上半身は屈強な身体、そして下半身には四つの獣の形をした剛脚。

誰が見てもその姿は人の形をしていないと言っだろう。

「で…その詳細は？…ふん。かの最上級魔術師の弟子が人間界に向かった…？」

そう言葉を発する獅子顔の口元は愉快そうに笑みを浮かべる。

しかし、その姿はなにか異常だった。

部屋の中には獅子顔の獣一人だけで、他に話せるような存在は誰も居ないのである。

携帯電話や無線機なども見当たらない。

それはまるで、ここには居ない誰かと“魔法を使って交信しているかのような…”。

「ふん。異世界への転移など、かの最上級魔術師ならば容易である。う…だが我々として、転移に長けた者もある」

獅子顔の獣は思慮を巡らせる。

「ヤツらが向こうの世界の何を狙っているかは知らん。だが…もし我等が神“邪神様”の障害になるのであれば…見過ごす訳にはいかぬ…!!」

獅子顔の獣はその表情をぐしゃり、と歪ませる。

歪ませたその笑みは、獅子の獣顔と不気味なくらいに釣り合っていた。

「……ほう、もう既に手を打ってあったか。成程…貴公が向かうとするならば、私はここで静観しているとしよう…」

獅子顔の獣が誰と話しているかは分からない。

しかし、彼の発した言葉からは、それなりの余裕が伺える。

薄気味悪い部屋からは暫くの間、異形の主の笑い声が響いていた。

三上市と呼ばれるこの場所は、決闘者の聖地と呼ばれる所である。比較的大きな街で、近代科学が発展した場所であり、深夜近くになると街のイルミネーションが至る所で光っている。

そんな夜の街を、二人の若き男女が出歩いていた。

男女の内、誰もが魅入るであろう少女は、どこか拳動不審気味に辺りをキョロキョロとしている。

「こつちの世界は何だか凄いね！あちこちピカピカ光ってて、夜なのに全然明るいんだよ！」

トタトタ、と小走りし、まるで今の状況を楽しんでいると全身で表現する少女。

その少女が言った“こつちの世界”、という言葉に違和感を感じるかもしれないが、これにはちゃんとした理由がある。

彼女の名はブラック・マジシャン・ガール。

自分たちの暮らす世界を救う為に、精霊界から遙々と人間界にや  
って来たデュエルモンスターなのだ。

そんな彼女は現在、カードイラストで着ている様な衣装ではなく、  
どこか男物の衣服を身に付けてはしゃぎ回っている。

これには理由があり、彼女のそのままの格好だと不自然に目立つ  
為、間に合わせの服を着たからである。

(ネオンが珍しいなんて…コイツが居た世界にはこういった技術が  
無いのかな…?)

マジシャン・ガールのはしゃぎ様から察するに、精霊界ではネオ  
ンという物は存在しないのかもしれない。

彼女の話しによると、今の精霊界は邪神によって暗黒の世界とな  
りつつあるらしい。分かり易く言えば、戦争状態という事だ。

闇夜の中で光など発したら、自分から敵に居場所を知らせる様な  
ものだ。

恐らくそういった事情から、精霊界では現実的に光を失っていっ  
たのだろう。

しかし、そんな彼女の言葉をそこまで理解していない相方の少年、  
西条亨は、浮き足立つマジシャン・ガールに。

「あゝ勝手に先に行くなよ、はぐれたりしたら面倒だからな」

「うん！大丈夫、分かってるよ！」

大丈夫、とは言うが、その発言に些か不安に感じてしまうのは気のせいでしょうか？

西条は軽く溜め息混じりになりながら、自分の前で子供のようにハシャぐマジシャン・ガールを見た。

(こっし見ていると…俺たちと何ら変わらないんだけどな…)

西条の脳裏に浮かぶのは、つい数時間前の出来事。

突如、部屋の中に魔法陣が出現し、その中から遊戯王カードのイラストそのままの格好で彼女…ブラック・マジシャン・ガールが現れたのだ。

彼女が本物かどうか確かめさせたら、自分だけでなく、部屋ごと爆破されてしまった。

まさか命懸けになるとは思っていなかった。

「さいじょお、さいじょお。まだスーパーって所には着かないの？わたしは今お腹が減っていて、もう倒れ死にそうなんだよ！」

彼の部屋で冷蔵庫の中身を全て喰らい尽くした元凶である少女は、ぷくつと頬を膨らませながら西条に詰め寄る。



「スーパーじゃなきゃ、食べ物は置いてないの？」

「いや…すぐ隣にあるコンビニなら食べる物なんて幾らでもあるけどだな…ってヲイツ！？」

コンビニの方が値段が高くなってしまつたのですよ。と説明する間もなく、空腹少女マジシャン・ガールは「たべものおお…!!！」と、単身で食料庫<sup>コンビニ</sup>へ突撃していった。

「コラアア!! 人の話しは最後まで聞きなさいってえの!! っで、なんつう馬鹿力だ…コイツ…ツ!？」

「放して、さいじょお!! 食べ物わたしを呼んでいるんだよ!! ！ 幻神獣を解き放つには、満腹状態じゃなきゃ出来ないんだって、さいじょお知らないでしょ!？ 精霊界じゃ常識なんだよ!？」

「嘘だ!! お前の世界の事情だか常識だか知らねえが、それが嘘だつて事ぐらい誰にでも分かるぞ!!！」

店の前でドタバタギャーギャー騒ぐ西条とマジシャン・ガールの二人は、行き交う人達の注目の的になっていた。

「いい まあ 食あ べえ たあ いいい!!！」

「我慢しろ おお!!！」

余りの空腹に駄々をこねるマジシャン・ガール。  
財政的に少しでも安く買いたい西条亨。

いがみ合う二人のその姿は、周りの目からはどこか微笑ましく映っているらしく、誰も仲裁に入る者は居なかった。

すると、コンビニのドアが開き、中から一人の大きなアフロが特徴的なオバサン店員が出て来た。

オバサンはスウウ…と大きく息を吸い込む。

どうやら店の前で騒ぎ立てる迷惑な二人は、まだ自分の気付いていないらしい。

「それに、このコンビニは品揃えが悪い事で定評があるって有名なんだぞ！！ それに店員のおばちゃんは態度や口が悪いゴリラ以外の何者でもねえし！！」

ブツチイイイ…！！

次の瞬間…。

三上市の一角にて、西条とマジシャン・ガールの二人に、ゴリラおばちゃんの鉄拳が振り降ろされた。

「…ふう」

厄日というのは正しく今日みたいな日の事を言うのではないだろうか。

部屋の隅に腰を降ろした西条は、溜め息を吐くしか無かった。

夕方はタイムバーゲンに間に合わずに滑って転ぶわ。

家に帰ったら精霊界からやって来たという魔法少女からの爆撃をくらうわ。

成り行きで魔法少女に料理を振る舞えば、三日分の食料全てを食い尽くされるわ。

外に出てみればコンビニのゴリラおばちゃんから鉄拳制裁されるわ。

マジシャン・ガールが盾にするものだから、コンビニのゴリラおばちゃんの鉄拳制裁が二発に増えるわ。

たった一日の半分で、既に西条は身も心も疲れ果てていた。

ここまで内容の濃い一日は、生まれてから一回でもあっただろうか？とさえ思えてくる。

それもこれも全て…。

「うわぁ…！！　さいじょおって、いっぱいカードを持っているんだね…！！」

西条を振り回した元凶である少女、マジシャン・ガールはそんな彼の気を知らずか、彼の所有するカードを床一面に広げてはしゃい

でいた。

(…さつき一緒に出掛ける前に掃除したばかりだったのに…っ!!)

無自覚なのが余計に質が悪い…と、西条は込み上げるストレスをグツと堪える。

しかし、いつまでもイライラしては駄目だ。これからの事を考えよう。

そう思った西条は、カードを触って楽しんでいるマジシャン・ガールに話し掛けた。

「なあ、明日になったら一緒に神のカードの所に行こうって行っただじゃん？」

「うん」

何の気なしに返事をするマジシャン・ガール。

しかし、次の西条の言葉に、マジシャン・ガールは衝撃を受けた。

「それまでの寝床って…お前どつするの？」

「…え？」

寢床：つまりは宿。

そこまで深く考えていなかったマジシャン・ガールは、何を今更…とても言いたげな表情で

「さいじょおが泊めてくれるんじゃないの？」

まだ自分は泊めるとも何も言っていないのですが…と、西条の口から軽い溜め息が洩れた。

西条が今暮らしている場所は、三上市にある第七デュエル高等学校の学生寮だ。

やはり寮というだけあって、それなりの規則がある。

当然、西条が住んでいるここにも規則はある。

「一応言っておくが…この建物は原則として契約者以外の住み込み、若しくは泊まり込みは禁じられているんだよ」

「…え？」

どうやらマジシャン・ガールにも、西条の言った言葉が理解できたようだ。

その表情からは「…ウソ…」と、焦りからくる冷や汗が流れ落ちている。

「でもでも、言わなきゃバレないでしょ!？」

「まあ大抵は大丈夫だと思うが…」

仮にマジシャン・ガールも一緒に暮らしたとしよう。

しかし、その事が周囲にバレるのは時間の問題である。

そう思うと西条の口からは、「絶対に大丈夫だ」とは言えなかった。

「…じゃあ…わたし…ドコに行けば良いの？」

不安げな瞳を向けるマジシャン・ガールに、西条は少なからず胸が痛んだ。

お金も持たず、身分という証明もなく、ましてや見知らぬ土地で。

このままでは間違いなく、マジシャン・ガールは一人で野宿をする事になるだろう。

よくよく考えれば、女の子が一人で野宿をするというのは、余りに危険で余りに過酷だった。

彼女が泣き顔で「どうしよう…」と尋ねるのも無理はない。

思案を巡らせる西条。

そんな彼が考え抜いた答えは…。

「…どこに行かなくても良い」

「…え？」

「お前が寝る時は、この部屋を使えば良いさ。俺はその間、友達の部屋にでも泊めてもらうから…」

「そんな…さいじょお、出てっっちゃうの…!？」

「ただし、静かにしてないと駄目だぞ？五月蠅くしたら、隣の部屋のヤツとかにバレるからな…!」

西条はそう言いながら、鞆の中に適当な荷物を放り込んでいく。その様子をマジシャン・ガールは、ただ狼狽えながら見ている事しか出来なかった。

「明日の朝7時には帰るようにするから…それまでここで、静かに待ってるよ？」

「あ……さいじょお…っ…!」

言うだけ言うと、この部屋の主である西条は出て行ってしまった。静まり返った部屋からは孤独感がなく…。

マジシャン・ガールは、彼が出て行った玄関のドアの前から動けなかった。

二人は気付いていなかった。

今の自分たちの様子を伺う、ある者の存在に…。  
二人がそれぞれに離れた事を確認すると、その者は行動に移す為  
に、ゆっくりと足を踏み出した。

一人になった部屋の中は静寂に包まれていた。

ベッドの上で体育座りしながら俯くマジシャン・ガールを、窓か  
ら入り込む月明かりが照らす。

うつすらと見える彼女の表情はどこか儂く、不安や孤独感が垣間  
見えた。

彼女からすれば正直な話し、西条には出て行って欲しくなかった。  
見知らぬ土地、見知らぬ世界で、マジシャン・ガールが初めて出  
逢った相手。

今更にしてマジシャン・ガールは気付く。

彼は何だかんだ言いながら、自分の為に非常に協力してくれてい  
るという事を…。

しかし、それでも。

マジシャン・ガールは一人になるという状況が嫌だった。

(明日は…遂に幻神獣と対面するんだ…!! わたしが仰せつかつ  
たこの任務の成果が…精霊界の命運を分ける…!!)



マジシャン・ガールは、この世界から神のカードと呼ばれる幻神獣を、自分の世界に持ち帰る任務を受けている。

自分がこうしている間にも、精霊界では今も邪神たちが世界を制圧しようとして動いているに違いない。

あちらの世界の現状が理解出来ない今、マジシャン・ガールに焦りや不安がのし掛かる。

それと同時に、ふと思う。

(…でも…もしわたしが、幻神獣を持ち帰る事が出来なかったら…！？)

それはそれで、自分たちの世界はいつたいどうなってしまうのだろうか…。

言いようのない不安が更に増幅し、「ヒ…ッ!?」と嗚咽がこみ上げてくる。

マジシャン・ガールはとっさに頭を振り

「だ…大丈夫!アッチにはお師匠さまだって居るんだもん!絶対、絶対に…!」

口に出す事で、込み上げる不安を払拭しようとする。

一人ぼっちという状況が自暴自棄にさせる。

こうなるのが嫌で、マジシャン・ガールは西条には出て行って欲しくなかった。

話していれば、多少の気は紛れるからである。

部屋にある時計の針を確認すると、まだ夜中の十一時を過ぎたばかりであった。

確か彼が帰ってくるのは、明日の朝七時だった筈だ。

(寂しいよお…)

ベッドの上でうつづくまる彼女は祈るではなく、懇願するようにポツリと呟く。

すると…。

「さいじょお…早く…帰って来てよ…」

『ピンポーン…!…!』

「ッ!？」

それは突然だった。

マジシャン・ガールが呟いたと同時に、備え付けのインターホンが鳴り響いたのだ。

『ピンポーン…ピンポーン…!…!』

一瞬、何が起きたのか分からなかった。

マジシャン・ガールは反射的に後ずさり、その華奢な身体はギョ

ツと縮こまる。

『ピンポーン…ピンポーン…ドンドン…!』

暫くして…インターホンの音から無造作にドアを叩く音に変貌し、マジシャン・ガールは恐怖心から涙目になり、歯をガチガチと鳴らせた。

人間界の常識で言えば、インターホンが鳴るといふ事が来客者を意味しているのだが、マジシャン・ガールからすればそんな常識は知らない。

しかし、これだけは分かる。

あの玄関の向こうには、自分にとって得体の知れない何かが居るといふ事を…。

(なに…なんなの一体…っ!?!? 分からない…どうしたら良いのか…分からないよ…さいじょお!!)

今にも泣き出しそうなマジシャン・ガール。

すると、玄関の向こうからこんな言葉が彼女の耳に入ってきた。

『ドンドン…開けてくれ。俺だ…!』

「え…さい…じよお…？」

初めは自分の耳を疑った。

しかし、今のマジシャン・ガールには深く考えるような余裕は無かった。

さいじよおが来た。理由はどうあれ、帰って来てくれた！

「さいじよお…。さいじよおなの…！？」

『ああ、俺だ。だから開けてくれ』

「ま、待ってて…！！」

今、鍵を開けるから！と、マジシャン・ガールは声の主へと急ぎ足で向かう。

今の彼女には、彼の声が希望に見えた。

今の彼女には、彼の存在が必要だった。

ガチャリ…ッ…！！

彼が帰ってきたという思い込みの安心感で、マジシャン・ガールは盲点だった。

期待に胸を膨らませるマジシャン・ガールは、玄関のドアを勢い良く開けた。

「さいじょお!! 帰ってく……………え？」

しかし、期待に満ちたそれまでの彼女の精神は、次の瞬間、粉々に砕け散った。

結論から言えば、そこに立っていたのは彼ではなかった。

月明かりを背にしたその姿からは、その者から放たれる異形の存在感が浮き出していた。

「全く…手間を掛けてくれる」

やや重みがあった、まるで変声機を使ったかのような声を発するその者は、啞然とするマジシャン・ガールの眼前に腰に下げた剣を突き出す。

「お前がこの世界に来て何を成そうとしているのか…全て吐かせてやる」

「そんな…何で…っ!？」

その者の姿は、こちらの世界に住む人の格好をしていなかった。

頭部にはねじ曲がった二本の角。顔や腕や身体や脚の皮膚の色は、月明かりで紫に彩どり。肩から背中にかけて、モスグリーンのマントが風に靡く。

マジシャン・ガールは、突き付けられた剣の切っ先を見つめながら

「デーモン・ソルジャー…精霊界の者が、どうして人間界に来ているの…!？」

精霊界にて悪魔族の戦士達の中でも、精鋭部隊と名高いデーモン・ソルジャーと呼ばれたその者は、無機質な表情のまま、マジシャン・ガールに向けて切っ先を押し込んでいく。

喉元に軽く突き刺さる一部分からは、うっすらと赤い滴が床に零れ落ちた。

「貴様の話しに付き合っつもりはない。黙って我々に付き従え…」

「我…々…っ!？」

その言葉に言われて、マジシャン・ガールは初めて気が付いた。いつの間にか自分の両側にも、それぞれに二人のデーモン・ソルジャーが立っていた。

目の前から突き付けられた剣にばかり注意してしまい、周囲の警戒を疎かにしていたのだ。

完全に包囲されたマジシャン・ガールに、打っ手は無かった。

このままコイツ等に連行されれば、情報だけを抜き取られ、自分は間違いなく死を迎えるだろう。

それだけは、それだけは何としても避けたかった。

「……ーッ!?」

ジャラジャラ…ッ!!

ガシィッ!!

マジシャン・ガールが行動に移そうとした瞬間だった。

両側に立っていた二人のデーモン・ソルジャーが、闇の力を凝縮させた鎖でマジシャン・ガールの身体を縛りあげてしまった。

「んあっ…!? なに、コレ…っ力が…!?」

上手く足に力が入らず、その場にガクリと膝をついてしまうマジシャン・ガール。

これでは身動き一つとれず、ヤツらの好きなようになってしまう。

「…場所を変える。連れていけ」

正面に立っていたデーモン・ソルジャーがそう言うと、マジシャン・ガールの眼前に二人のデーモン・ソルジャーが立ち並んだ。

(そんな…わたし…っ…イヤだよ…っ、助けて…っ!)

自分に向け迫り来る悪魔の手に、マジシャン・ガールの悲鳴が響

き渡った。

西条亨は、三上市の夜の街を渡り歩いていく。

マジシャン・ガールを部屋に泊め、自分はこれから友人の部屋へと乗り込むのである。

最初は、マジシャン・ガールが言うように一緒に過ごそうかと考えた。

しかしよく考えてみれば、マジシャン・ガールのような美少女と呼ぶに相応しい相手と一緒に、同じ部屋で一夜を共にする…という言葉には、なにやら厭らしい意味を期待しそうではないか。

それが健全な男子高校生なのだが、西条はウブなのだ。照れ屋さんなのだ。

寮の規則もあるが、実を言うと彼は、ただ単に気恥ずかしくなつて飛び出しただけだった。

そんな純情少年である西条は、繁華街の路地裏にある木箱に腰を降ろした。

耳に当てた携帯電話からは、彼の友人の声が聞こえてくる。

『ふうん…で、俺の部屋に泊まりに来たいと言う訳か』

「そうなんだよ。最初、結締のヤツに電話してみたら…何か今日は合コンで朝まで帰って来ないみたいだし。それで、白石ならどうか



と思つてさ…」

『合コンだと…！？ 羨ましい限りだ…。あ、ちなみに西条よ、最初に言つておくが…泊まりは無理だ』

「え？」

『俺は今、エロゲーで忙しいのだ！！ 今ちょうど三人目のヒロインを墮とせるかどうかの瀬戸際なのだ…！！ たとえ誰であれ、この俺の有意義で貴重な時間を潰すのは、西条よ！！ 貴様とて許さんぞ…！！』

ブツツ… ツーツ、ツーツ、ツーツ…

一方的に電話を切られた西条はガツクリと頭を垂れた。

結締みたく、朝まで帰つて来ないのなら話しは分かるが、エロゲーしてるから駄目という断られ方は、生まれて初めてだった。

西条は溜め息混じりに携帯電話を開き、次々と電話帳を検索していく。

誰かわたくしめを泊めてくれる心優しい方はいらっしやらないだろうか？

「はあ…誰も居なかったら、ファミレスか漫喫で時間を潰すしか無  
いかなあ？」

そうボヤいていると、ポポポポポ…ツ…！…と西条の携帯電話に

着信が入った。

液晶画面に映るその名前に、西条は「イ！？」と驚きの表情になる。

「寮監から…ッ!？」

西条はガバツと立ち上がり、まさか…!？と声をあげる。  
もしかしたら、マジシャン・ガールの事がバレて、連絡が来たのではないかと。

そうであるなら、一体どんな処罰が下されるか……想像しただけで、西条は思わず身震いしていた。

「…はい、もしもー」

『夜分遅くに悪いわね、西条くん…楠くすのきです。私が何を言いたいのかわかるわよね?』

バレた。

確実に寮監にバレている。

西条はそう、とっさに判断した。

「あの…先生、スイマセン…直ぐに帰ります」

受話器の向こうから、寮監の「今すぐ」という言葉が聞こえてきた。

どうやらマジシャン・ガールは大人しく待つ事ができないようだ。まさかこんなに早くバレるとは思ってなかった。

電話を終えた西条は深い溜め息と共に、来た道を引き返していった。

どうやら最近、デュエルモンスターズのコスプレでも流行っているらしい。

寮に帰る途中すれ違った人達が、よく出来たデュエルモンスターズのコスプレだと言っていた。

最初はマジシャン・ガールの事かと思い、詳しく訊こうと聞き耳を立てたのだが、どうやらコスプレはマジシャン・ガールではなく、デーモン・ソルジャーとの事。

マジシャン・ガールがまた何かやらかしたのかと一瞬危惧したが、どうやら違ったらしい。

それはそれで、心配事の種が一つ解消された。

しかし、今の西条には問題の種が山のように積もっている。

今現在、寮の入り口の前で仁王立ちする寮監兼、クラスの担任である楠ミナは、自分の前で青ざめた表情を浮かべる西条亨を、視線だけで黙殺していた。

端正な顔立ちからなるスリムな体型。

ピンクのジャージ姿からでも分かる控えめな胸。

夜風に靡く艶やかな茶髪のポニーテールが特徴的な楠ミナ先生は、小刻みに震える西条に、顎で促した。

「…コッチ、来なさい」

「…は、はい……」

促されるままに足を動かす西条の頭は、必死になって弁明を考えていた。

マジシャン・ガールの事をどう説明しよう？ 精霊界云々とか言っても信じてもらえるだろうか？

そして何より、今回あの馬鹿は<sup>マジシャン・ガール</sup>一体何をやらかしたのか？

大人しくしていなさいと、あれだけ言ったのに…！！

うーん…と西条が思考を張り巡らせていると、先導する楠ミナ先生の足が止まった。

止まった場所とは、自分の…西条が使っている部屋の前だ。

そして楠ミナは言う。

「コレ…どづいう事が、説明してもらえるかしら？」

「…ッ！？」

余りの光景に、西条は目の前の現実が一瞬、理解できなかった。

開けっ放しの玄関の扉。

まるで硬い金属が何かで打ち付けたであろう壁や扉の凹み。

そして何より、中から玄関を開けた者であろう、床に広がった赤黒いシミ。

彼にとって日常離れしたその光景。

これには理由を求められても、直ぐに説明できるような状況ではなかった。

「…な…っ…だよ…っ!？」

開けっ放しの玄関から、部屋の中を窺う西条は、更に衝撃を受ける。

いない。

部屋の中に居る筈のマジシャン・ガールがいない。

(アイツ…どこに行ったっていうんだよ…!?)

「夜中なのに変な物音はするわ、仕舞には女の子が大声で君の名前を叫ぶわで…西条くん。誰か連れてきてたの?」

「っ!?!? (大声で…アイツが…!?)」

西条の中で言いようのない不安が渦巻いていく。  
床に流れた血の痕。

そして、彼女の助けを求めたであろう叫び。

西条は奥歯を一瞬だけ噛み締め

「…先生…っ！！ 声が出たのって…いつ頃なんですか…！？」

「君が戻ってくる10分位前よ…あの声で、私も気付いたんだし」

楠ミナ先生が話したと同時に、西条は一気に駆け出した。

「っ！？ 待ちなさい西条くん！！ アナタ、どこへ行くつもりなの…！！」

「スイマセン、先生！！ ちゃんと戻りますから…！！」

制止の声を振り切り、西条は学生寮から飛び出した。

迂闊だった。

認識が甘かったとしか言いようが無かった。

（そつだよっ…何でもっと早くに気付かなかったんだ…！！ アイ

ツが俺達の世界に転移して来れたなら、他のヤツも転移出来るかもしれないって…！！）

マジシャン・ガールは精霊界で、邪神を崇める連中と戦っていたと話していた。

現場に残された痕跡から察するに、マジシャン・ガールは敵に襲われた。

あの時、なぜ一緒に居てやらなかったのだらう…と、西条は悔やみきれない気持ちでいっぱいだった。

がむしゃらに街に走ってきたは良いが、肝心のマジシャン・ガールが何処に向かったのかは分からない。

しかし、西条には思い当たる節があった。

それは学生寮に戻る途中に、よく出来たコスプレの話聞いていた事だ。

（確か…話しによると…っコスプレ集団は、三上川に向かった筈だ…！！）

一か八かの大勝負。

もしかしたら、既にヤツ等はマジシャン・ガールを連れて、精霊界に帰ってしまったかもしれない。

しかし、だからといって諦める西条ではなかった。

(こんな半端に消えられちゃ、後味が悪いんだよ!！)

自分が向かった所で、何が出来るか分からない。

しかし、放っておける程、人としての心は腐ったつもりはない。

目的地(三上川)へと向けて、西条亨は一心不乱になって駆けていった。

三上市の西側に、南北に伸びる大きな川が流れている。

通称、三上川と呼ばれるその河川は、対岸を繋ぐ為の巨大な鉄橋が建設されている。

その鉄橋の下に広がる区間にて、一人の少女の苦悶な声が響いていた。

「ハア…ハアっ…ッああっ!？」

ガストゥ!…っと、少女の横顔が地面に押し込められる。

這い蹲り、殴られたように顔を腫らすその少女マジシャン・ガールの周りには、異形の悪魔戦士デーモン・ソルジャー三人が取り囲んでいた。

端から見れば、一人の少女に対する集団暴行。

しかし、周りには人の気配はなく、誰もその事に気付かない。



「いい加減に吐いてもらおうか。これ以上は貴様にとって、苦痛が長引くだけだ」

朦朧とする意識のマジシャン・ガールに、デーモン・ソルジャーの一人が問い掛ける。

「ハアっ…ハアっ…ハアっ…!!」

しかし、マジシャン・ガールは口を開かない。

仮に自分が消滅しようとも、次なる者が自分の代わりに人間界に赴き、幻神獣を持ち帰ってくれるだろう。

しかし、今ここでその事を敵に知られる訳にはいかない。

マジシャン・ガールは決死の覚悟で、今という状況を乗り切ろうと必死だったのだ。

「貴様はデュエルで我々に敗北したというのに、まだ吐かぬか…往生際が悪い女だ…!!」  
「フンっ!!」

「んあっ!?! ケホッ、ケホッ…ッ!!」

マジシャン・ガールの腹部に重い一撃が響く。

嘔せ返り、うずくまる少女相手にも、悪魔は容赦しなかった。

すると、一人のデーモン・ソルジャーがマジシャン・ガールに背を向け、跪くような姿勢をとった。

うつすらと視線を向けると、マジシャン・ガールはハツとなり、息を詰まらせた。

そこには何時の間に居たのであろう、もう一人の異形の主が君臨していたのである。

その異形の主に対してデーモン・ソルジャーは頭を下げたまま

「邪帝様、申し訳ございません。手間取ってしまつて…」

(邪帝…っ、そんな…まさか…っ！？ 邪帝ガイウス…っ！？ 【王】  
クラスの…デュエルモンスターまで…っ！！)

邪帝と呼ばれた異形の主は、黒ずくめの甲冑から覗く赤い眼光をマジシャン・ガールに向ける。

マジシャン・ガールは邪帝の放つ邪気に当てられ、青ざめた表情から唇が青紫へと変色していった。

「続ける。何故この異世界に来たのか…何が目的なのか…何として  
もその小娘から吐かせろ」

邪帝の言葉に、再びマジシャン・ガールを三人の悪魔が取り囲む。  
無機質な表情からなる残虐な視線が、マジシャン・ガールに向けられる。

マジシャン・ガールは悟る…もう自分は、此処までなのだ。

思い返せば、自分はちつとも成果を上げられなかった。

まだ精霊界に居た頃は、師匠であるブラック・マジシャンに付き従い行動してきたが、大した活躍はできず…。

何をするにも、失敗続きだった。

周りからはブラック・マジシャンが有用すぎて、なぜ弟子であるマジシャン・ガールはこうも落ちこぼれなのだ？と、陰で非難されていたのを覚えている。

初めて聞いた時はショックだった。

しかし、マジシャン・ガールは明るく振る舞う事にした。

失敗がなんだ。だったら次は成功させてやる！と、前向きに考える事で、モチベーションを高くしていった。

しかし、失敗は続いた。

もしかしたら、自分はブラック・マジシャンの弟子である事は、間違っているのではないかと、自らの存在を否定しそうになった。

そんな時だった。

師匠であるブラック・マジシャンから、今回の任務の話しをされたのは…。

『弟子を信用しない師匠など、どこにいる？』

人間界に向かおうと決意させられたその言葉が、マジシャン・ガールにとって唯一の救いだった。

人間界に来てからも、何だかんだありながら、西条亨という優しい協力者を得られた。

自分の為に料理をしてくれた事だって、部屋を貸してくれた事だって、幻神獣の事だって…。

人間界の右も左も分からない自分に、西条は本当に資力してくれていた。

(今頃…さいじょおは何してるかな？きつと、わたしの事なんか…知らないよね？…お友達のとこに居るんだもん…でも、今は…来て欲しくないな…)

あの時、思わず助けを求める意味で彼の名を叫んでしまったが、今の気持ちは逆であった。

彼にこんなボロボロになった自分を見て欲しくない。

彼にはこれ以上、自分のせいで傷ついて欲しくない。

マジシャン・ガールの瞳から、涙がポツリ、ポツリと零れ落ちる。

(ごめんね、さいじょお…明日一緒に…幻神獣のトコへ行こうって約束…守れそうにないや…色々迷惑かけちゃって…ホントに…ごめんね…)

彼に対する懺悔の気持ちの中、隣に立つ悪魔の手が自分に向かって伸ばされる。

迫り来る悪魔の手を見て、マジシャン・ガールは一瞬。

向こうからやって来る一人の少年の姿に、ほんの一瞬、自分の目を疑った。

「…!？」

どうやらデーモン・ソルジャー達も彼の存在に気付いたらしく、伸ばす手を退げて少年の方に振り返る。

(…なん…で…っ!?)

マジシャン・ガールは目の前の光景が信じられなかった。

来てくれる筈がないと思っていた。

来てほしくなかった。

この戦いに、彼を巻き込みたくなかった。

こんな姿の自分を見られたくなかった。

それでも、彼はやって来た。

ツンツン頭の黒髪に、白いカッターシャツと黒の学生ズボン。

マジシャン・ガールにとって、それは見間違える事のない、西条亨だった。

マジシャン・ガールの気持ちは複雑だった。

来てほしくないと願ながらも、それでも来てくれた彼に、マジシャン・ガールは嬉しさを感じていた。

初めは驚いた顔をした西条だが、地面に横たわるマジシャン・ガールや、彼女を取り巻く異形の連中を見て、その表情を徐々に険しくする。

「貴様は…あの部屋の住人か。何の用だ」

デーモン・ソルジャーの一人が、西条に対して問い掛ける。  
西条は、身体を微かに震わせながら

「…っお前等こそ…ソイツに何してやがる…!？」

その声は震えていた。

それは脅えからくるものでは無い事は明らかだった。

「見ての通りだ。この小娘が吐かねば、次は貴様に訊こうと思って  
いた所だ」

あまりに淡白に答える異形の者、デーモン・ソルジャー。  
その返事が、西条の神経をより逆撫でた。

「……………い…お……………!?!」

「!?!」

そこで、西条は見た。

地面に横たわる少女が、ボロボロになりながらも自分に向けて手を伸ばす姿を。

その手は所々皮膚が剥けていた。

その身体は至る所に血が滲んでいた。

彼女が身に纏う服は、それぞれに破られ、斬られた部分が見えた。

そんな彼女の顔からは、大粒の涙が流れ落ちていた。

「……さい……じよ……お……」

「……!?!」

その瞬間、西条はキレた。

「……れるよ」

「……?」

「……!?! マジシャン・ガールから離れるって言ってんだろッ  
!?! 聞こえねえのか、三下アア!?!」

## 追跡者（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の内容は如何でしたでしょうか？

精霊界からの追っ手に捕まったマジシャン・ガールを助けに現れた西条。

次回からいよいよデュエルが開始されます。

今回の小説を執筆するに当たって僕が心がけているのが、その時の描写を具体的に書いていこう、という事です。

例えば：文庫本なんかを読んでいると分かるのですが、作品の流れというのは大きく分けて2種類あると思います。

一つは、今回僕が心掛けていているような【その時々 of 描写を書き表し、具体的内容を読み手に伝える】方法。

そしてもう一つは、【キャラクターの会話を重点に置き、会話の流れで内容を進めていく】方法です。

これにはどちらにも一長一短があります。

一つ目の【その時々 of 描写を書き表し、具体的内容を読み手に伝える】方法ですが、これは読み手にその場その場での描写が伝わり、感情移入しやすい表現方法かと思えます。

反面、文章量が多くなり、途中で読み手が疲れやすくなってしまふというデメリットがあります。

一言で言い表すなら「もっさり感」。

そして二つ目の【キャラクターの会話を重点に置き、会話の流れ



で内容を進めていく】方法。

これには各キャラクターの会話によって物語が進む為、テンポ良くストーリーの流れを感じる事が出来ます。

しかし途中で、この台詞はどっちのキャラクターが話しているんだ？となる場合があり、それが二人だけでなく三人四人にまでキャラクターの数が増えると、読み手が混乱する場合は顕著に顕れます。一言で言い表すなら「スパスパ感」。

まあどっちも書き手の技量次第なんですがね？

いずれにせよ、実際に出版されている作家の方々はその辺りを弁えており、作品ごとの世界観がしっかりと表現できた内容となっております。

やはりプロの方々は凄いなあと毎度思います。

反面、そう思うと僕の作品はまだまだ甘いな…と自分で思わざるを得ないです。

文章表現でこうした方が良い、とかアドバイスがありましたら、感想でも良いので是非ともご教授願いたいです。

さて、前の回にちよこつと書きましたインヴェルズ・ローチ…

ある店でようやく発見しました。

「見つけたああー！」と思った矢先、そのカードの値札に記された金額を見て僕は言葉を無くしました。

僕「…さ…三枚セットで…五千円…だと…っ!？」

アポリア「少年よ、これが絶望だ…」

もちろん買いませんでした。  
買えなかったんじゃない。買わなかったんです！

ちなみに次話の掲載予定は9月10日を予定しております。

さて、そろそろ…

次回の話して、また皆様に出会える事を祈りつつ。次回の話して、  
新しい出会いを期待しつつ。

今回はここで筆を置かせてもらいます。

ありがとうございました。

## 決闘

三上市の西を流れる三上川。  
大きな河川だ。

昼間は河川敷にある公園や広場に、小さな子供たちが遊び回ったり、犬の散歩道になったり、運動に勤しむ者がジョギングのコースにしたりと、何かと賑わう場所でもある。

しかし、今その三上川の河川敷に人の気配は、ある一人の人物と異形の集団しか存在しなかった。

その唯一の人間である西条亨は叫んだ。

「マジシャン・ガールから離れろって言ってんだろッ！！ 聞こえねえのか、三下アア！！」

「…三下…だと…？」

三下呼ばわりされた異形の集団は、彼から発せられた怒号に怯み、思わず一步後退する。

その様子を、異形の集団に囲まれていたマジシャン・ガールは、信じられないものを見る様な目で、声をあげる彼を見つめた。

自分を取り囲む異形の集団は、マジシャン・ガール等デュエルモ

ンスターズが暮らす世界、精霊界の住人。

その中でも悪魔族の中で、精鋭部隊と称されるデーモン・ソルジャーである。

更にもう一人。

精霊界を脅かす邪なる神を崇拜する帝王、邪帝ガイウスまでもが居合わせているのだ。

彼の切った啖呵が、如何に命知らずな発言であつたか…。

精霊界でなく、人間界で暮らす西条は、そんな事情など知つたことではなかつた。

「よく邪帝様の前で、その様な口がきけたものだ。身の程を弁えろ、人間」

「テメエ等の事なんか、知つた事じゃねえよ…!! それよりも、ゴチャゴチャ言つてねえで、さつさとソイツから離れるツ!!」

全身から怒りという感情を剥き出しにする西条に、無機質な表情のデーモン・ソルジャーからは、首筋から冷や汗にも似た何かが流れ落ちる。

「…貴様…!!」

「もつ良い…」

その言葉に、マジシャン・ガールを取り囲む三人のデーモン・ソルジャーの血の気が、一気に引いた。

三人の内一人が、恐る恐る振り返ると、彼らの上司である邪帝がイウスが遂に動き出した。

「邪…邪帝様…!?!」

「何を狼狽えている…貴様等は悪魔族の精鋭部隊では無いのか? あんな小僧一人に、何を臆する?」

つまならそうに息を吐く邪帝。

その動作一つ一つに、彼の部下であるデーモン・ソルジャー達は慌てた…いや怯えた様子で

「邪帝様…?!? お、お待ち下さい!! 我々は決して…!!」

「もう良いと言ったのだ。貴様等は私の力の礎となれば良いのだ…!!」

その瞬間、西条の目に信じられない光景が映った。

「…?!? お、お前…!!」

響き渡る異形の悪魔の雄叫び。

それは雄叫びというよりも悲鳴と呼んだ方が正しいだろう。

邪帝と呼ばれる悪魔が片手を翳した瞬間、三人のデーモン・ソルジャーはそれぞれにもがき、苦しみだしたのだ。

地に膝をつき、大きく肩で息をする三人のデーモン・ソルジャーの身体から、黒い煙のようなものが一気に放出されると同時、彼ら三人の身体に、ある変化が訪れた。

みるみる内に彼らの身体は凝縮し、四角い一枚のカードへと姿を変えたのである。

西条やマジシャン・ガールの前で、三人のデーモン・ソルジャーは、最後まで「邪帝…様…」と声をあげ、その意識を消失させた。

「…なに…してんだよ…お前…っ!」

「なにをしているか…だと? 愚問だな…」

西条の言葉に、邪帝は嘲笑うように

「臆した兵など、私の部下には不要だ。それに…」

それに…。

そう述べた邪帝の赤い眼光が、西条の怒りに満ちた視線と衝突する。

「なかなか良い目をしているな…小僧」

「…お前に言われても嬉しくねえよ…!! それよりも、さっきから言っただろツ!! マジシャン・ガールを解放しろ!!」

西条の言葉に、地に這い蹲るマジシャン・ガールを一瞬だけ見やった邪帝は、その目元を卑しい形へと変貌させる。

「…そんなにこの小娘が大事かね？」

邪帝がそう言うと、三枚のカードとなったデーモン・ソルジャーが、邪帝の手の中へと集結していく。

「お前にとって、この小娘は何なのだ？私とこの小娘は、精霊界での敵同士。言わば今回の件も、その延長線上に起きた事に過ぎない。そこに何故、人間であるお前が出て来る？」

「…い…じよお…」

マジシャン・ガールは、邪帝の言葉の意味が少なからず理解したつもりでいた。

確かに自分と邪帝は、精霊界での敵同士。

今回はたまたま、その戦いの舞台が人間界で起きてしまっただけである。

「デーモン・ソルジャー部下からの報告によれば、貴様等はたった数時間前に会ったばかり…情でも移ったか？それとも、この小娘に誑かされたか？」

「ああっ…！！」

「ッ！？ テメエ…ッ、その足をマジシャン・ガール退けるッ！！」

邪帝に向かい迫る西条に、マジシャン・ガールは声に出せずとも制止の声をあげる。

そんな彼女の予測は正しかった。

邪帝に殴りかかろうとする西条だったが、彼の拳が邪帝に届く事はなかった。

軽く腕を薙ぎ払われただけ。

たったそれだけの動作で、西条の身体は二メートル近く吹き飛ばされてしまったのだ。

(っ！？ さいじょおっ…！！)

ズザザザ…ッ！！と砂利の上を転げ回る西条。

これは別に、西条の喧嘩の腕っ節が極端に弱い訳ではない。相手が悪いのだ。

精霊界のデュエルモンスターズは、人間に比べ様々な力に秀いた存在である。



人間とモンスター、その元となるスペックが違いすぎているのだ。

それでも、西条はすぐさま立ち上がった。

身体中は砂利を転げ回ったせいで、所々悲鳴をあげている。

だが、それがどうした？

(アイツが受けた痛みは…こんなもんじゃねえんだ!! こんな所で…俺が先にくたばったんじゃ、話しになんねえよ!!)

(…この人間…)

ぶっ飛ばされても尚、鋭い敵意をぶつけてくる西条に、邪帝はもう一度尋ねた。

「人間、もう一度だけ聞くが…貴様がこの小娘を助ける理由は何だ？」

(……………)

マジシャン・ガールはゴクリと息を飲み込んだ。

自分は彼に迷惑ばかり掛けていた。

出会ってまだ、半日しか経っていない。

自分の代わりに戦ってくれとも頼んでいない。

それでも、彼はやって来た。

吹き飛ばされても尚、彼は立ち上がってくれた。

これでは嫌でも、彼の言葉に期待してしまうのではないか。

「…初めは…迷惑に感じてたさ…!!」

西条の出だしの言葉…。

「突然現れて、自分は精霊界から来たブラック・マジシャン・ガールだって訳分からねえ事言っし、部屋は爆破するわ、冷蔵庫の中を全部食っちゃうわ、掃除した部屋を散らかすわ、俺を盾にするわで散々だったさ…!!」

(うう…)

マジシャン・ガールにとって、彼の話の下りは苦痛以外の何物でもなかった。

「ケドな…!! アイツは…一生懸命だったんだよ!! 右も左も分からないトコ来て、自分なりに必死に信じて貰おうって、アイツの行動は全部、一生懸命だったんだ!! そんなアイツの姿は…俺には孤独に見えた…!!」

(っ!?)

「何も知らねえ所にいきなり一人で来たら、誰だって寂しいに決まってる!! 俺がアイツの立場だったら、絶対にそう思う!! だ

から…俺は決めたんだ!!」

西条は大きく息を吸い込み、ハッキリ、堂々と宣言する。

「どんな事があっても、誰が何と言おうと、俺はマジシャン・ガールの支えになつてやろうつてな!! お前がマジシャン・ガールの使命を邪魔するつてんなら、容赦しねえ!! 俺が相手になつてやる!!」

「…ほう」

ポツリと、マジシャン・ガールの瞳から再び涙が零れ落ちた。やはり迷惑に思われていたが、彼は自分の事を理解してくれていた。

この世界に来てからの自分が感じていた孤独を、彼は分かってくれていた。

それと同時に感じる。

自分には、こんな身近に頼れる仲間が居たんだという事を。

「なる程…それが貴様が戦う理由か。面白い、ならば私は貴様の言葉に敬意を払い…貴様に決闘<sup>デュエル</sup>を申し込む!!」

「決闘<sup>デュエル</sup>…ッ!!」

邪帝はそう言つと、どこからか板状の腕輪を取り出し、それ自分の腕に装着させた。

マジシャン・ガールを踏みつける足を進ませ、西条の前へと進み出る邪帝は

「決闘デュエルとは、精霊界では古来より伝わりし、戦いの儀式。互いの合意を得た決闘は、何人たりとも邪魔をする事ができない……!!」

「……ッ」

西条は自分の鞆の中に入れてあつたデッキと、決闘盤を取り出した。

元は友人の部屋に泊まりに行く際に鞆に放り込んだ物。

その当時は、まさか今みたいな状況になるとは思わなかった。

西条は決闘盤を腕に装着する。

デッキをシャッフルし、それを決闘盤のデッキホルダーにセットし終え、西条は正面に対峙する邪帝ガイウスを見据える。

邪帝はそれを、決闘デュエルの承諾とみなした。

「貴様が勝てば、私はこの世界から退こう……しかし、私が勝った場合……」

「その時は、お前の好きにしるよ……俺は負けるつもりは毛頭ないがなッ……!!」

「…それで良い」

その言葉に不穏な空気を漂わせる邪帝。

真つ直ぐに見据え、闘志を剥き出しにする西条。

(…さいじよお…!!)

そして、今も横たわりながら、自分の為に駆けつけてくれた彼の為に、必死になって立ち上がろうとするマジシャン・ガール。

西条 対 邪帝。

二人の決闘<sup>デュエル</sup>が今、幕を開けた。

「行くぞ…!!」

「…来い、人間…!!」

『決闘<sup>デュエル</sup>ツ…!!』

遂に西条と邪帝のデュエルが始まった。  
深夜の三上川、その河川敷に重苦しい空気が漂っていく。

そんな中、先攻プレイを奪取した西条が、デッキトップに指を添えた。

「行くぞ…!! 俺の先攻、ドロツ…!!…っ!？」

デッキからカードをドロした西条は、対峙する邪帝の様子に付き、そのプレイに一瞬の硬直が入る。

邪帝は「ククク…」と不気味な笑い声と共に、空いた掌に膨大な力を凝縮させていく。

「お前…っ、一体何を…!？」

西条の問い掛けに、邪帝は凝縮させた力の塊を西条に見せ付けながら

「その目にしかと焼き付けるが良い。コレが我々…精霊界のデュエルだ…!! フンツ…!!」

カツツ!!

キイイイイイ…!!

邪帝は凝縮させた力の塊を地面へと叩き付けた。

衝撃を受けた力の塊は拡散し、その形を濃い紫色の円形状の魔法陣に変え、展開していく。

地を這う円形状の魔法陣は大きく広がり、瞬く間に西条と邪帝の二人を囲うようにして停止した。

「っ！？ 何だ…コレ…っ！？」

「言った筈だ。精霊界のデュエルでは、何人たりとも干渉を加える事は出来ない…！！ この円の外より、何人たりとも入る事叶わず。この円の内より逃げる事許さず。この円が解かれる瞬間こそ、<sup>デュエル</sup>決闘の決着也…！！」

「…なる程」

分かり易くて良い…と西条は思った。

「要はあれだ…“俺がお前に勝てば良い”って事だろ？」

「…フン、減らず口を…」

西条の言葉に不気味な笑みを浮かべる邪帝。

そして、遂に西条の先攻プレイが再開された。

【先攻】西条亨

LP / 8000

【後攻】邪帝ガイウス

LP / 8000

「行くぜ……!! 俺は『魔導騎士ディフェンダー』を召喚ッ……!」

【魔導騎士ディフェンダー】

星4 / 光属性 / 魔法使い族

ATK / 1600 DEF / 2000

「効果」

このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く（最大1つまで）。フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスターが破壊される場合、代わりに自分フィールド上に存在する魔力カウンターを、破壊される魔法使い族モンスター1体につき1つ取り除く事ができる。この効果は1ターンに1度しか使えない。

西条のフィールドに、巨大な盾を構えた魔導騎士<sup>シールド</sup>が出現した。

「魔導騎士ディフェンダーの効果発動!! コイツが召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを1つ置く……!!」

【魔導騎士ディフェンダー】

ATK / 1600 DEF / 2000



(魔力カウンター ×1)

西条の召喚した魔導騎士ディフェンダーの持つ巨大な盾が魔力を帯び、淡く虹色に輝いた。

彼はは更に手札を掴み取り…。

「先攻は最初のターン、攻撃する事は出来ない…。俺はリバーズカード1枚をセットして、ターンエンド!!」

西条のターンが終了し、邪帝のターンへと移行する。

自分のターンが訪れた邪帝だが、相変わらず不気味な笑い声を漏らしていた。

「私のターン、ドロ―!! フッフ…私は手札の『ジエスター・コンフィ』を、攻撃表示で特殊召喚…ッ!!」

【ジエスター・コンフィ】

星1 / 闇属性 / 魔法使い族

ATK / 0 DEF / 0

「効果」

このカードは手札から表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この方法で特殊召喚した場合、次の相手ターンのエンドフェイズ時にこのカードと相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を手札に戻す。「ジエスター・コンフィ」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

邪帝のフィールドに、小さな玉に乗った道化師、ジェスター・コンファイが特殊召喚された。

西条はそのモンスターのステータスを見て、鼻を鳴らした。

「攻撃力、守備力が0のモンスター…？ハッ、そんなモンスターじゃ俺のモンスターを倒す事は出来ないぜ！！」

「…目先の事しか見えておらぬ様だな。この帝王たる私が、このままで終わると思っっているのか？」

邪帝の言葉に、二人のデュエルを観戦する形となったマジシャン・ガールは、這いずりながらも必死になって西条に訴えかける。

相手は精霊界の王の一人。

その実力は、並大抵のものではないという事を…！！

「私は特殊召喚をしただけであって、まだこのターン。通常の召喚権を残しているのだぞ？」

邪帝のフィールドには特殊召喚されたモンスターが一体。  
そして、残された召喚権。

それらの言葉に、西条は「まさか…っ！！」と声を漏らす。

「フフフ…！！　そう。私はジェスター・コンファイをリリースし…」

「!!」

邪帝のモンスター、ジェスター・コンフィが激しい渦に包まれる。  
そして、その渦の中から姿を現したのは…!!

「現れよ…天を切り裂く雷ッ!! 『雷帝ザボルグ』を、アドバンス召喚ッ!!」

【雷帝ザボルグ】

星5 / 光属性 / 雷族

ATK / 2400 DEF / 1000

「効果」

このカードのアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のモンスター1体を破壊する。

ズゴゴゴゴ…ッ!!

邪帝のフィールドに、雷の力を宿した帝王が一、雷帝がアドバンス召喚された。

「アドバンス召喚…ッ!! 場のモンスターをリリースする事で、5つ、若しくは6つ星の上級モンスターを召喚する方法…!! まさか1ターンでやってのけるなんて…ッ!？」

いきなりのアドバンス召喚に気を引き締める西条。  
そんな彼に、雷帝の特殊能力が襲い掛かる。

「この瞬間…同胞、雷帝ザボルグの効果発動！！ このカードが召喚に成功した時、フィールド上のモンスター1体を破壊する！！  
破壊するのはもちろん…『魔導騎士ディフェンダー』！！」

ビシツと指をさす邪帝。

そして、雷帝の掌から無数の雷の矢が、西条の魔導騎士ディフェンダーに向けて放たれた。

バリバリバリビシツ！！！！！！

「ッ！！ だがこの瞬間、俺は魔導騎士ディフェンダーのモンスター効果を発動する！！」

【魔導騎士ディフェンダー】

ATK/1600 DEF/2000

(魔力カウンター 10)

「俺の場の魔力カウンターを1つ取り除く事で、魔法使い族モンスターの破壊を無効にする！！ うぐっ!?!」

バリバリッ…ドシュー…!!

魔導騎士ディフェンダーは、雷帝の雷を巨大な盾で防ぎ、事なきを得た。

「ほう…雷帝の力を凌いだか。だが…まだ私はこのターン、バトルフェイズを行っていない…!!」

「…っ!!」

邪帝の紅き眼光が鋭さを増す。

メインフェイズ1を終了させた邪帝は、バトルフェイズへと突入した。

「ゆくぞ…!! 我が同胞、雷帝ザボルグよ。ヤツのモンスター、魔導騎士ディフェンダーに攻撃ッ!!」

ズドンッ!!

バリバリバリバリッ…!!!!

「ぐあっ!?!」

雷帝ザボルグの攻撃が炸裂し、西条のモンスターが破壊された。

「戦闘で自分のモンスターが、相手の攻撃力を上回っていた場合…  
その数値の差だけ、相手に戦闘ダメージを与える。人間、貴様には  
800ポイントのダメージを受けて貰うぞ…!!」

【西条亨】

LP / 8000                      7200

【邪帝ガイウス】

LP / 8000

「…さい…じょお…!!」

西条がダメージを受けた事で、マジシャン・ガールは思わず声を  
あげる。

そして、ライフポイントにダメージを受けた西条は、ある異変に  
気付いた。

それは…。

(何だ…っ!? 今の衝撃は…!!)

自分のモンスターが破壊された事で、自分のライフが微弱ながら  
も削られた事で、自分の身体中を得体の知れない衝撃が駆け巡った。  
それはまるで、見えない空気の壁がぶつかったような感触。

「気付いた様だな、人間…この円の中で決闘デュエルをする者がダメージを受けた時、そのダメージは本物のダメージとなってプレイヤーを襲う…!!!」

「なにっ!？」

西条は「まさか…!？」と、地面に横たわるマジシャン・ガールを見つめる。

彼女の全身にできた無数の傷跡は、もしや…。

「フッフ…。貴様も直ぐにあの小娘と同じようにしてやるっ…!! 私はこちらで、ターンを終了する」

邪帝の言葉に、西条はギリツと歯を食いしばった。

やはりマジシャン・ガールの身体にできた傷は、邪帝たちの仕業だった。

その事実が西条の怒りの炎を、より燃え上がらせる。

しかし、それと同時に考えてしまう。

このデュエルでもし、自分が負けてしまったら…と。

そうなれば恐らく、自分もマジシャン・ガールと同じように、無事ではいられないだろう。

西条は、自分の怒りの感情の中に、少しずつ恐怖という闇が広がっていくのを感じた。

（俺だつて…あなるのは嫌だ。怖いさ…！！ けどそれ以上に…許せねえ！！ 一人の女の子を相手に、平気でこんな危険なデュエルを仕掛けるコイツ等には…何があっても、絶対に負けられねえ…ッ！！）

西条は頬を伝う汗の感触を感じながら、自分のプレイを開始する。

「…っ俺のターン、ドローツ…！」

【西条亨】

LP / 7200

「手札」

5枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

【邪帝ガイウス】

LP / 8000

「手札」

4枚

「モンスター」

雷帝ザボルグ

「魔法・罨」

なし



デッキからカードをドロウした西条は、引き当てたカードを確認し、「よし……!!」と笑みを浮かべる。

西条が引き当てたカードは、効果モンスター『執念深き老魔術師』だった。

(コイツは、裏側から表側にリバースした時、フィールド上の相手モンスターを破壊する強力なカード!この効果で、ヤツの上級モンスターを破壊する……!!)

【執念深き老魔術師】

星2 / 闇属性 / 魔法使い族

ATK / 450 DEF / 600

「効果」

リバース：フィールド上の相手モンスター1体を破壊する。

西条は老魔術師のカードを掴み…。

「俺は、モンスターを裏側守備表示でセット!! ターンエンドだ!!」

自信あり気にターンを終えた西条の様子を見て、対峙する邪帝は紅き眼光を細くする。

「ヤケに気合いが入っているな。恐らくその守備モンスターの効果がそうさせるのか？」

「遠慮はいらねえ…。さあ、掛かって来い！！」

挑発じみた言葉を吹きかける西条に対し、邪帝は冷静だった。そして考える。

彼の場に現れた、守備モンスターの正体を。

(恐らくあの人間は、私の攻撃を誘っている…ならば攻撃ではなく、効果で破壊すれば良いだけの事…！！)

「フッフ…私のターン、ドロー！！」

邪帝のターンが始まった。

今まで精霊界で、数多くの決闘デュエルをくぐり抜けてきた邪帝は、冷静に彼の策を打開していく。

「人間よ。幾ら貴様が策を練ろうとも、帝王の前では無力也ツ！！私はフィールドの『雷帝ザボルグ』を手札に戻し、『A・ジエネクス・バードマン』を特殊召喚ツ！！」

【A・ジエネクス・バードマン】

星3 / 闇属性 / 機械族

ATK / 1400 DEF / 400

「効果・チューナー」

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を手札に戻して発動する。このカードを手札から特殊召喚する。この効果を発動するために手札に戻したモンスターが風属性モンスターだった場合、このカードの攻撃力は500ポイントアップする。この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

邪帝のフィールドに、鳥の姿を模した機械人形、A・ジエネクス・バードマンが特殊召喚された。

「このモンスターは、私のフィールドのモンスター1体を手札に戻す事で、手札から“特殊召喚”できる。人間よ、この意味が分かるか？」

ニタア…つとした目つきに変える邪帝に、西条は目を見開く。

邪帝は【帝モンスター】を手札に戻して、新たにモンスターを特殊召喚した。

つまり邪帝は、まだこのターン、通常召喚を行っていない。

「ま…っ、まさか…っ!？」

「そう。私は特殊召喚に成功したバードマンをリリースし、再び現れよッ!！」【雷帝ザボルグ】ッ!！」

ピシャッ!！」

カッツッ！！バリバリ…ッ！！

邪帝のフィールドに再び、雷帝ザボルグがアドバンス召喚された。雷帝ザボルグがアドバンス召喚に成功した事で、その効果が発動される。

「雷帝ザボルグの効果、発動！！ このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のモンスター1体を破壊する！！ 対象は勿論…貴様の守備モンスターだ！！」

バリバリバリバリ…ッッ！！！！  
ズドゴウツ！！

「ぐあっ！？ ろ、老魔術師が…っ！？」

西条の守備モンスターである執念深き老魔術師は、裏側守備表示のままカード効果によって破壊された。

裏側のまま破壊された為、老魔術師のリバース効果は発動する事はない。

邪帝は見事に、西条の目論見を突破してきたのだ。

これにより、西条のフィールドには壁となるモンスターは全て消え、残されたのは一枚のリバースカードのみとなった。

「執念深き老魔術師のカードだったか。フフフ…どうやら貴様は、老魔術師のリバース効果を狙っていた様だが…この私に、そんな手は通用しない…！！」

「…くっ!!」

その場しのぎとは言え、自分の用意した迎撃策をいとも簡単に突破する邪帝に、西条は思わず舌打ちした。

そして、メインフェイズを終えた邪帝は、バトルフェイズへと突入する。

「これで貴様の場には、壁となるモンスターは消えた。バトルツ!  
! 雷帝ザボルグで、プレイヤーにダイレクトアタック!!」

バリバリバリ…ツツ!!!!

邪帝の攻撃宣言と共に、雷帝ザボルグは雷の力を宿した拳を大きく振り上げる。

そして西条の腹に、ザボルグの攻撃が直撃した。

ズドンッ!!

「グハッっ!!? が…っ、あ…!!」

【西条亨】

LP / 7200

4800

【邪帝ガイウス】

ダイレクトアタックを受けた事で、西条のライフが一気に減少していく。

それと同時に彼を襲う、精霊界の力。

まるで痛みが現実のものであるかのように、西条の身体は大きく吹き飛ばされた。

「ぐあああつー!!」

「さい…っ、じょお…!!」

目の前で彼が苦しんでいる。自分の代わりに、彼が決闘<sup>デュエル</sup>で苦しんでいる。

なのに自分はこうして、彼が苦しむ姿しか見れない。

彼の力になれない事に、マジシャン・ガールは辛い気持ちでいっぱいだった。

「どうした人間。威勢が良い割には、大した事もないではないか？  
貴様の気持ちは所詮、口先だけの代物だったという事か？」

「…ッ!？」

吹き飛ばされ、それでも立ち上がるうとする西条に対し、邪帝は呆れたように言葉を放つ。

「まあ良い。貴様の実力がその程度であるならば…貴様の末路は、あの小娘と同じようになるだけだ!！」

「…ん…だと…っ!！」

邪帝の言葉に、西条の身体がわなわなと震える。

怖い。確かに怖い。

今まで自分が知る決闘<sup>デュエル</sup>というのは、ただのカードゲームに過ぎない。

こんな実際にダメージが入るカードゲームなんて、見たことも聞いたこともない。

これが自分一人なら、今にも逃げ出したいくらいだ。

しかし、それは出来ない。

何故なら自分は、知ってしまったから。

精霊界の事を。マジシャン・ガールの事を。精霊界の決闘の事を。

そして自分は決めてしまったから。

マジシャン・ガールの力になると。

今この状況から、彼女を救ってみせると。

「フフフ…この決闘<sup>デュエル</sup>、余裕だな。私はこれで、ターンエンド」

「まだ…終わりじゃねえッ!！」

「っ!？」

「…さいじょ…!？」

邪帝のエンドフェイス、西条は傷付きながらも声を大にして張り上げる。

「俺はまだ諦めない!! まだ俺には、このカードが残されているんだッ!!！」

西条は自分の場に唯一残されていた、一枚のリバーズカードを指した。

「リバーズカード、オープンッ!! 速攻魔法『終焉の焰』を発動!!！」

### 【終焉の焰】

#### 「速攻魔法」

このカードを発動する場合、自分は発動ターン内に召喚・反転召喚・特殊召喚できない。自分のフィールド上に「黒焰トークン」（悪魔族・闇・星1攻/守0）を2体守備表示で特殊召喚する。（このトークンは闇属性モンスター以外のアドバンス召喚のためのリリースはできない）



「このカードは、俺のフィールドに『黒焰トークン』2体を、守備表示で特殊召喚する…!!」

ボワ…ッ!!ボワ…ッ!!

【黒焰トークン】

星1 / 闇属性 / 悪魔族

ATK / 0 DEF / 0

このトークンは闇属性モンスター以外のアドバンス召喚のためのリリースはできない。

西条のフィールドに黒焰トークン二体が守備表示で特殊召喚された。

このカードの発動に対し、邪帝は怪訝な表情をつくる。

(速攻魔法だと? フィールドに伏せる事で、相手ターンでも発動を可能とする魔法カード…だが…)

だが、なぜ今になって発動したのか?

「分からんな…私の雷帝ザボルグの攻撃の時、なぜそのカードを発動しなかったのだ? そうなれば貴様はダメージを受けずに済んだものを…」

所詮は雑魚か、と吐き捨てる邪帝。

しかし、決闘<sup>デュエル</sup>を観戦するマジシャン・ガールは違った。

(違う…さいじょおは…意味のない事なんて、しない…!!)

出会ってまだ半日しか経っていないが、マジシャン・ガールは考  
える。

彼がそうしてくれた様に、今度は自分が、彼を理解しようと必死  
に考える。

彼は何か行動する時、必ずその裏を考えて行動していた。

買い物をする時でも、同じ食べ物でも安い方を買おうと、必ず考  
えて行動していた。

だからこの決闘<sup>デュエル</sup>でも、西条は必ず何かの策があつてのプレイをし  
てきた。

魔導騎士ディフェンダーの効果に然り、執念深き老魔術師のリバ  
ース効果に然り。

デッキとは、その持ち主の人格が写し出された存在だ。

だからこそと、マジシャン・ガールは信じる。

彼の行動を。

西条の決闘<sup>デュエル</sup>を。

「今は分からなくても良いさ。行くぜ…邪帝、ここからが俺の反撃  
だ!! 俺のターン、ドロップ!!」

【西条亨】

LP / 4800

「手札」

5枚

「モンスター」

黒焰トークン 2体

「魔法・罫」

なし

【邪帝ガイウス】

LP / 8000

「手札」

3枚

「モンスター」

雷帝ザボルグ

「魔法・罫」

なし

西条のターンが始まった。

邪帝のターンの最後に黒焰トークンを残した西条の真意。

それは…。

「邪帝…確かにお前の言うように、雷帝ザボルグの攻撃の瞬間、終焉の焰を発動していれば…俺が受けるダメージは0で済んだ」

西条はそう語ると、手札の中から一枚のカードを掴み取る。

「だが…手札の7つ星モンスターを召喚する為には、フィールドのモンスター2体をリリースしなければならぬ!!」

「2体の…ッ、アドバンス召喚だとッ!?」

「…!!」

邪帝の紅き眼が大きく見開かれる。

「俺はフィールドの、黒焰トークン2体をリリースし…!!」

マジシャン・ガールの不安げだった表情が綻ぶ。

そして、西条のフィールドに姿を現したモンスターとは…!!

「このカードが、俺の信じる最強モンスターだッ!! 現れよ!!」  
『ブラック・マジシャン』!!」

【ブラック・マジシャン】

星7 / 闇属性 / 魔法使い族

ATK / 2500 DEF / 2100

魔法使いとしては、攻撃力・守備力ともに最高クラス。

西条のフィールドに現れしモンスター。

それは、彼が昔から愛用し続けてきたカード、ブラック・マジシヤンだった。

「ブラック・マジシヤンのカードだとオ…ッ!？」

「お…お師匠サマ…!?!」

それぞれに驚きの表情をつくる邪帝とマジシヤン・ガール。  
そんなマジシヤン・ガールに、西条は

「じっくり見てるよマジシヤン・ガール。俺と、お前のお師匠さん  
とで…お前を助けてやる…!?!」

「…さいじょお…!?!」

マジシヤン・ガールの目に、再び熱い感情が込み上げる。  
そして西条はこの決闘<sup>デュエル</sup>で、初めて攻撃の姿勢に入った。

「さあ行くぜ…!?! ブラック・マジシヤンで、雷帝ザボルグに攻  
撃ッ…! 黒・魔・導ッ…!」

バリバリバリバリ…ッ…!?!  
ズドゴオオ…ッ…!

「ぬおお…っ!?!」

【西条亨】

LP / 4800

【邪帝ガイウス】

LP / 8000

7900

ブラック・マジシャンの攻撃が炸裂し、雷帝ザボルグが消し飛んだ。

微弱ながらも西条は、この決闘で初めて、邪帝のライフに傷を負わせたのだ。

(ブラック・マジシャン…!! まさか人間界にて、貴様と対峙する事になるうとはな…!!)

「俺は、リバーズカードを1枚セット!! 邪帝、お前に魅せてやるよ…俺の、本気の決闘をな!!」

自身のエースカードを召喚した事で、心理的にアドバンテージを得た西条。

西条 VS 邪帝。

二人の決闘は、更なる熾烈を極めていく。

## 決闘（後書き）

おはようございます。こんにちは。こんばんは。  
あちゃべです。

いよいよこの小説初のデュエルが始まりました。

相手のデッキはそのまま【帝デッキ】となっております。

帝には様々な種類がありますが、どれも共通しているのが攻撃力2400、守備力1000というステータス。

「帝ライン」という呼ばれ方が普及したように、このシリーズは遊戯王カードの歴史に名を残したカード達とも言えます。

召喚しただけでボードアドバンテージを取れるこの帝モンスター  
の効果は総じて高く、シンクロやエクシーズが普及した今でも十分  
な活躍が見込めるカードです。

実際にデュエルで、相手に帝モンスターを召喚されたら「厄介だ  
…！？」と思う方は多いのではないのでしょうか？

しかし、そんな帝モンスターにも弱点はあります。そこはやはり  
カードゲーム。

まず効果が無効化されては意味がない事。

スキルドレインやエフェクト・ヴェーラー、禁じられた聖杯…と  
様々にあります。

次に、守備力がたったの1000である事。

表示形式変更の効果に弱く、今は禁止カードの月読命で一方的に  
殴り倒せる事や、エネミーコントローラー。月の書等、やはり様々  
です。

そして最後に、リリースを封じられたら出せないという事。

良い例としては永続農の生け贄封じの仮面や、フィールド魔法ア  
ンデット・ワールド。

まあ前者はデッキに入る事はまずありませんが、後者は対戦する  
相手によっては十分に有り得ます。

最も、リリース確保の為の下級モンスターの特殊召喚を封じられ  
たら致命傷なので、大天使クリスティアが出されるとキツイ。

また、下級モンスターの低ステータスを利用し、悉く破壊してく  
る王虎ワンフーも苦手とする相手です。

と、色々と説明させてもらいましたが、現在の環境でも単体でデ  
ッキもしくはサイドに入っても十分に活躍できるかと思えます。  
邪帝ガイウスや風帝ライザーの効果は除外にバウンスな為、スタ  
ーダスト・ドラゴンでも対処できない所が評価できます。

え？炎帝で暗黒界が落ちてアド取られた？

知らんがな。

さて、話しは変わりますが、今回のデュエルを読んでお気づきに  
なられた方も多いとは思いますが、この場を借りてお話しします。

今回のデュエルは、内容を原点回帰させてみました。

初心に戻り、様々なカードの種類や効果を作中で説明し、デュエ  
ル初心者にも幾分か分かりやすい内容になったのではないか？と思  
います。

ただその分、あまりデュエルは進んではおりませんが…申し訳な  
く思います。

ちなみに次話は9月15日に掲載予定です。

それでは、今回はこの辺りで筆を置かせてもらいます。



ありがとうございました。

帝王の降臨 (前書き)

夜。

三上市のネオンという夜景が息づくこの街のほとりでは、ネオンの光とはまた違った光が発生していた。

それは、三上川の河川敷。

普段ならこの時間のこの場所は、あまり人通りがない所なのだが、今日は違った。

そこに立っている三人の人影。しかし、その内の一人は【人】というには、余りに不釣り合いな姿をしていた。

まるで西洋の鎧のような黒き甲冑。兜からは二本の捻れた角を生やし、人というには余りに大きな体躯をしたその人物。

名を、邪帝ガイウス。

ここ人間界とは違う、精霊界という異世界からやってきたデュエルモンスターは、自分の目の前に立つ人物に対し、不気味な笑みをみせつける。

「フフフ…人間。まさか貴様ごときが、帝王たるこの私にダメージを負わずとはな…!!」

自らを帝王と称するガイウスに対し、対峙する少年はキツイ視線を向ける。

少年の名は西条亨。

ここ三上市の高校に通う、ごく普通の少年“だった”。

だった…というのは、今の彼を取り巻く環境からくる表し方だ。

突如、自分の目の前に現れた精霊界からの使者、ブラック・マジシャン・ガール。

なんでも、彼女達の暮らす精霊界が邪神という悪しき神に乗っ取られようとされているらしい。

それを阻止する為には、この世界にある神のカード【三元神】を、精霊界に持ち帰らなければならないとの事だった。

事情を知った西条は半信半疑でありながらも、ブラック・マジシャン・ガールに協力する事にした。

しかし、彼女を一人にしたその時、事件は起きた。

精霊界の邪神の勢力が、人間界に来たマジシャン・ガールを襲ってきたのだ。

デュエルによって傷つく彼女を助けるべく、西条は邪帝ガイウスにデュエルを挑んだ。

## 帝王の降臨

### 【西条亨】

LP / 4800

「手札」

3枚

「モンスター」

ブラック・マジシャン

「魔法・罨」

リバーズカード 1枚

### 【邪帝ガイウス】

LP / 7900

「手札」

3枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

なし

ブラック・マジシャンの攻撃が決まり、邪帝のモンスターを破壊した事でターンを終えた西条。

彼のフィールドに召喚されしモンスター、ブラック・マジシャンの存在に、魔術師の少女ブラック・マジシャン・ガールは立ち上が

る。

身体は傷だらけだ。

だが、それがなんだ！と言わんばかりに、マジシャン・ガールは声をあげる。

「さいじょお、…頑張つて！！」

「フフ：たった100ポイントのダメージを与えたからと言って、いい気になるなよ？」

自分のターンが訪れた事で、邪帝はデッキトップに指を添える。初めはブラック・マジシャンの登場に驚きはしたが、思考を冷静に切り替えた今となっては、大した脅威ではない。

「私のターン、ドローツ！！ 私はモンスターを1体セット…！！ 私のターンはこれで終了だ。さあ人間よ、掛かって来い…！！」

モンスターをセットしてターンを終えた邪帝は、不気味な雰囲気  
を漂わせていた。

「…なんだよ邪帝。お前だつて、守備に徹するしかねえじゃんか。このまま一気に攻める…俺のターンッ！！」

自分のターンに移り、デッキからカードをドロ―した西条は、今

が攻め時とばかりに…。

「俺は『魔導戦士 ブレイカー』を、召喚ッ!!」

【魔導戦士 ブレイカー】

星4 / 闇属性 / 魔法使い族

ATK / 1600 DEF / 1000

「効果」

このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1個乗せる（最大1個まで）。このカードに乗っている魔力カウンター1個につき、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。また、その魔力カウンターを1個取り除く事で、フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊する。

西条のフィールドに魔導を極めし戦士、ブレイカーが召喚された。ブレイカーが召喚に成功した事で早速、そのモンスター効果が発動する。

「ブレイカーの効果だ!このカードが召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを1つ乗せる。そして、ブレイカーに乗っている魔力カウンター1つにつき、攻撃力を300ポイントアップする…!!」

【魔導戦士 ブレイカー】

ATK / 1600 DEF / 1000

(魔力カウンター×1)

西条のフィールドにモンスターが二体出揃った。  
そして、西条のバトルフェイズが始まる。

「バトルッ！！　まずはブレイカーで、ヤツの裏守備モンスターに攻撃！！」

「フッフ…！！」

西条の攻撃に対し、余裕の笑みを浮かべる邪帝。

ダメージステップに入り、邪帝の守備モンスターが姿を現した。

「残念だったな。そのモンスターの攻撃力では役不足だ！私のモンスターは『墓守の偵察者』！！　そのリバーズ効果を発動する！！」

### 【墓守の偵察者】

星4 / 闇属性 / 魔法使い族

ATK / 1200    DEF / 2000

「効果」

リバーズ：自分のデッキから攻撃力1500以下の「墓守の」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

「このカードが裏側から表側表示になった時、デッキから攻撃力1500以下の【墓守】モンスターを特殊召喚する。私は2体目とな

る、墓守の偵察者を守備表示で特殊召喚ッ！！」

【西条亨】

LP / 4800

4700

【邪帝ガイウス】

LP / 7900

邪帝の守備モンスターは、守備力2000の墓守の偵察者だった。攻撃を仕掛けた西条の魔導戦士 ブレイカーの攻撃力は1900。攻撃力が守備力に及ばず、西条は相手モンスターを破壊する事ができなかった。

「くっ……！！ まさか守備力2000だなんて……！！」

「礼を言わせてもらおうか。おかげで私のフィールドにも、モンスターが並んだ……フッフ」

数を減らす所か、逆に数を増やす羽目になってしまった西条。

しかし、彼にはまだ攻撃が残されている。

「まだまだ！！ まだ俺には、ブラック・マジシャンの攻撃が残っている！！ 行けッ、ブラック・マジシャン！！ 墓守の偵察者に攻撃ッ……！！」



ズバツ！！  
バリバリ…ッ！！

ブラック・マジシャンの攻撃で墓守の偵察者を破壊は出来たが、結果として邪帝のフィールドにモンスターが一体残されてしまった。

このターン、西条は邪帝にダメージを与える事が出来なかった。

「いくら貴様ごときが最上級魔術師を従えようと…貴様の實力ではブラック・マジシャンを使いこなす事は出来ないみたいだな？」

「…なんだと…ッ！！」

「ブラック・マジシャンだけではない。現に他のモンスター達は、無残にも反撃すら出来ずに散っていくだけではないか？貴様は所詮、その程度の雑魚でしかないのだ」

豪語する邪帝は、言葉の一言一言に重みを増していく。

それはこのデュエルでの、邪帝の絶対的な自信の現れであった。

「さあ、他にやる事が無いなら、ターン終了を宣言しろ。人間！！」

「く…っ、俺は…ターンエンド」

悔しいが、今の西条の手札では、これ以上のプレイは出来なかつ

た。

そんな西条を見下し、徐々に高圧的な態度になっていく邪帝。

【西条亨】

LP / 4800

「手札」

3枚

「モンスター」

ブラック・マジシャン

魔導戦士 ブレイカー

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

【邪帝ガイウス】

LP / 7900

「手札」

3枚

「モンスター」

墓守の偵察者

「リバースカード」

なし

西条のターンが終了し、遂に始まる邪帝のターン。

「私のターンッ、ドロップ！！ 私は、墓守の偵察者をリリースし

……！！」

ターン開始早々にモンスターをリリースする邪帝。  
彼がアドバンス召喚するモンスター、それは…。

「いでよッ【風帝ライザー】！！」

【風帝ライザー】

星6 / 風属性 / 鳥獣族

ATK / 2400 DEF / 1000

「効果」

このカードのアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカード1枚を持ち主のデッキの一番上に戻す。

「雷帝の次は…風帝のお出ましか…ッ！！」

邪帝がアドバンス召喚したのは、攻撃力2400の風帝ライザーだ。

西条のフィールドには、ライザーの攻撃力を上回るブラック・マジシャンが居る。

しかし、西条の表情は険しかった。

「…雷帝ザボルグは、アドバンス召喚する事で効果を発動するモンスターだった…恐らく、あの風帝ってヤツも…」

「フフフ…少しは学習しているみたいだな。貴様の読み通り、この

風帝ライザーにも当然、特殊能力がある!!」

邪帝は早速、風帝ライザーの効果を高々と宣言した。

「風帝ライザーのモンスター効果、発動ッ!! このカードがアドバンス召喚に成功した時、モンスター1体をデッキトップに戻す!! 対象は…ブラック・マジシャン!!」

「っ!?!」

ニヤリ…と、邪帝の目が歪んだ。

西条にとつて、ここでブラック・マジシャンがデッキトップに戻されては、確実に勝機を失う。

それは、何としてでも避けなければならない。

「フッフ…これで苦勞して召喚した貴様のモンスターは、ただの足手まといとなった。消え去れ、ブラック・マジシャン!!」

風帝ライザーの両手に、荒れ狂う暴風が集う。

そして、荒れ狂う力が西条のブラック・マジシャンに向けて解き放たれた。

ゴバオウッ!!

「お師匠さま…ッ!？」

思わず西条の下へ駆け寄ろうとするマジシャン・ガールだが、それは出来なかった。

西条と邪帝、二人を囲うように展開された魔法陣が空間を遮断し、外部からの干渉を妨げているのだ。

ハラハラしながら、マジシャン・ガールは二人のデュエルを、西条を見つめる。

この風帝ライザーの効果が決まれば、西条の召喚したブラック・マジシャンは、デッキの一番上に置かれる。

つまり、次の西条のドローカードはブラック・マジシャンという事になる。

次のドローを操作されるとするのは、その数だけ自分の行動を抑制されてしまうという事なのだ。

「消え去れ、ブラック・マジシャンッ!！」

「…フッ、それはどうかな?」

西条の不敵な笑み。

彼のその一言で、邪帝やマジシャン・ガールの瞳が大きく開く。

「お前がブラック・マジシャンを狙う事は、最初から読めていた…なら当然、それに対抗する為の手段を警戒すべきだったな!！」

そう言い放つ西条のフィールドには、一枚のリバーズカードがあった。

彼が前のターンから伏せてあった、一枚の切り札が…。

「まさか…ッ、罠カード…ッ!？」

「そう。リバーズカード、オープンッ!! カウンター罠『闇の幻影』を発動ッ!!」

#### 【闇の幻影】

「カウンター罠」

フィールド上に表側表示で存在する闇属性モンスターを対象にする効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

ブラック・マジシャンに向かい来る風帝ライザーの力が、ブラック・マジシャンの前に展開された闇の奔流に阻まれる。

「このカードは、闇属性モンスターに対するカード効果の発動を無効にし、破壊する!! 消え去るのは、お前のモンスターだ!!」

「なにッ!？」

ゴバオウツ!!

跳ね返された力は風帝ライザーを襲い、邪帝のモンスターは粉々

に碎け散った。

これにより、邪帝は自分のフィールドに、壁となるモンスターが全て消えた事になる。

「ば…馬鹿な…ッ!？」

「どうしたよ邪帝さん。言葉が震えてるぜ？」

一気に形勢逆転され、邪帝の口からは声に出さずとも焦りが感じられた。

バトルフェイズを終了し、メインフェイズ2へ移行した邪帝は、残った手札の中から一枚のカードを掴み取り…。

「ぐうう…ッ、ならば手札より、『魔法カード』『おろかな埋葬』を発動ッ!！」

【おろかな埋葬】

「魔法カード」

自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。その後デッキをシャッフルする。

「この効果により、私はデッキからモンスターカード1枚を墓地へと置かせてもらう…!! 私を選ぶのは『黄泉ガエル』!!！」

黄泉ガエルのカードを墓地へ送った邪帝は、忌々しげに視線を西条へと向けた。

「私のターンは…終了だ…!!」

白石直也という男がいる。

西条亨と同じく、彼の同級生でありクラスメートでもある。

高校生にして、身長180センチを超える大きな体格をし、オールバックに決めた髪型。

三人に二人は、彼を高校生とは思わないだろう。

そんな彼は現在、自分が暮らすアパートの部屋で、一人でエロゲーをしていた。

天井の照明は点いておらず、部屋を照らすのはパソコンのデスクトップから灯る薄暗い光だけであった。

「ふうん…。この俺に掛ければ、このゲームの全ヒロインを手中に収めるなど、容易い事だ…!!」

画面には可愛らしい女の子が映っており、どこか憂いを帯びた瞳でこちらを見つめている。



『でも私、一度アナタを振ったのよ？あんなに酷い事まで言ったのに…。なのはどうして、アナタは私に構うのッ！？』

「ふうん…決まっている。それはお前がッ！！美少女だからだッ！！」

現実ではなく、二次元に熱く応える白石は、血走った目を剥き出しにした。

相当このゲームに熱が入っているらしく、机に置いてある携帯電話が鳴っている事に気付かない白石。

そんな熱血ドリーマー白石は、鼻息を荒くしながらマウスやキーボードを馴れた手つきで、巧みに操作していく。

その姿は、三人が三人とも気色悪いと答える位に変態染みていた。

「ハアハア、マコちゃんかわいいよマコちゃん。チュツチュ…ム？」

果てしなく危ない人物の白石は、ここにきてようやく携帯電話が鳴っている事に気付いた。

チツと舌打ちする彼は、ぶっきらぼうに机に置いてあった携帯電話を掴み取る。

「どうせ西条のヤツだろう…アイツめ…ッ！！あれほど俺の有意義な時間を潰す事は許さんと言っておいたものを…ッ！！」

何時間か前に、西条から今晚だけ泊めてくれないかと電話が掛かってきたのだが、彼はそれを断った。

一人で楽しくエロゲーがしたいから断った。

まだ高校生がその様なゲームをしてはイケないのだが、白石にとってそんな常識は無いも同然だった。

この年頃の若者は、多少の悪さをしたものなのだ。

「ええい、なんだっ！？ 俺は今、忙しいと言っただろうっ！！」

着信相手を確認する事なく、開口一番に怒鳴りつける白石。すると、受話器から淡白な……。

“男ではなく、女の声”が、白石の耳に入ってきた。

『…白石くん。誰に向かってそんな口を訊いてるのかしら？』

「ムッ！？ (なにッ！？ 西条じゃない、だと…ッ！？) 」

受話器から聞こえてきた声で、途端に青ざめた表情と化す白石。

「この声の主はッ…楠先生…っ！？ れ…れれれ冷静になれ…！！もう時刻は日付が変わり、午前一時になる所なのだ。こんな常識な時間に、常識ある先生がこの俺に電話を掛けてくる筈がないっ

！！ 貴様… いったい何者だ!？」

誰に説明する訳でもないのに豪語する白石。

それでも受話器越しに聞こえてくる声は、間違いなく自分のクラスの担任だ。

『あんまりグダグダ言っていると、今日の補習… もう1教科増やすわよ?』

「っ!?!? この俺のスケジュールをそこまで把握しているとは… まさかッ!?!? 本当に楠先生… ッ!?!?」

『… やっぱ2教科に…』

「ま、ままま待って… ださい!! す、スイマセンでしたア!!」

よほど補習が嫌なのか、白石はまるで手のひらを返したかのよう  
に、態度が一気に豹変した。

白石は担任の楠ミナ先生には訳あって、頭が上がらなかった。

受話器越しに聞こえてくる先生からの溜め息に、白石はビクウッ

!! っと肩を跳ね上げる。

『アナタなら知ってるかと思って電話してるんだけど… 西条くん、知らない?』

「ム、西条… だと?」

彼にとって意外な質問だったようで、まるで拳を突かれたように言葉が詰まる。

確か数時間前に、西条から泊めて欲しいと電話はあった。しかしそれを断った今となっては、その後の彼を知る由もなかった。

「いや、知らんな。23時頃に電話はしていたが…それだけだ。今はヤツが何をしているかは知らん」

『…そう』

まるで何かを考えているかのようになり、会話に空白ができる。

白石が、西条がいったいどうしたというのだ…と知っていること

『…白石くん。今から街に出て、西条くんを捕まえてきなさい』

「…は？」

三上市の河川敷にて鋭い視線を交差させる二人の人物。

西条亨、そして邪帝ガイウス。

二人のデュエルの流れは、大きく傾いていた。  
アドバンス召喚を主軸とし、その効果と攻撃力で西条を追い詰める邪帝であったが、西条も反撃に出た。

自分が信ずるエースモンスターと共に……！！

【西条亨】

LP / 4800

「手札」

3枚

「モンスター」

ブラック・マジシャン

魔導戦士 ブレイカー

「魔法・罨」

なし

【邪帝ガイウス】

LP / 7900

「手札」

2枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

なし

フィールドが空きの邪帝に対し、迎えるは西条のターン。

このデュエルで初めて、西条が一気に攻め入るチャンスが訪れたターンでもある。

叩ける時に、着実に叩く。

そう意気込む西条は早速、自分のターンを開始する。

「俺のターン、ドローツ！！ このまま一気に攻めるぜ！！ バトル…ツ！！」

バトルフェイズに突入した西条。

その第一陣を務めるのは…。

「魔導戦士 ブレイカーで、プレイヤーにダイレクトアタック！行ツけエエ！！」

「…っ！！」

ズバツ！！ と邪帝の身体に鋭い一閃が刻まれる。

このデュエルで初めて、西条が相手にマトモなダメージを与えた瞬間であった。

【西条亨】

LP / 4800

【邪帝ガイウス】

LP / 7900                    6000

「ぐうゝ…ッ、貴様…ッ!!」

「まだだ！まだ俺には、ブラック・マジシャンの攻撃が残っている！！ 行けッ、ブラック・マジシャン!!」

バリバリバリバリッ！！！！

「グオオオアアッ！！！！」

### 【西条亨】

LP / 4800

### 【邪帝ガイウス】

LP / 6000                    3500

一気に邪帝のライフを半分近くにまで減らした西条は、「どうだ！？」と言わんばかりにガッツポーズを作る。

それとは対照的にダイレクトアタックを受けた邪帝は、迫り来るダメージ衝撃に肩で大きく息をしていた。

ライフポイントが逆転し、ライフアドバンテージやボードアドバンテージで優位に立った西条に、デュエルを観戦していたマジシャン・ガールは、まるで信じられないものを見る様な目で、西条を見つめていた。

(…ウソ…っ!?)

今のマジシャン・ガールの気持ちには、様々な感情が入り混じっていた。

精霊界でも王クラスの者というのは、相当なデュエルの実力者なのだ。

それを、彼はダメージを負いながらではあるが、王クラスの実力者を追い詰めた。

その現実が彼女の中に、希望という光が差し込む。

もしかしたら勝てるかもしれない。

王クラスの相手に、デュエルで勝てるかもしれない。

(さいじょお…!…!)

彼に淡い期待を抱くマジシャン・ガール。

しかし、そんな彼女の想いを踏みにじらんと、邪帝のターンが始まる。

「俺は、ターンエンド!!」

「…フフ…人間よ、今の攻撃は効いたぞ。だが、貴様は後悔する事になる…」

「…なに?」



邪帝は不気味な笑みをこぼしながら、自分のターンを開始する。  
ライフを逆転されたとは言え、ボードアドバンテージが奪われた  
とは言え、邪帝にはまだ余裕があった。

「今のターンで、この私を倒せなかった事を後悔させてやろう…！  
！ 私のターン、ドローツ…！」

デッキからカードをドロートした邪帝。

ドローフフェイスからスタンバイフェイスへと移行し、邪帝は自分  
の墓地にあるカードに手を伸ばした。

「私のターンのスタンバイフェイス…墓地に眠る『黄泉ガエル』の  
モンスター効果ッ…！」

### 【黄泉ガエル】

星1 / 水属性 / 水族

ATK / 100 DEF / 100

#### 「効果」

自分のスタンバイフェイス時にこのカードが墓地に存在し、自分フ  
ィールド上に魔法・罫カードが存在しない場合、このカードを自分  
フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果は自分フィール  
ド上に「黄泉ガエル」が表側表示で存在する場合は発動できない。

「このカードは、私の場に魔法・罾が存在しない場合、墓地から特殊召喚する事ができる…！！ 我が力の糧となれ、黄泉ガエルツ！！」

邪帝のフィールドに黄泉ガエルが守備表示で特殊召喚された事で、西条は思わず目を見開く。

そして同時にこう思う。

「ッ！？ これじゃ毎ターン、ヤツの場に…生贄<sup>リリース</sup>確保のモンスターが…ッ！！」

「フフフ…そう。私が今まで魔法・罾の類を伏せなかつたのも、この黄泉ガエルの効果を能動的に発動させやすくする為…！！ 人間、覚悟するが良い…私の力を存分に見せ付けてやる！！ 黄泉ガエルをリリースッ！！」

「邪帝の身体から圧倒的な威圧感が、闇の霧となって辺りを覆う。黄泉ガエルをリリースし、邪帝がアドバンス召喚するモンスター。それは…。」

「現れよ。我が分身にして、最強の帝王ッ！！ 『邪帝ガイウス』をアドバンス召喚ッ！！」

【邪帝ガイウス】

星6 / 闇属性 / 悪魔族

ATK/2400 DEF/1000

「効果」

このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上に存在するカード1枚を除外する。除外したカードが闇属性モンスターだった場合、相手ライフに1000ポイントのダメージを与える。

ズドドドドド…ッ！！

遂に現れし、邪帝ガイウス。

端から見れば、邪帝ガイウスが自分自身のカードを召喚する光景に違和感を覚えるかもしれない。

しかし、対峙する西条には、そんな気持ちの余裕は無かった。

相手が召喚したのは【帝モンスター】だ。

アドバンス召喚時に、様々な効果を発揮する強力なカードたち。

その効果は雷帝の破壊に然り、風帝のバウンスに然りと…。

ならばこの邪帝の効果は…！？

西条がゴクリと息を呑むと同時、邪帝が動いた。

「我が分身、邪帝ガイウスのモンスター効果だ！このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカード1枚を除外するッ！！」

「なにッ！？」

破壊、バウンズときて、今度は除外。

前のターン、西条は畏カードを使う事で、敵の効果を回避する事に成功した。

しかし、今の西条のフィールドには、魔法・畏カードは無い。

つまり、邪帝の効果を防ぐ手段が残されていない状況だったのだ。

「フフフ：今度こそ貴様のモンスターには消えて貰うぞ。この効果で除外するのは勿論：ブラック・マジシャン！！」

邪帝が指定した瞬間だった。

西条のエースカードであるブラック・マジシャンは、邪帝ガイウスの効果により、闇次元の彼方へと吸収されてしまったのだ。

「ブラック・マジシャンッ!?!」

「お師匠さまっ!?!」

エースカードを失った西条。

しかし、それだけでは無い。

次の瞬間、更なる衝撃が西条を襲った。

「ブラック・マジシャンは闇属性モンスター。我が分身：邪帝ガイウスは、自身の効果で除外したカードが闇属性モンスターだった時、相手に1000ポイントのダメージを与える…!!」

「なにッ!? くああああッ!」

【西条亨】

LP / 4800                      3800

【邪帝ガイウス】

LP / 3500

「さいじょお…っ!?!」

思わず声をあげるマジシャン・ガール。

そんな彼女に心理的ダメージを追撃するかのように。

立ちはだかる西条に、肉体的にダメージを追撃するかのように。

邪帝のターンは、まだ終わらない。

「フッフ…私が受けた痛みを倍にして返してやるぞ…!! 手札より魔法発動『死者蘇生』!!」

【死者蘇生】

「魔法カード」

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを自分フィールドに特殊召喚する。

「この効果により、私は墓地のモンスター1体を特殊召喚する。同

胞よ…今再び…！ 風帝ライザーを特殊召喚ッ…！

「っ…！？」

邪帝のフィールドに、二体目の【帝モンスター】風帝ライザーが特殊召喚された。

邪帝のフィールドに並ぶ、二体の帝モンスターたち。

それに比べ、西条のフィールドには魔導戦士 ブレイカーが存在するのみ。

一気にボードアドバンテージを取り返された事に、西条の頬から冷や汗が流れ落ちる。

「バトルフェイズに入らせてもらう。覚悟は良いか、人間？」

ギラッ…つと、邪帝の紅き眼光が西条を射抜く。

そして遂に、邪帝の攻撃が始まった。

「バトル…！！ 風帝ライザーで、魔導戦士 ブレイカーに攻撃ッ

…！！」

「うあっ…！？」

【西条亨】

LP / 3800

3300

【邪帝ガイウス】

LP / 3500

唯一のモンスターを破壊され、ダメージを受けた西条のフィールドはがら空きになってしまった。

超過したダメージが現実のものとなってプレイヤーを襲うこのデユエル。

ゾクリ…と。

西条の中で得体の知れない恐怖心が広がる。

「ハア…ッ、ハア…ッ…くっ!？」

「フフフ…もう息が上がったのか、人間？だが私には我が分身、邪帝ガイウスの攻撃が残っているのだぞ…？」

「っ!？」

その言葉に西条は一瞬、頭の中が真っ白になった。

今まで受けてきたダメージだけでも辛いのに、まだ追い討ちがあるというのだ。

(正直…キツ過ぎるぞ…コイツぁ…ッ!！)

「フフフ…その身に我が一撃を受けてみる!！ 邪帝ガイウスで、

ダイレクトアタック!!」

モンスターである邪帝の両手の間に、黒色に輝く闇のエネルギーが凝縮されていく。

そして、攻撃宣言と同時に。

闇のエネルギーは西条に向けて、大砲のように勢い良く放たれた。

ズドンツッ!!!

バリバリバリバリツッ!!!

「うゝあゝあゝあゝあゝ!!!」

「っ!? さいじょお!!」

【西条亨】

LP / 3300                      900

【邪帝ガイウス】

LP / 3500

今までにない衝撃が西条を襲う。

それと同時に、身体から力が抜けていくのが分かる。

思わず地に膝を着いてしまいそうな、激しい脱力感に、西条はギリッ…っ と歯を食いしばった。



「フッフ…満身創痍だな」

「ゼイ…ゼイ…ゼイ…」

西条の肩が大きく上下するのを見て、邪帝は細く笑みを浮かべた。大きく開いたライフ差。

そして取り戻した、ボードアドバンテージ。

それらを見越し、邪帝は確信する。

このデュエルの結末を確信する。

「これで私のターンは終了だ。さあ人間、貴様のラストターンだ…  
！！」

三上市の夜は長い。

しかし、長いと言っても限度はある。

例えばこの商店街の通りにある居酒屋では丁度閉店時間を迎えたらしく、最後まで残っていた客が次々と外に出てくる。

ざっと六人位の大学生らしき集団だろうか。

その中にいた一人の男が、陽気な声で笑い声をあげていた。

「へへっ。さアて、二次会に向かうとすッか！」

その男の名は結締智恭。

西条亨や白石直也のクラスメートにして、彼らの友人の一人。やや小柄な背丈で、やや細目な顔立ちをしたこの少年は、深夜の居酒屋から出て来た。

まだ高校生である彼が、なぜ深夜の居酒屋から出て来たのか？

それは彼が今、合コンの真っ只中だからである。

男三人、女三人で遅くまで飲み明かし、このまま朝までカラオケに向かうつもりで結締に、今日の合コンに参加していた一人の女性が声をかけてきた。

「カラオケは良いけど…結締くんは大丈夫なの？まだ高校生なんですよ？」

「大丈夫だぜい。明日は…あ、日付は変わってるから今日か。今日は学校は休みだし、それに舞ちゃんともっと話したいし…!!」

アルコールが入っているせいか、無駄にテンションが高い結締は、危機感というのが欠如していた。

それは舞ちゃんと呼ばれた女性も同じようで、彼がまだ未成年である事を知っていながら…。

「ふふ…。でも結締くんって、まだ高校生なのにお酒が飲めるのね。もし警察とかに職質されたらどうするの？」

「ンなもん、だんまりを決め込むに決まってるぜよ。コッチにやあ黙秘権つてのがあるからにゃ〜。それに、偽造した身分証だってあ

るし」

「うわ…スゴ…」

そう言い結締は財布の中から偽造した身分証をごまんと取り出した。

「どうやってこんなに作るの？大学生である私たちでも、結締くんみたいな真似は出来ないわ」

「こればっかは舞ちゃんと言えど、教えられねエぜよ…さて、とりあえず場所を移そうぜい！」

大学生の集団に混じる一人の高校生、結締智恭。

今日の合コンを結締は全力で楽しむつもりでいた。

大学生の集団の中で、一人だけ子供というスキルを得た結締は、存分に巧みな話術を發揮して、遂に一人の女性と話し込む事に成功した。

それがこの黒髪の女性、舞ちゃんである。

浮かれ気分で舞ちゃんと足を進める結締。

しかし、幸せな時間はそう長く続かなかった。

それは不意な出来事だった。

舞ちゃんと二人つきりで一緒に歩いている最中、いきなり背後から肩をガシッと捕まれたのだ。

「いっつ!? だっ、誰だ!! って、白石さん!？」

「ふうん…丁度良いところにお前が居たからな…!!」

振り返る結締の前に立っていたのは、彼の友人である白石直也だった。

なぜこんな時間にこの場所で、白石がここに居るのか不思議に思った結締は、とりあえず…。

「なんで白石さんがこんなトコに？」

「ふん、俺とてこの時間の外出は不本意だ。だが楠先生からの頼みでな…というか結締よ。酒くさいぞ」

「えっ!? せ、先生が…ッ!!」

いきなり自分の担任教師の名を出されて、焦りの色を出す結締。

もし、白石に自分が居酒屋で酒を飲んでいた事を先生に知らされたら…。

そうなれば偽造した身分証など、自分を知る連中相手には意味がない。

バレたら謹慎処分か? はたまた嚴重注意か?

いずれにせよ、親には確実に知らされてしまうだろう。

それらを防ぐ為にはどうするべきか?

簡単な事だ。

白石に黙ってもらえば良いだけの事である。  
或いは白石もコチラに引きずり込むか。

「…なあ白石さん。俺アこれから先輩たちとカラオケに行かにやあならん。白石さんもどうー…」

「ふうん…結締よ。貴様の事情など俺の知る所ではない。既に貴様は俺への拒否権は封じられていると思え」

「いゝだだだだだっ!?!」

結締の肩を掴む力が徐々に強くなる。

白石はニヤリと不敵な笑みを浮かべると、苦悶な声をあげる結締に対して、こう述べた。

「結締よ。この事を楠先生に知らされたくなくば、今すぐッ!!  
この俺にッ!! 協力してもらおうぞッ!!」

「ダアアア!! 痛いっ、痛いからっ!?! 分かったから白石さん、手を放してくれええ!!」

完全に白石にやられた結締。

ちなみに、いつの間にか舞ちゃんは二人のやり取りに呆れてしま  
い、この場から消えていた。

結締のウハウハは、白石の登場と共に砕け散った。

【西条亨】

LP / 900

「手札」

4枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

なし

【邪帝ガイウス】

LP / 3500

「手札」

1枚

「モンスター」

邪帝ガイウス

風帝ライザー

「魔法・罨」

なし

邪帝のターンが終了し、西条のターンが訪れる。

しかし、迎える西条のフィールドは芳しくない状況であった。フィールドにモンスターは無く、魔法・罨もないこの状況。

頼みのエースモンスターであるブラック・マジシャンは、邪帝の効果によって除外されてしまっている。

更に邪帝のフィールドには、攻撃力2400の帝モンスターが二体も出揃っているのだ。

激しいダメージを受け、身体に上手く力が入らない西条は、霞む視界の中でも前を見続けていた。

「ゼイ… ツ、ゼイ… ツ、ゼイ…」

「フッフ… 満身創痍だな、人間。最早このデュエル… 貴様に勝つ術はない」

今にも崩れそうな姿勢を保つ西条に、邪帝は余裕な態度で語りかける。

「貴様のライフは残りたったの900… このままデュエルを続けた所で、その程度のライフなど、私の前では無いに等しい…!!」

「…ゼイ… ツ、…ゼイ…」

「そんな貴様に私からの最後の慈悲を与えてやろう。降参<sup>サレンダー</sup>しろ、人間」

「…ッ!？」

邪帝からの突然の発言に、西条の耳がピクリと反応する。

「このままデュエルを続ければ、更なる激しい苦痛を伴う事になる。最早貴様は、私に勝つ事は不可能なのだ。同じ敗北ならば、痛みを感じない選択をしてはどうかね？」

「…降参…っ、だと…ッ!？」

降参。

確かに邪帝が言うように、そうする事も出来る。

自分のライフも残り少ない。

フィールドもがら空き。

四枚の手札の中にも、邪帝に対して何ら有効な手は残っていない。

「フッフ…どうだ。その小娘もそう思わんかね？」

「え…!？」

何も答えない西条に変わり、次に邪帝はマジシャン・ガールに狙いを定めた。

「先ほどから、その人間の背後でデュエルを観ていた貴様ならば分かるだろう。この人間では、私を倒せないと…!!」

「…わこじよお…!…」



マジシャン・ガールの前では、膝に手を着き、肩で大きく息をす  
る西条の姿が。

確かに、これ以上のデュエルを続けるのは危険だと思う。

例えライフが残されていようが、彼の身体が保つかどうか分  
からない。

手札だって、彼の背後から見ていたから分かる。

今のままでは、敵の二体の帝モンスターを倒す事はできない。

(…このままデュエルをしても…やっぱり、王クラスの相手は桁が  
違うんだよ…)

仮に自分が西条と代わっても、邪帝を相手に戦えるかどうかも怪  
しい。

万事休すとは正に、今のような状況を表す言葉として適切であっ  
た。

「小娘、貴様からも人間に言ってやれ。この私に勝てないと」

「……………せいじょお」

手札・フィールド・ライフ。

それらの状況が、マジシャン・ガールの気持ちをぐらつかせる。

「もう…むー…」

「無理じゃねえ」

最初は彼が何を言っているのか分からなかった。

彼の言葉を理解するのに、マジシャン・ガールは一瞬の時間が必要だった。

「…え」

「無理じゃねえって！何だよさつきから。人が少し休んでる間に、勝手にベラベラと話しを進ませやがって…！！」

マジシャン・ガールの前で、ぎこちない動作でありながらも、西条は立ち上がる。

その瞳は、とても澄んだ色をしていた。

このデュエルに対する、絶対に諦めないという強い信念が、彼の瞳には宿っていた。

「でも、さいじよお…！！」

「何でお前に降参サレンダーを進められなきゃならねんだよ？良いか、よく聞けよマジシャン・ガール」

西条は向き直り、キョトンとした表情の彼女に言い放つ。

「俺は、お前を助ける為にデュエルをしてるんだ！俺はお前の、そんな言葉なんか望んじゃいねえ！ただ一言、『頑張れ』、それだけで良いんだよ」

「…さいじょ」

「俺を信じる。マジシャン・ガール！！」

俺を信じる。

その言葉は、何故かマジシャン・ガールの胸に熱く染み込んだ。

彼は、この世界に来たばかりの自分を信じてくれた。

だから今、彼はここに立っている。

自分の代わりに立っている。

ならば、彼の言うとおりではないか？

彼が自分を信じてくれた様に、今度は自分が、彼を信じる番だ。

「…うん」

マジシャン・ガールは一呼吸おいて、自分の気持ちに言い聞かせる。

このデュエルに対する、彼の気持ちに伝える為に、今できる精一杯の笑顔で、彼女は言う。

「頑張つて、さいじょおー!!」

「ああ。任せとけ!!」

デュエルを通じ、ようやく気持ちを通じ合わせた二人。  
そしてここから、西条の反撃が始まる。

【西条亨】

LP / 900

「手札」

4枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

なし

【邪帝ガイウス】

LP / 3500

「手札」

1枚

「モンスター」

邪帝ガイウス

風帝ライザー

「魔法・畏」  
なし

遂に始まった西条のターン。

絶対に諦めない、という気持ちを確固たるものとし、西条はデッ  
キトップに指を添える。

この手は降参の意味ではない。

可能性という未来を賭けた一枚。

「愚かな…」

西条やマジシャン・ガールが自分の意のままに動かなかった事に、  
邪帝は呆れたようにそう呟く。

「愚かでも何でも良いさ…」

そう。

何と罵られようが、西条は諦めない。

マジシャン・ガールを助けると決めたから。

それだけではない。

「俺は…決闘者だ。そこに1%でも可能性が残されてる限り…ッ、  
デュエリスト

俺は諦めない!!」

決闘者として、自分自身にそう決意したから。

「行くぜ…!! 俺のターン、ドロツツ!!」

シュバツ!!

キイイイイイ…!!

ラストターン宣言をされた西条が引き当てた可能性<sup>カード</sup>。それは…。

「…フフフ。無駄な事をー…」

「…ツ!! それはどうかな?」

(ツ!?)

嘲笑う邪帝であったが、西条の言い放つ言葉に一瞬の戸惑いが生じる。

ふと見ると、西条の顔は真剣だった。

このデュエルに諦めた者の目をしていなかった。

(まさか…!!? 引き当てたとも言っのか!?! この状況を打開

する為の…カードを…ッ!?)

「さいじょお…!?!」

周囲が戸惑う中、西条は反撃を開始する。

「邪帝。ここからが本当のデュエルだ!! 手札を1枚捨てる事で…手札より『THE トリックキー』を特殊召喚ッ!!」

【THE トリックキー】

星5 / 風属性 / 魔法使い族

ATK / 2000 DEF / 1200

「効果」

手札を1枚捨てる事で、このカードを手札から特殊召喚する。

手札の『見習い魔術師』を捨て、西条は上級モンスターを特殊召喚した。

しかし、THE トリックキーの攻撃力は2000。

邪帝の操る帝モンスターの攻撃力には届かない。

「攻撃力2000…!?!? フッフ…その程度のモンスターでは、この私を…」

「更に俺は、チューナーモンスター『ターボ・シンクロン』を召喚ッ!!」

【ターボ・シンクロン】

星1 / 風属性 / 魔法使い族

ATK / 100 DEF / 500

「効果・チューナー」

このカードの攻撃宣言時、攻撃対象となるモンスターを守備表示にする事ができる。このカードの攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けた時、受けたダメージの数値以下の攻撃力を持つモンスター1体を手札から特殊召喚する事ができる。

西条はTHE トリックを特殊召喚はしたが、まだ通常召喚は行っていなかった。

そして、通常召喚権を使用して出したモンスターは、レベル1のチューナーモンスターであった。

「チューナーモンスターだと…貴様ツ、まさか…ツ!!」

チューナーモンスターの召喚に、それまで余裕な態度でいた邪帝も言葉に詰まる。

そうした中で西条は、邪帝の繰り出すモンスターに対抗すべく、力の限り声をあげた。

「行くぞ…!! レベル5のTHE トリックに、レベル1のターボ・シンクロンをチューニング!!」



ヒュンヒュン…ッ！！

西条の掛け声と同時に、彼のモンスター達は高く跳躍した。互いの力を一つにし、ここに新たなモンスターが誕生する。

「集いし絆が更なる力を紡ぎだす。光さす道となれ！！」

カッツ！！

「シンクロ召喚！！ 轟け『ターボ・ウォリアー』！！」

【ターボ・ウォリアー】

星6 / 風属性 / 戦士族

ATK / 2500 DEF / 1500

「シンクロ / 効果」

「ターボ・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上このカードがレベル6以上のシンクロモンスターに攻撃する場合、攻撃対象モンスターの攻撃力を半分にする。このカードはレベル6以下の効果モンスターの効果の対象にならない。

西条のフィールドに現れしモンスター、ターボ・ウォリアー。

彼の後ろで見つめていたマジシャン・ガールは、彼のシンクロ召喚に心を踊らせた。

「シンクロ召喚…ッ！？ まさか貴様如きが、シンクロ召喚をする

とは…!!」

「どうやら俺のラストターンには、まだ早かったみたいだな。行くぞ、邪帝！バトルッ!!」

シンクロ召喚をし、勢いに乗る西条は、バトルフェイズへと突入する。

「ターボ・ウォリアーで、邪帝ガイウスに攻撃ッ!! アクセル・スラッシュ!!」

「ぐおおお!!?」

【西条亨】

LP / 900

【邪帝ガイウス】

LP / 3500

3400

ターボ・ウォリアーの一撃が決まり、邪帝ガイウスを破壊した。邪帝にとってはこの展開が予想外だったのか、紅く光らせる瞳は大きく見開いていた。

「くう…ッ、人間めがア…ッ!!」

「邪帝…！！ 今の内に宣言しておくぜ…！！」

勢いに乗った西条は、対峙する邪帝に向かい、ビシッと指をさした。

そして言い放つ。

決闘者としての、マジシャン・ガールを守ると決めた決意を込めて、こう言い放つ。

「次のターンが、お前のラストターンだ…！！」

## 帝王の降臨 (後書き)

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございました。  
さて、今回の内容は如何でしたでしょうか？

【帝モンスター】の効果でフィールドを制圧していく邪帝でしたが、負けじと西条もシンクロ召喚という反撃に出ました。  
次回でいよいよ決着です。

しかし書いてて思いましたが、デュエルの描写を表現するというのは本当に難しいなあという事です。

今回の内容で例えれば「ターボ・ウォリアー」というモンスター。皆様ならいったいどう表現します？

今まで遊戯王を観て来た、若しくは遊戯王カードをやっていたという方ならば、ターボ・ウォリアーと聞いただけでそのモンスターの絵、もといイメージが浮かぶと思います。  
しかし、それらを知らない方が読んだら…？

「ターボ…？…は？」

で終わりです。うゝゝん…あの赤いリーゼントとしか言い様がない気がします…

やはりそういった表現も組み込んだ方が良いのかな？  
凄く大変そうだけど…

さて、秋の色が徐々に現れてきました。

夏とは違い、早朝の冷えた空気で肌寒く感じる方もいらっしゃる

かと思えます。

季節の変わり目ですので、体調管理にはくれぐれもお気をつけ下さい。

それでは、今回はこの辺りで筆を置かせてもらいます。

また次回の話でも皆様と会える事を願っています。

ありがとうございました。

## 西条の決意

深夜：午前一時三十分。

商店街、住宅街、路地裏に、それぞれ二人の足音が響き渡る。

一人は髪をオールバックに纏めた大柄な体格の男。  
名を白石直也。

そしてもう一人は、やや小柄な背丈で、青ざめた表情から細い目つきが特徴的な男。  
名を結締智恭。

二人とも三上市にある第七デュエル高等学校に通う高校二年生である。

二人は辺りを見渡しながら、何かを探すように三上市の中を走り回っていた。

かれこれ二十分近く走り回り、白石の後ろをついて回る結締は、ヨロヨロと足をもつれさせながら、近くに建っていた電柱にもたれ掛かる。

「し、白石さん…ちょ、ちょっと待ってくれい…うぷ」

「何だ、もうへばったのか結締？ だらしがないぞ…!!」



結締！！ コツチに来るなアアア！！」

深夜の三上市のとある一角で、白石の悲鳴が響き渡った。

【西条亨】

LP / 900

「手札」

2枚

「モンスター」

ターボ・ウォリアー

「魔法・罨」

なし

【邪帝ガイウス】

LP / 3400

「手札」

1枚

「モンスター」

風帝ライザー

「魔法・罨」

なし

「次が私の…ラストターン、だと…？」



ターボ・ウォリアーを召喚し、邪帝のモンスターを破壊した西条は、邪帝に対してそう宣言した。

しかし、それで黙っている邪帝ではない。

「シンクロ召喚して、随分と図に乗ってきたようだな、人間……！！  
貴様、自分のライフが後どれほど残っているのか、分かって言っているのか？」

西条の残りライフは僅か900。  
下手をすれば、あと一撃で決着がついてしまう位まで減少していた。

対する邪帝の残りライフは3400。

決して多いと言える数値ではないが、それでも西条と比べれば、幾分か余裕がある。

しかし、それでも西条は諦めない。

このデュエルに勝ち、マジシャン・ガールを助けると決めた彼の想いは強固なものだった。

「分かってるさ。だからこそ、次のターンで決着をつける……！俺  
がお前に勝つっていう結末でな……！！」

声を大にし、西条は手札のカードを掴み取る。

「リバースカードを1枚セットして、ターンエンド!!」

念には念を…。

デュエルとは、たった一枚のカードから戦況をひっくり返される事がある。

自分から、次がラストターンだと宣言した為に、西条は打てる手は全て出す事にしたのだ。

「…フン、いい気になるなよ」

気持ちが高ぶる西条とは違い、邪帝は内心穏やかではなかった。

序盤は確実に、自分のペースでデュエルが進んでいた。

しかし、西条がブラック・マジシャンを召喚してから、デュエルの流れが激しく揺らいでいた。

しかし、邪帝にも手はない訳ではなかった。

邪帝の手札は一枚。

その一枚のカードとは…？

(フフフ…私の手札は、『魔法カード』『死者転生』。いくら貴様が足掻こうが、私のターンが始まれば…!!)

脳内でこの後の展開をシュミレートする邪帝は、細く不気味な笑みを浮かべる。

「このデュエル、やはり私の勝利に終わると見た……！！ 私のターンッ！！」

自分のターンを開始する邪帝は、カードをドロし、スタンバイフェイズへと移行し…。

「スタンバイフェイズ、私は墓地の『黄泉ガエル』の効果発動！！  
墓地よりこのカードを特殊召喚！！」

【黄泉ガエル】

星1 / 水属性 / 水族

ATK / 100 DEF / 100

「効果」

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フィールド上に魔法・罫カードが存在していない場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果は自分フィールドに「黄泉ガエル」が表側表示で存在する場合は発動できない。

墓地に眠る黄泉ガエルが、邪帝のフィールドに守備表示で特殊召喚された。

スタンバイフェイズを終え、メインフェイズへと移行した邪帝は、二枚となった手札から一枚のカードを掴み取る。

「フフフ…人間、覚悟するが良い！！ このカードで、貴様の滅ら  
ず口を叩いてくれるわ…！！」

「っ！？」

「魔法カード『死者転生』を発動！！」

【死者転生】

「魔法カード」

手札を1枚捨てて発動する。自分の墓地に存在するモンスター1体  
を手札に加える。

邪帝が魔法カードを発動した瞬間、辺りに不穏な空気が漂いだし  
た。

それはまるで、今の邪帝の心理を具現しているような…。

「このカードは、手札を墓地に送る代償として…墓地のモンスター  
を手札に加える。勿論…私が手札に戻すカードは…フフフ！！」

「ッ…『邪帝ガイウス』のカード…！？」

邪帝ガイウス、自らの分身を手札に戻した邪帝は、高らかに笑い  
声をあげる。

「フハハハハ！！ 私は黄泉ガエルをリリースし、アドバンス召

喚ツ！！ ヤツに引導を渡してやれ…！！ 我が分身、邪帝ガイウスッ！！」

【邪帝ガイウス】

星6 / 闇属性 / 悪魔族

ATK / 2400 DEF / 1000

「効果」

このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上に存在するカード1枚を除外する。除外したカードが闇属性モンスターだった場合、相手ライフに1000ポイントのダメージを与える。

グゴゴゴゴゴ…ッ！！

再び西条の前に現れし邪帝ガイウス。

アドバンス召喚に成功した事により、邪帝ガイウスは自身の効果の発動を、高らかに宣言した。

「我が分身の効果は貴様も知っついていよう？アドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカードを除外する！！」

現在、西条のフィールドにカードは二枚。

モンスターカードであるターボ・ウォリアーに、一枚のリバーScカードだ。

更に言えば、西条の残りライフは僅か900。

少しのダメージも、即敗北へと繋がりがねない程であった。

「我が分身の効果で、人間よ！！ 貴様のシンクロモンスター、ターボ・ウォリアーを除外すれば… 貴様を守る術は無くなる訳だ…！」

得意気に語る邪帝。

その様子からして、邪帝は本当にこのターンで勝負をつけるつもりなのだろう。

しかし、西条とて負けていられない。

残りライフが僅かだろうが何だろうが、彼とて負けられない理由があるのだ。

「残念だが邪帝、お前の効果は通用しないッ！！」

「っ!?!」

「ターボ・ウォリアーは、“レベル6以下の効果モンスターの効果対象にならない”という永続効果を持っている！お前が繰り出す【帝モンスター】のレベルは6！よって、お前が召喚した邪帝ガイウスは、俺のモンスターを対象にする事は出来ない！！」

【帝モンスター】というのは、レベルが5〜6の上級モンスター達だ。

そして共通している効果が、アドバンス召喚時にフィールド上の

カードを対象にとって発動する、という事。

西条の召喚したターボ・ウォリアーは攻撃力でもそれらを上回っている為、対帝モンスターというには打ってつけのモンスターである。

「ターボ・ウォリアーの効果によって、お前の召喚した邪帝ガイウスの効果は、俺のモンスターは受け付けない！！消えるのはお前のモンスターだ！！」

「帝モンスター達は全て強制効果だから…凄…さいじょお、凄…よ…！！」

敵の能力を坂手にとってのシンクロ召喚。

そんな西条のプレイに、デュエルを観戦するマジシャン・ガールは心を踊らせる。

しかし…。

「フフフ…なる程。少しは考えてデュエルをしているみたいだな、人間…だが、まだ詰めが甘い…！！」

「…なに？」

「忘れてないか？我が分身、邪帝ガイウスには…もう一つの効果がある事を…！！」

「もう一つの…効果…ハッ!？」

邪帝に言われた事で、西条は数ターン前の事を思い出した。

その効果によって、自分のエースカードであるブラック・マジシヤンが除外された時…。

『ブラック・マジシヤンは闇属性モンスター。我が分身…邪帝ガイウスは、自身の効果で除外したカードが闇属性モンスターだった時、相手に1000ポイントのダメージを与える…!!』

「…まさか…ッ!？」

「そう。我が分身、邪帝ガイウスの効果は、何も貴様のフィールドだけが範囲ではない。全てのフィールド上に効果が及ぶのだよ?」

その意味が分かるか?と、邪帝は卑しい笑みを西条に向けた。

邪帝ガイウス自身は闇属性モンスターだ。

つまり、自分自身を効果の選択として除外すれば、問答無用で相手に1000ポイントのダメージを与える事が出来るのだ。

【西条亨】

LP / 900

【邪帝ガイウス】



「フハハハハ！　そうだ。貴様の思った通りだ人間よ！！　邪帝ガイウスの効果発動！！　自身を除外し、ヤツに1000ポイントのダメージを与える！！」

「そんな…ッ!?!」

一喜一憂、今度は驚愕の声をあげるマジシャン・ガール。  
この効果が成立すれば、西条に1000ポイントのダメージが入り、負ける。

そうなれば、自分の使命が…そして何より、彼の命が…。

(このままじゃ…さいじょおのライフが0になっちゃう…!!　さいじょお…っ!?!?)

マジシャン・ガールが声をあげようとしたその時、西条は残った手札一枚を取り出した。

「くっ、そうはさせない!!　手札の『エフェクト・ヴェーラー』の効果発動!!」

【エフェクト・ヴェーラー】

星1 / 光属性 / 魔法使い族

ATK / 0 DEF / 0

「チューナー・効果」

このカードを手札から墓地へ送り、相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。選択した相手モンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。この効果は相手ターンのメインフェイズ時のみ発動する事ができる。

「このカードを手札から捨てる事で、効果モンスターの効果を、エンドフェイズ時まで無効にする！！」

「なにっ!?!」

西条がエフェクト・ヴェーラーのカードを捨てると、邪帝のフィールドの邪帝ガイウスの効果が弾け飛んだ。

これにより邪帝ガイウスは除外されず、西条にダメージは入らなかった。

「おのれ…ッ…貴様ア…ッ!!!」

訝しむ表情を作る邪帝はこのターン、打つ手が無かった。モンスターを召喚し、手札も0。

肝心のモンスターでさえ、西条のモンスターの攻撃力には届かない。

「どうした邪帝…このターンで決着ケリを着けるんじゃないのか？」

「ぐうう…!？」

打つ手が無い邪帝は、ターンを終了するしかなかった。  
そして始まる。

このデュエルのラストターン。  
西条の攻撃ターンが始まる。

「はあ？西条ちゃんが出て行ったア？」

真夜中の三上市内を搜索する白石に結締は、駅前の商店街、その路地裏に居た。

先程まで真つ青な顔をしていた結締であつたが、吐くだけ吐いたらスツキリしたらしい。

ミネラルウォーターを一気に飲み干した結締は、隣で靴を一生懸命になって洗う白石に、事の経緯を尋ねていた。

「それにしても珍しいな…西条ちゃんが先生に反発してまで、夜中に飛び出して行くなんざ…」

「ふうん…。どうやら西条のヤツ、女の事で飛び出して行ったらしい」

「さッ…西条ちゃんに…お、女だと!？」

女と聞いて、結締は驚きを隠せなかった。

西条や白石とは、中学校時代からの付き合いだから分かる。

今まで自分たちには、女性関係の話題なんてなかった。

それが遂に、三人の中から女性関係の話しが持ち上がったのだ。

お年頃の結締からすれば、コレほどのネタはない。

「なる程…こりゃあ面白そうな話しになってきたぜい」

「だろう?それに西条のヤツを見つけないければ、俺の補習も無しにしてくれると先生は約束してくれた!! コレは俄然、やる気が出てくるわ!! ワハハハハ!!」

「白石さんの補習の話しは個人的に納得いかねえが…ま、西条ちゃんに関しちゃ同感だぜい」

結締は飲み干したミネラルウォーターのペットボトルを放り投げ、ゴミ箱にシュートを決める。

「ほら、何時までボサッとしてる白石さん!サッサと西条ちゃんを探しに行くぜよ!…」

「ま、まで結締っ！？ まだ反対の靴に貴様のゲロが付着したままなのだ！！ アルコール消毒させる！！ って、俺を置いて行くなアア！！」

二人の西条探しは、まだまだ続く。

【西条亨】

LP / 900

「手札」

なし

「モンスター」

ターボ・ウォリアー

「魔法・罨」

リバースカード 1枚

【邪帝ガイウス】

LP / 3400

「手札」

なし

「モンスター」

風帝ライザー

邪帝ガイウス

「魔法・罨」

なし

「俺のターンッ！！」

邪帝のターンを凌ぎ切り、始まる西条のターン。

カードをドローした西条は、険しい表情で睨み付けてくる邪帝に  
対し、こう言い放つ。

「さあ邪帝…覚悟は良いか？俺はこのターンで、お前を倒す…！！！」

「ぬうう…出来るものなら、やってみせろ…！！！」

現在、西条のフィールドには攻撃力2500のターボ・ウォリア  
ーと、一枚のリバースカード。

そして手札はドローした一枚のみ。

対する邪帝のフィールドには、リバースカードは無いものの、攻  
撃力2400の帝モンスターが二体並んでいるのだ。

（ヤツのモンスターが攻撃してきた所で、私が受ける戦闘ダメージ  
はせいぜい100ポイント。それに私のライフは、まだ3400も  
残っている…！！）

まだチャンスはある。

「このターンで決着を着ける事など不可能だ！と、邪帝は誰でもない。自分自身にそう言い聞かせる。」

そうした中、西条はこのデュエルに終止符を打つ為の最後のプレイを開始した。

「よく見てるよ、マジシャン・ガール。俺は勝つぞ…このデュエルに…！！」

「…さいじょお。うん…！！」

西条はマジシャン・ガールの返事を聞くと、自分の墓地から二枚のカードを取り出す。

「墓地に眠る光属性モンスター『魔導騎士ディフェンダー』と、闇属性モンスター『魔導戦士 ブレイカー』を除外し、手札より特殊召喚ッ…！！」

光と闇の力を解放し、西条が特殊召喚するモンスター。

それは…。

「現れよ、混沌の魔術師！『カオス・ソーサラー』…！！」

【カオス・ソーサラー】

星6 / 闇属性 / 魔法使い族

ATK / 2300 DEF / 2000

「効果」

このカードは通常召喚できない。自分の墓地に存在する光属性と闇属性のモンスターを1体ずつゲームから除外した場合に特殊召喚する事ができる。1ターンに1度、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してゲームから除外する事ができる。この効果を発動するターン、このカードは攻撃する事ができない。

西条のフィールドに召喚されし、混沌の魔術師。

片方の手には光の力を、片方の手には闇の力を。

そのモンスターの登場に、邪帝は表情に影を作っていく。

「貴様ツ…そのカードは…!!」

「カオス・ソーサラーの効果発動!! このターン、自身の攻撃を封じる代わりに、フィールド上のモンスター1体を除外する!! 消えろ、風帝ライザー!!」

ゴバウツ!! と、凄まじい力が邪帝のモンスターを襲う。

カオス・ソーサラーの効果を受けた風帝ライザーは、その身体を亜空間へと消失させた。

これにより邪帝のフィールドには、邪帝ガイウス1体のみとなつてしまった。



「ッ！！ 風帝を除外したからと言って、いい気になるな！！ 見ろッ！！」

【西条亨】

LP / 900

「手札」

なし

「モンスター」

ターボ・ウォリアー

カオス・ソーサラー

「魔法・罨」

リバーズカード 1枚

【邪帝ガイウス】

LP / 3400

「手札」

なし

「モンスター」

邪帝ガイウス

「魔法・罨」

なし

「貴様、言ったな？このターンで決着を着けると。貴様の場に攻撃できるモンスターは、ターボ・ウォリアーしか居ないではないか！？ カオス・ソーサラーは効果により攻撃は出来ず、貴様の手札は0ッ！！ このターンで貴様が私に与えるダメージは、たったの100ポイントでしかない！！」

まくし立てるように豪語する邪帝。  
言葉の端に焦りや不安が見え隠れする中、邪帝は言い放つ。

「やはり所詮、貴様はその程度……！！ 次のターンで、私がこのデュエルに終止符を打つ……！！ 私の手でな……！！」

「……………」

スウウ……と瞳を閉じる西条。

確かに邪帝の言うように、このままでは邪帝に1000ポイントのダメージしか与えられない。

そうなれば邪帝のターンに移り、下手をすれば自分はこのデュエルで負けてしまうだろう。

しかし、自分は宣言した。

このターンで、自分が勝つという事を宣言した。  
その為の準備は既に完了している。

「……言いたい事はそれだけか？」

「……なにっ!?!?」

「言った筈だぜ?このターンでラストだと……! 確かに、俺の手札は0で、このターンでモンスターを召喚する事はできない。だが……ッ……!」

西条はそう言いながら、自分の場に伏せてある一枚のカードを指した。

「俺にはまだ、このカードが残されている。そしてこのカードこそが、今回のデュエルのキーカードだ！！ リバースカード、オープンッ！！」

西条が言うキーカード。

それは…。

「畏カード『異次元からの帰還』を発動！！」

【異次元からの帰還】

「畏カード」

ライフポイントを半分払う。ゲームから除外されている自分のモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。エンドフェイズ時、この効果によって特殊召喚されたモンスターを全てゲームから除外する。

【西条亨】

LP / 900

450

【邪帝ガイウス】

LP / 3400

「このカードは俺のライフを半分払う事で、ゲームから除外されている自分のモンスターを、全て特殊召喚する！！」

「なにいいッ！！？」

このデュエルで西条の除外されているモンスターが全て復活する事に、邪帝は思わず後ずさる。

「現れよ…魔導戦士 ブレイカー！！ 魔導騎士ディフェンダー！！  
そして…ブラック・マジシャン！！」

【西条のモンスター】

ターボ・ウォリアー

ATK / 2500

カオス・ソーサラー

ATK / 2300

魔導戦士 ブレイカー

ATK / 1600

魔導騎士ディフェンダー

ATK / 1600

ブラック・マジシャン

ATK / 2500

(さいじょお…それに、お師匠さま…ッ!!)

モンスターカードゾーン全てを覆い尽くす展開力に、邪帝は言葉を無くした。

こうなれば嫌でも分かってしまう。

この先の展開を。

このデュエルの結末を。

「バトル!! ターボ・ウォリアーで、邪帝ガイウスに攻撃!!  
アクセル・スラッシュ!!」

ズゴウツ!!

「グウウ…ッ!!」

【西条亨】

LP / 450

【邪帝ガイウス】

LP / 3400                      3300

ターボ・ウォリアーの攻撃が炸裂し、邪帝ガイウスは破壊された。  
これで邪帝のフィールドにはモンスターが全て消え、邪帝を守る者は誰も居なくなってしまった…。

そして、西条の攻撃は続く。

「続けて魔導戦士 ブレイカー、魔導騎士ディフェンダーでダイレクトアタック!!」

ズバツズバツ!!

「ガアアアア!!」

【西条亨】

LP / 450

【邪帝ガイウス】

LP / 3300

1700

1000

二体の魔導戦士たちの攻撃を受け、邪帝のライフは風前の灯火となる。

そして、遂に動き出す。

このデュエルを終わらせる為に。

マジシャン・ガールを守る為に、彼のエースが動き出す。

「この一撃で決める!! 行けッ、ブラック・マジシャン!!」

黒・魔・導 ツ!!

辺りに凄まじい闇の閃光が迸る。

ブラック・マジシャンの攻撃を受けた邪帝は、弾け飛ぶ魔力の奔流に飲み込まれ、地に膝を着かせた。

「ツツ………ツツグハアツツ  
………」

【西条亨】

LP / 450

【邪帝ガイウス】

LP / 100 0

この瞬間、西条 VS 邪帝のデュエルは、西条の勝利に終わった。

ピキッ、パキヤパキヤパキヤパキヤ…。  
ビシシツツ…！！

デュエルの決着がつき、西条と邪帝の二人を囲っていた魔法陣の結果に、無数の亀裂が走る。

そして、結界の外にいたマジシャン・ガールの目の前で、まるで校舎の窓ガラスが一斉に割れたかのような衝撃音が鳴り響いた。

三上市の河川敷。

マジシャン・ガールの前で最後に立っていたのは、西条亨だった。

対する邪帝は地に膝を着き、全身をワナワナと震わせながら、唸るような声をあげる。

「ぐうう…ッ、油断…したか…ッ!!」

邪帝からすれば、今回の出来事は自分でも信じられないらしく、握った拳を力任せに地面に叩き付ける。

邪帝はデュエルで負けた。

精霊界でも【王】と呼ばれた自分が、人間界にてどこの馬の骨とも知れない輩にデュエルで負けた。

「…邪帝、俺の勝ちだ…!!」

「…ッ!!」

地に膝を着く自分の前に立つ西条に告げられ、邪帝はようやく、現実を認識する。



認識する事で、邪帝はゆっくりと立ち上がり、自分を見つめる西条と同じ様に、自分も彼を真っ直ぐに見つめる。

「…デュエルによる約束は守ろう。今回は、これ以上その小娘には手出しはしない。私は精霊界に引き上げよう…」

邪帝がそう言うと、彼の身体に、ある変化が訪れた。

まるで闇夜に染まっていく様に、うつすらと邪帝の身体が透明化してきているのだ。

それは、邪帝が精霊界に帰っていく事だと、西条は認識する。

「今回のデュエルで力を消耗した私が、近い内にこの世界に来る事はないだろう。だが、今回の事は…始まりに過ぎない」

「…なに？」

消え行く中、邪帝は自分に聞き入る西条に告げていく。

「私が貴様に敗れた事で、他の勢力もその小娘を狙ってくるだろう。フフフ…どうだ、今の気分は？」

つまりはこういう事だ。

自分の他にも、マジシャン・ガールを襲おうとする連中は次々と攻めてくるだろう。

そうした中で、貴様はどこまでマジシャン・ガールを守りきれるか？

邪帝はそう、西条に尋ねた。

それに対する西条の言葉は…。

「…誰だって良い。何時だって良い…」

西条は消え行く邪帝を真っ直ぐに見据え、言葉を強く発した。

「アイツの使命を果たす為なら…俺がいくらでも相手になってやる…！！　そう伝えとけ」

「フ…良い返事だ」

邪帝はそう呟くと、消え行く最後に。

確認するかのように、西条を見据える。

「…そう言えば…貴様の名を聞いていなかったな。人間…貴様の名は…？」

西条。

彼は自身の名に決意を込めて述べた。

彼の名を聞いた邪帝は頷くでもなく、返事をするでもなく、訝しむでもなく。

小さな笑みを浮かべて、人間界から姿を消した。

邪帝が人間界から去り、三上市の河川敷には日常の静寂が戻ってくる。

涼しげな夜風、隣から聞こえる河のせせらぎ。

西条はそれらを見渡し、ひと息つく事で実感する。

マジシャン・ガールを守る事が出来たのだという事を…。

「っ！？ そうだ、マジシャン・ガール！」

実感する事で思い出したかのように、西条は振り返る。

そこには、ボロボロな姿になりながらも、綻んだ表情を見せるマジシャン・ガールが立っていた。

自分が駆けつける前、マジシャン・ガールは邪帝の部下達とのデュエルで敗北し、酷い仕打ちを受けていた。

つい先程、精霊界のデュエルを経験していたから分かる。

あのデュエルでは、ダメージが実際の衝撃となって自らに襲い掛かってくるのだ。

デュエルを終えた今でも、西条の身体は所々が痛みという悲鳴をあげている。

つまりは、彼女も同じなのだ。

今、自分が痛みを堪えている様に、必死になって応援してくれていた彼女も、痛くない筈がないのだ。

西条はマジシャン・ガールに駆け寄る。

そして、デュエル中では分からなかった彼女の容態が、近くで見ると明らかになり、西条はショックを受けた。

破けた衣服から見える、擦りむいた肌。

腕や腹には殴打されたかのような、内出血が広がり。

小さな唇の周りには、血が拭われた痕が…。

「おい、大丈夫か？どこか痛む所ないか？立ってられるか？酷い怪我じゃねえか…！！ 何か冷やす物は…！？ ええつと…！！」

遠目では分からなかった。

まさか彼女がここまで酷い仕打ちをされているとは思ひもしなかった。

パニックになり、慌てふためく西条を見て、マジシャン・ガールは声を震わせながら…。

「…そんなにいっぺんに言われても…」

「…っ」

「…何から答えれば良いのか…さっぱりなんだよ」

その声は震えていた。

しかし、声を発する彼女の表情は笑顔だった。

邪帝を退けられた事への安堵から。

そして何より、二人とも無事であった事の喜びが、彼女の笑顔を作っていた。

「マジシャン・ガール…っ、お、おい!? 大丈夫かよ!？」

張り詰めた緊張の糸が切れたのだろう。

マジシャン・ガールはガクツと膝を崩し、西条に倒れ込む様にその身を預けた。

「しっかりしろ…おい!！」

「はは…ごめんね、さいじょお…。こんな痛い思いさせちゃって…」

西条の腕の中で、彼を見つめるマジシャン・ガールは、ゆっくりと瞼を閉じていく。

「わたしがもつと…つよくならなきゃ…ダメなんだね…そしたら、さいじょおが傷付くことなんて…なかった…」

「おい！？ なに言ってんだマジシャン・ガール！！ おいッ！！」

マジシャン・ガールのかすれゆく声と共に、彼女の目尻からポツリと涙が零れ落ちる。

「…ごめんね…さいじょお…巻き込んだじゃって…ホントに…ホントに…ごめ……」

「オイッ！！ マジシャン・ガール！？ マジシャン・ガールッ！！」

そこから彼の耳に入ってきたのは、隣を流れる河のせせらぎだけだった。

腕の中の少女は、涙を流したまま。

それ以降、彼女の口から言葉という声が聞こえてくる事はなかった。

「…なんで、お前が謝るんだよ…っ…！！」

少年の声は震えていた。

「…謝らなきゃいけないのは…っ、俺の方じゃねえか…っ！！」

自分が彼女を一人にしなければ、彼女は敵に襲われる事はなかったかもしれない。

自分もつと早く駆け付けていれば、彼女はこつも酷い仕打ちをされずに済んだかもしれない。

自分もつとデュエルが強ければ、彼女にこんな負担を強いる必要はなかったかもしれない。

西条の中に、自責の念が激しく渦巻いていく。

彼女を抱える両の腕に、尋常じゃない位の想いを込めて、西条は  
咳く。

「…ごめんな。マジシャン・ガール…」

西条は、今の自分がどんな顔をしているか、分からなかった。

「俺、強くなるから。これ以上、お前が涙を流さなくても良い様に  
…俺、強くなるから…！！」

西条は泣かない。

何故かそれは、自分で許せないと思ったから。

その言葉が、彼女に聞こえているかは分からない。  
その決意が、彼女の心に響いているかは分からない。

それでも、彼は自分自身に言い聞かせる。

彼女の為に。

彼女を守る為に、西条亨は決意する。

「だから…俺は……」

深夜になっても居る所に人は集まるものである。

白石と結締の二人がやって来たのは、辺り一面に裸の女性達のポスターやDVDが流出した、いわゆる卑猥なお店だった。

「感じる…俺にゃあ感じるぜよ！！　いきり立つ男の魂を！！」

「ふうん…熱くなるのは構わん。が、結締よ…とりあえず建て前として貴様に尋ねておくぞ。本当にこの店に、西条のヤツがいると思うか？」

「え…だって白石さん、女って言ったじゃん？女って事ア…つまりはこういったー」



「有り得ん。西条はこういった店に來ると、よく腹を壊していたからな…ヤツが自分からこの様な店に來るなど、俺には考えられん…！」

「ちえっ…じゃ、次に行つてみますか？」

「どうせ貴様が來たかっただけだろう？あ、待て結締！！　せめてこのエロ本を買つてからにー！！」

・  
・  
・  
・  
・

「はい、到着！！　ここなら西条ちゃんを搜索するのじゃあ、持つてこいな場所だぜい！！」

続いて二人がやつて來たのは、西条の住む学生寮の正門、その道沿いに植えられた茂みの中だった。

「結締よ…なぜこんな場所を…？」

茂みに隠れ、購入したエロ本を抱えて縮こまる白石は、這い蹲りながら双眼鏡を構える結締に、とりあえず尋ねてみた。

「考えてもみる、白石さん。三上市は広いんだぜい？そんな中、たった一人を探せつたつて…。『ウォーリーを探せ』ならともかく、

人間の足で街一つ探し回るなんざ、土台無理な話しだぜよ。そうなりゃ、残された手は一つ…!!」

「なる程…ここで待ち伏せという訳か」

「その通りだぜい」

きつと西条は帰ってくる時、この正門から学生寮に入ってくるだろう。

そこを待ち伏せして、帰ってきた西条を捕まえ、楠先生に彼を差し出せば…!!

というのが、結締の導き出した案である。

しかし、世の中そう上手く事が運ばないものである。

盲点だったのだ。

「…なにやってんの、アンタたち…?」

「え?」

「ムッ!?!」

それは、彼等のここに隠れるまでの一部始終の行動を、正門で待ち構える楠先生に、しっかりと目撃されていた事である。

「白石くん…それに、なぜ結締くんまで居るのか分からないけど…」

「せ、せんせい…」

「ま、待ってくー」

その瞬間、結締と白石の悲鳴が夜空を翔る。

結果、白石の補習は倍の数となり、結締も同じく補習を受けさせられる羽目になったのは言つまでもない。

## 日常

渦巻く炎の集落の中を、マジシャン・ガールは必死になって走っていた。

辺りに人は一人も居らず、感じるのは肌を焼くような熱気と、倒壊する家屋の焦げ腐ったような噎せ返る匂い。

自分の暮らすこの集落は、邪神の手の者によって、一度崩壊した。今、マジシャン・ガールは、誰か生き残りが居ないのか、懸命に搜索している最中なのである。

「みんな！だれか居ないの！？ 誰でも良いから、返事をして！」

声を大にして叫ぶマジシャン・ガールであったが、返ってくる言葉はない。

やはりもう…この集落の住人は、邪神の手の者によって既に…。

そう思うと、それまで走り回っていた足がピタリと止まる。

いや、そんな事はない！きっと誰かが残っている！

そうやって気を強く持つ事で、マジシャン・ガールは再び搜索活動を再開する。

すると、ある一カ所に視線が釘付けになった。

彼女の視線の先には、道に倒れている小さな女の子がいたのだ。

「あれは…!?!」

急ぎ、その子の所へと駆け寄るマジシャン・ガール。

抱えあげて、必死に声をかけるが、その子からの返事は微々たるものだった。

「酷く衰弱してる…!! 一刻も早く、手当て出来る場所に連れて行かないと…!!」

そう判断したマジシャン・ガールは、その子を抱えながらその場を離れようとした。

その時だ…。

いつからそこに立っていたのかは分からない。

マジシャン・ガールの前には、邪神の手先の中でも【王】と呼ばれるモンスター、邪帝ガイウスが立っていたのだ。

「邪帝っ…そんな!? なんでここに…!?!」

「フフフ…この集落から誰も逃がすなどの御命令だ。魔術師の小姑娘よ…デュエルだ…!!」

そう言い、マジシャン・ガールにデュエルを挑む邪帝。  
王とのデュエル。

その重圧に、マジシャン・ガールは青ざめた表情で、歯をカチカチと鳴らしながら、一歩、二歩と後ずさる。

勝てる訳がない。

自分なんか、王と呼ばれるモンスター相手に勝てる筈がない。  
邪帝の部下にさえ、手も足も出なかったのだ。

どう足掻いても、このままデュエルをした所で、自分が勝てる可能性など皆無だった。

「…いや…っ、来ないで…!!」

ペタンと尻込みし、ガクリと頭を垂れるマジシャン・ガールは、自己嫌悪や恐怖心から、その場を動く事ができなかった。

「助けて…お師匠さま…!! 助けて…」

目に大粒の涙を溜め込みながら、マジシャン・ガールは懇願する。

「助けて…っ、助けて…!! 助けて、さいじょおおお!!」

「さいじょおおお!! つ!?!」

気がつくところには、自分の世界の集落ではなかった。

見慣れない部屋の天井。

辺りを見渡す事で、マジシャン・ガールは自分が夢を見ていたんだと実感する。

部屋の中は、見慣れない物で満ち溢れていた。

机の上に置かれた四角い箱パソコンや、本とは違う紙を束ねた何か（ファイル）の数々。

更に言えば、自分が今まで体を預けていた、フカフカの長椅子ソファ。これらは彼の部屋に有っただろうか？

いや、ない。

(「どう、どこのの…?さいじょおの…部屋じゃ…ないの?」)

自分に掛けられていたタオルケットを引き寄せるマジシャン・ガールは、縮こまりながら挙動不審に辺りをキョロキョロと見渡す。

西条の部屋にはない重苦しさが漂うこの部屋に、マジシャン・ガールは息苦しさを感じていた。  
すると…。

ドタドタドタドタッ！！

「ヒィッ!?!」

マジシャン・ガールの耳に、けたたましい足音が響いてくる。

その足音は、どんどん自分が居る部屋に迫って来ているではないか。

恐怖心から気が動転しているマジシャン・ガールは、どこからか杖を取り出し、その先端を部屋のドアに向ける。

顔を背けながら杖を構えるマジシャン・ガールは、ドアが開いた瞬間。

部屋に飛び込んできた人影に向かって、黒魔導爆裂破をぶちこんだ。

「マジシャン・ガール!! 目エ覚ま『ズドンッ!!』ぶぎゃあああああああ!!」

「ふえ…!?! その声…って、ああ!?! さいじょお!?!」

不審者かと思いつき、攻撃した相手は、なんと西条亨だった。

吹き飛んだドアの下敷きになり、漫画チックに目をぐるぐると回しながら気絶する西条。

「いっ、ごめん、さいじょお! しっかりしてえ!」



慌てて彼をドアの下敷き状態から救出しようとするマジシャン・ガール。

すると、そんな彼女に、西条とは違う別の男性の声が聞こえてきた。

「ちょっと、西条ちゃん？今の音は何なのよ……って、あら？西条ちゃん……なんでドアの下敷きになっちゃってるの？」

マジシャン・ガールが声のした方を向くと、そこに現れた人物は、それはそれは巨大なオッサンだった。

自分の太もも位の太さはあるだろう筋肉質な腕。

ピチピチに張り裂けそうなシャツの上からでも明らか程、ガツシリした胸板。

そして、野太い声色から成る、独特なオカマ口調。

極めつけにその人物は、プロレスの選手が付けているような顔面を覆うマスクを被って現れたのだ。

一言で言い表せば、正真正銘の不審者が現れたのだ。

「きゃあああああ！　化け物おお！？」

「誰が化け物よ！！　全く、失礼しちゃうわね……ほら、西条ちゃん。何時までそうしてんのよ？」

怯えるマジシャン・ガールの前で、覆面オカマの人物は、今も気

絶している西条を軽々と引っ張り出す。

そして、ぐったりとしている彼を、まるで手軽な荷物を放り投げるかのような素振りです、ソファアの上にぼーんと投げ飛ばした。

「いい加減…っ、起きなさい！」

「ぐえっ!?!」

「オトコでしょ!?!」

「いっ…っ…っ…っ!?!」

どうやら投げ飛ばされた衝撃で意識を取り戻したらしい西条は、目をシパシパさせながら、ぎこちない動作で起き上がる。

「…あれ? 何で俺…こんなトコで倒れてたんだ? あれれえ?」

覆面オカマと西条のやり取りに言葉が出て来ないマジシャン・ガールは、とりあえず西条の側に寄る事にした。

現状が全く掴めないマジシャン・ガールは、彼の近くに居ても、不安が拭いきれる事はなかった。

落ち着いた所で、三人は部屋に用意されていた椅子にそれぞれ腰掛けた。

正面には覆面オカマの巨漢。

そして、マジシャン・ガールが眠っていたソファーに、西条とマジシャン・ガールが並ぶように座る所で話しは始まる。

「あー…先ずはお前に、この人から紹介しなくちゃいけないな」

言葉を探しながら口を開いたのは西条。

「この人は…ここ、カードショップ『アリス』の店長を勤めている、中島さんだ」

「紹介に預かった、中島よ ヨロシク」

「は…はあ…」

紹介された覆面オカマの中島は、マジシャン・ガールに向けてバチコーンとウインクをするが、マジシャン・ガールは引きつった表情のままである。

彼女からすれば中島は、覆面を被った怪しい男でしかなかった。

「んもう！西条ちゃん、その子イケずウ！！」

「恐がつてるんですって…店長がそのマスクを外せば…」

「ダメよ、絶対！絶対ダメ！！」

マスクを外せば、多少はマジシャン・ガールの反応も変わる筈なのだが、中島はそれを断固として拒否した。

「…えーっと、それでな、マジシャン・ガール。今、俺たちが居るこの場所だけど…分かんと思うが、俺の部屋じゃない」

「…みればわかるもん」

「ここは、この中島さんが経営しているカードショップの事務所なんだ。お前の事を匿ってくれるのに、中島さんは協力してくれただ」

「…え？」

匿う？それは一体どういう事なのか？

今の言葉だけでは、マジシャン・ガールは現状を理解できなかった。

「お前は覚えてないだろうけど、邪帝とのデュエルの後、お前は意識を失ってたんだ…」

「…え？」

西条の脳裏に蘇るあの時の出来事。

自分の腕の中で気を失ったマジシャン・ガールを休ませる為に、西条は三上市の街中を懸命に走り回った。

初めは、彼女を病院へと連れて行こうかと考えた。

しかし、彼女は精霊界から来たデュエル・モンスターなのだ。

人間界の医療が効果があるのか分からないし、何より病院側に彼女の事を、どう説明すれば良いのか分からなかった。

精霊界から来たマジシャン・ガールは、人間界での身分証を持っていないのだ。

どうすれば良いのか分からない。

どこに連れて行けば良いのか分からない。

自分の部屋に戻るか？

いや、寮には担任の楠先生が待ち構えている。

しかし、なりふり構ってられない。

西条がマジシャン・ガールを抱えて戻ろうとしたその時、彼に声をかけて来たのが中島だった。

「気を失ったお前を、店長は匿ってくれたんだ…」

「そう…なんだ…」

知らなかった。

自分が気を失っている間にも、彼が自分の為に必死になってくれた事。

彼だけでなく、その周りの人達にも迷惑を掛けていた事。

それらを知る事で、マジシャン・ガールは素直な気持ちで中島を見る事ができた。

それまで中島の事を、覆面オカマの怪しい人物としか思えなかったが、今は違う。

この人は西条と同じく、自分の為に協力してくれた恩人なのだと、マジシャン・ガールは理解した。

「あの…てんちょうさん」

「？」

どこか気まずそうに口を開くマジシャン・ガールは、縮こまり、気恥ずかしながら中島に向き直る。

「さっきは…化け物なんて言って、ゴメンナサイ…。それから…ありがとっございました…」

自分の気持ちをしっかりと言えたマジシャン・ガールは、チラッと上目遣いで中島の反応を待つ。

その中島は、そんなマジシャン・ガールの仕草に、マスクから覗く目をキラリと光らせた。

「ん〜、良いのよ。アナタの事情は西条ちゃんから聞いたし、アナタの事はアタシなりに理解してるつもり。だから…」

中島はそう言うと、マジシャン・ガールの前に自分の右手を差し出した。

一瞬、何のことだか理解できないマジシャン・ガールは、キョトんとしながら「コレはナニ？」と、西条に顔を向ける。

「コレは握手って言って…こうして互いに手を握りあう事で、ヨロシクって体現する挨拶だよ」

「へえ…そうなんだ」

まるで珍しいものを見るような表情に変わるマジシャン・ガールは、早速、自分に差し出された中島の手を握った。

「てんちよーさん、ヨロシクー！」

「「じちら」そ いつでも頼りにして良いわよ」

西条を通して、マジシャン・ガールは新たな仲間を作る事ができた。

その時の彼女の表情は、なによりも眩しい笑顔だった。

午前八時二十分。

カードショップ『アリス』を出た西条とマジシャン・ガールは、とりあえず彼の部屋もとい、学生寮に戻る事にした。

寮の前まで中島の車で送って貰った二人は、送迎してくれた中島に挨拶をする所だった。

「てんちよーさん、ありがとう！」

「スイマセン、車まで出して貰って……」

車から降りた二人に、中島は運転席の窓を開けて、覆面から覗く口元をニカッ　っとさせる。

「良いのよう　それよりも西条ちゃん、今日は“マナちゃん”をゆつくりと休ませてあげるのよ　」



「はい。そのつもりです」

マナちゃん、というのは彼の隣に立つマジシャン・ガールの事だ。それは車の中の事…。

中島の「マジシャン・ガールって名前、少し長いわネ…何かニックネームをつけたらどう」という発言から始まった。

確かに、いちいちマジシャン・ガールと呼ぶのは長い。

それに端から聞けば、なんでカードの名前で呼んでるのかと思われるってしまう。

そんな理由から、西条は「大食い女」と名付けようとしたが、マジシャン・ガールに杖を突きつけられた事で断念した。

「うー…じゃあ…マナ。これで良いんじゃないか？呼びやすいし」

『マ… マジシャン・ガールの

『ナ… なまえ

西条は適当に考えてそう呼んでみたのだが、本人はマナという名前が気に入ったのか、それですんなりと了承した。

勿論、西条がそんな適当な理由で言ったという事を、本人は知らない。

「それじゃ、西条ちゃん、マナちゃん。また会いましょう」

ブロロロロロ…

発進していく車を笑顔で見送る二人。

すると、そんな二人の背後に忍び寄る二つの影があった。

二つの影は二人に気付かれる事なく、西条の背後に迫って行く。

「さて…それじゃ、部屋に帰るとするか」

「さいじょお。帰ったら何か作って欲しいな！今のわたしは、お腹と背中がくつつきそうなくらいペコペコなんだよ！」

「はいはい。じゃあ…ーっ…！」

その時だった。

部屋に帰ろうと西条が振り返った瞬間、彼の目に飛び込んできた者。

それは…。

「サアアイジヨオウちゃああん…！！」

「ふうん…美少女を連れて朝帰りとは…！！ 西条よ、詳しく聞かせてもらおうか…！！」

「む、結締…！？ それに、白石まで…っ！？ なんでお前らがここに…！？」

両サイドに挟まれ、ガツシリと肩を組まれた西条は、結締と白石から逃げる事ができなかった。

「さいじょお…!？」

「ま、待て、マナ…!！」

彼が襲われた事で、杖を取り出そうとしたマジシャン・ガールだったが、それは彼の言葉によって制止される。

戸惑うマジシャン・ガールだったが、そんな彼女に結締が

「マナちゃんって言うのか…。心配しなくても大丈夫だぜい、マナちゃん。俺たちア、西条ちゃんのトモダチだ」

「トモ…ダチ…？」

「ああ、トモダチだとも。そうだろう、西条？」

「オマエ等…なんで…ッ!？」

白石直也、結締智恭。

この二人は、西条の中学時代からの付き合いだ。

これまでに何度も一緒に遊んだ事もある為、友達という呼称に偽りは無い。

偽りはないのだが、この時ばかりは友達という呼称は止めて欲しかった。

「俺たちや心配してたんだぜい…。夜中に西条ちゃんが寮から飛び出してったつて聞いたモンだからにゃ〜」

「おかげで俺や結締は、楠先生から…あ、いや、自ら進んでお前を探しに回ったというのに…」

どこか遠い彼方を見つめ、虚偽を交えながら語りだす二人。

楠先生に言われ、西条を探しに出たは良いが、結局、彼を見つめる事は出来なかった。

それどころか、こうして彼を捕まえてみれば、どこの誰ともしれない美少女マジシャン・ガールと一緒に居るではないか。

自分たちは罰として、補習を追加されたのに、コレはあんまりだ…！！

この時の結締と白石は、恐ろしい位の連携がとれていた。

「西条ちゃん。ドコでナニしていたのか…(補習の)時間までたっぷり聞かせてもらっぜい」

「いや、ちよつと待てオマエ等…！！俺はー」

「ふうん…なに、遠慮する事はないぞ、西条よ。俺達はトモダチではないか…！！」

「そうだぜい。トモダチ、トモダチ」

「いや、なんか怖いぞオマエ等!? 放せ、放してくれええ!!」

二人にガツシリと拘束されながら、自室へと運ばれていく西条。そんな彼らの様子を、マジシャン・ガールからすれば、こんな風に写っていた。

西条が寮から飛び出して行ったというのは、恐らく自分が敵に捕まってしまったからだろう。

敵に捕まってしまった自分を助ける為に、彼は精霊界の敵と戦ってくれたのだ。

しかし、彼の友人等はそんな事情など知る由もない。

ドコに向かったのか分からないが、友人として、彼の事を放っておけなかったに違いない。

（なんて友達想いの人達なんだろう…さいじよおは幸せだよ。こんな良い人達が友達で居てくれて…!!）

すっかり何か勘違いしているマジシャン・ガールは、彼等の友情愛（？）に感激しながら、彼等の後を追い掛けて行った。

現在、西条の部屋には、テーブルを囲うようにして座る三人の姿がある。

白石直也、結締智恭、マナことマジシャン・ガールの三人である。

何故この三人なのか？

部屋の主である西条は、いったいどこに居るのかということ…。

「さて、西条くん。昨夜…アナタは何処で何をしていたのかしら？」

「……………」

第七デュエル高等学校学生寮の管理人室である、楠ミナ先生の部屋であった。

白石と結締の二人に、先生の部屋に放り込まれた西条には、先生からの尋問が待ち受けていたのである。

昨夜、何処で何をしていたのか尋ねてくる先生に、西条はどうやって説明しようか悩んでいた。

正直にマジシャン・ガールの事をこの人に話しても、中島店長の様に直ぐに信じてくれるだろうか？

いや、無理だろう。

「スイマセン…街に出て…女の子を探してきました」

彼の言葉は嘘ではない。

敵に連れ去られたマジシャン・ガールを探す為に、自分はその時に飛び出して行ったのだから。

「探しに出て、それからは？まさか、今まで探し回ってた訳じゃないでしょう？」

「う…」

椅子に座り、優雅に脚を組む先生は、鋭い視線を西条に向ける。

正直に話せ。

その内容によって、アナタの処罰が決定すると思いなさい。

先生の視線にはそんな言葉が記されていた。

さて、ここからどう答えれば良いのだろうか？

敵とデュエルしてました？

それとも女の子とのイザコザで朝まで掛時間かかりました？

(うおおおおお！！ 何ッて説明すりゃ良いんだよおおお！！？)

汗という汗を滝の様に流しながら、西条の頭はショート寸前だった。

「と、とりあえず…朝まで知人の所とかに…」

「ふん、知人…ね？」

じっくり、じっくりと誘導されるように尋問してくる楠先生に、西条はある事に気付いた。

それは、向かいに座る楠先生が、徐々に鼻息を荒げながら

「で、西条くん。その子と朝まで十二してた訳？」

「へ？」

「大丈夫よ。先生は口が堅いから…（ハアハア）。良いから、包み隠さず全部話さない（ハアハア）」

「いや、先生…何か誤解してませんか？つか目つき怖っ！？目エ逝っちゃってますって、ちよつとオ！！」

「良いから（ハアハア）、良いから（ハアハア）」

「いや、良くない良くないって!？」

西条からすれば、楠先生は寡黙な印象が強かったのだが、まさかこんな一面を持っているとは知らなかった。

「どうしたってんですか、先生エ!？」



「いい西条くん。人の恋バナってのはね、聞いててとっても楽しいモノなのよ。だから…」

「ヒイツ!?!」

ガシツと、その場から逃げようとする西条を光の速さで捕まえた楠先生。

その表情は、邪帝でも恐れおののくのではないかと思える位に、歪んだ笑みを浮かべていた。

「もつと詳しく話しなさい。減るものじゃないでしょう?大丈夫、先生は口は堅いから…ウフフフフ」

「怖えええええ!! は、放してくれええ!!」

楠先生の知られざる一面に恐怖する西条。  
彼の運命や如何に…!?!?

「ほおお、マナちゃんの世界ってのは、そんなに大変な事になっ  
んのかあ…」

「うん。それでこないだ、さいじょおに助けて貰ったんだよ」

「……」

西条が楠先生から取り調べを受けている最中、彼の部屋で、結締と白石の二人はマジシャン・ガールから事の経緯を聞いていた。

精霊界、邪神、そして幻神獣。

普通ならば、夢物語みたいな話である。

マナことマジシャン・ガールの話を聞いていた白石は、なにを言っているんだコイツ？みたいな表情をしていたのだが、結締は違った。

彼女の話しを真剣に受け止め、同情するかのような相槌を打つ。  
マナも結締がしっかりと自分の話しを聞いてくれる為、つい色々話し込んでしまう。

その繰り返しで、白石は自分だけが置いてけぼりをくらっているような気がしていた。

「ほら、この怪我だってそうなんだよ！さいじょおが来てくれなきゃ、もっと大変な事になってたんだから！」

「マナちゃんみたいな可愛い子ちゃんに、そんな仕打ちをするなんて…許せねえぜよ…！」

「…おい、結締」

コツチコツチ、と手招きする白石は、寄ってきた結締を捕まえて、マナに聞こえない位の小さな声で話します。

(貴様…まさか本当にこの女の言うことを信じるつもりか?)

(あつたりまえだぜい。白石さん、常に俺は…可愛い女の子の味方だぜよ!!)

(ヲイ…お前なあ…)

結締の軽さに若干呆れつつ、白石は軽く溜め息をつく。そして思い出す。

結締は昔からこうなのだと。

「白石さんこそ、聞いてて何も思わなかったかにゃ?西条ちゃんが出てった事と、マナちゃんが昨日の夜に襲われた時間や経緯…自分が先生から、西条ちゃん搜索の連絡が来たタイミング…」

「むう…」

「それらのピースを当てはめてきや、辻褄はピタリと合っぜよ」

「確かに…そうだが…」

結締の言うことにも一理ある。

しかし、白石にはやはり信じられない内容だった。

精霊界、三邪神、ブラック・マジシャン・ガール。

いきなりの事に理解が追いつかない白石は、言葉に詰まり、難しい表情をつくる。

(ゴニョゴニョ…こついう事は、あまり難しく考えちゃ駄目だぜい)

(むう…しかしだな…)

(だって、マナちゃん超可愛いじゃん？だから俺、信じちゃう)

「……結局、お前はソコか」

結締の楽観的な意見を聞いて、白石はやはり、呆れたように溜め息をついた。

そんな二人の様子を見ていたマナは、思い出すように口を開く。

「アハハ…白石くんも、さいじょおと同じような顔するね」

するとマナは、彼の物まねをする様に、むむむう〜と頬を膨らませ

「お前が本当にブラック・マジシャン・ガールなら、何か証拠を見せてみるよ！って」

「ぷっははは！！ 何だよマナちゃん、西条ちゃんに滅茶苦茶ソックリだぜい！！」

「…しかし、本当にお前はブラック・マジシャン・ガールなのか？ すまないが…やはり信じられん。どう見ても、普通に美少女にしか見えん」

難しい表情のままの白石に、無邪気にこの状況を楽しんでいる結締は、ある事を思い付いた。

「お堅いねい、白石さんは…。なら、マナちゃんに一肌脱いでもらうしかないにゃ〜？」

「え、脱ぐ？それって、エッチな事？なら、絶対イヤ。死んでもイヤ」

「ああ脱ぐって言っても、そういう意味じゃなくってエ…」

勘違いから身構えるマナに、結締はニカッと笑い、白い歯をキラリと光らせながら。

「要は、マナちゃんに再現して欲しいだけだぜい。西条ちゃんが、マナちゃんを信じるキツカケになった事を。そうすりゃ白石さんだ

って、嫌でも納得せざるを得ないぜよ」

「わたしが…さいじょおに…やった事…」

言われてマナは考える。

あの時、自分は彼に向けて攻撃魔法を放った。

おかげで彼には自分の事を信じてもらえたが、その代償として彼の部屋は…。

(うーん…誰も立ってない場所に撃つ位なら、問題ないよね?)

決意したマナはスツと立ち上がり、どこからともなく愛用の杖を取り出した。

最早この段階でツッコミ所なのだが、白石達はあえてスルーした。

「じゃあ、やってみせるよ！よく見ててね！」

そう言い、マナが杖を向けた先は玄関。

今の玄関には、誰も立っていない。

これなら、誰かが自分の攻撃に巻き込まれる心配はない。

『…っ！！ 黒・魔・導…』

ズズズズ…ッ！！

マナの構えた杖の先端に、黒い球状のエネルギーが凝縮されていく。  
自分達にとって不可解な現象を目の当たりにした二人は、マナのその姿に魅入っていた。

「…マジか…!？」

「マナちゃん…ッ!！」

ズズズズ…ッ!！」

攻撃魔法の準備が整った。

目の前に誰も居ない。

撃つなら、今だ!

『…爆・裂ー…』

「ガチャツつと、ただいま。まったく先生のヤツ、最後の方は全く関係『破アア!』」つてによぎゃあああああ!?!?!?」

あぼーん。

マナの放った黒魔導爆裂破は、奇跡的なタイミングで帰宅してきた西条に、見事に直撃した。

ボタンと倒れ込み、身体の至る所から煙をあげる西条を見て、マナ達は事態を認識するのに一瞬の時間が掛かった。

「あ…さ、さいじょお!? しっかりしてよ! だだだ大丈夫!？」

「かぺ…かぺぺぺぺ…なんで…俺ばっか…」

「…むうう…これが魔法か…」

「流石に俺も驚いたぜよ…まあ白石さん。これで納得せざるを得ないにゃ〜?」

確かにマナは、自分たちに出来ない真似をしてみせた。

西条自身が吹き飛んでしまった為に、あの魔法とやらは本物なのだろう。

ならば、やはりこの美少女は本当に…?

「…ふうん。面白い…!」

白石は立ち上がり、虫の息な西条の所へと歩み寄る。

白目を向いている西条を、必死になって揺らしているマナ。

見かけは普通的女子。

しかし、その話しや力は、やはり本物だった。



信じてみよう。この存在を。

自分が彼みたく黒こげにならない為にも、白石は結締とは違う意味で、彼女を信じる事にした。

時刻は正午。

全身が焼けるように痛い。

しかし、それを我慢しなくてはならない。

西条は今、部屋の台所に立ちながら、ぎこちない動作で鍋を振っていた。

「さいじょお。ごはんはまだなの？」

「……」

なぜ、こんな身体の状態で料理をしなければならぬのか？

それは彼の後ろで、今か今かと待ちわびる彼女の言葉から分かるだろう。

「帰ったら、ごはん作るって約束だったんだもん！ねえ、さいじょ

「おー、ごはんまだー？」

「…っ、だぁぁぁあ！！ 気が散るっちゆうの！！ ちゃんとご飯は作るから、杖を構えながら待つのは辞めてくれませんか!？」

「本当ならば寝ていたかった。

だって、身体中が痛いんだもん。」

朝は中島店長の店で一発、そして部屋に帰ってからもう一発。

もう自分のライフは軽く0を切っていた。

「ちゃんと作ってるだろ？だから、隣の部屋で待ってるって」

「待ってるだけじゃ、つまないもん」

「…だったら、杖なんか構えてないで、何か手伝ってくれよ」

「やだ。わたし料理できないもん。えっへん」

「…何で自慢気なワケ？」

「キーンコーンカーンコーン…」。

第七デユエル高等学校のチャイムが鳴り響く。

まだ空の色は明るく、時刻も正午を過ぎた頃である。

日曜日はこの時間の学校は、生徒の数など数える程度しかない。部活動に参加する生徒か、その他の用がある生徒だけだ。

二階にあるとある教室では、その他の用がある生徒二名がいた。

その二名というのは、白石直也に結締智恭である。

部活動に所属しない二人は、部活をする為に学校に来ている訳ではない。

補習の為に来ていたのだ。

自分達の席で、青ざめた表情から息をつく二人を見て、教壇に立つ楠先生は静かにプリントの束を整えた。

「…今日の所は、ここまでね。それじゃ各自、帰って良いわよ」

端正な顔立ちからなるクールな雰囲気で楠先生が言うと、二人はやっと解放されたかのように、同時に息をついた。

「ぶはーっ。やっと終わったぜよ…とんだとばっちりだぜい」

「ふうん…そう言うな結締よ。お陰で、マナという美少女に出会えたではないか」

「ああ、それだきゃ白石さんに感謝」

それまでどんよりした表情だった結締は、パツと明るく照り輝いた。

なんと分かり易い性格なのだろう…と、白石は思ったが口にはしない。

結締は補習が終わるや否や、手荷物をササツと纏めて、一気に教室の出口へと掛けだしていく。

「ほら、白石さんも早くするぜよ。また一緒にマナちゃんトコ行こうぜい！」

よほどマナことブラック・マジシャン・ガールに惚れたのだろう。結締からは、異様な程にピンクのハートが浮かび上がっていた。

「ふん。悪いが結締よ…お前は先に行ってる。俺はまだ、楠先生に用があるのでな」

「へ？」

白石の視線の先には、教壇で「？」と首を傾げる楠先生が。

いったい白石は、先生に何の用事があるというのだろうか？

不思議に思った結締だったが、彼にとって今は白石の用事など、どうでも良かった。

「ふーん。じゃ、先に行ってるぜい」

「ああ。またな」

教室を沈黙という静寂が包む。

教室には、白石と楠先生の二人だけとなった。

「で、白石くん。私に用って…何なの？」

手短に済ませなさい、と。

楠先生はプリントの束をトントンしながら、真剣な表情の白石を真っ直ぐに見つめる。

凜とした鋭い視線に射ぬかれながらも、白石も威圧的な姿勢を崩さない。

白石は鞆から、自分のデッキが収められた決闘盤を取り出し、ゆっくりと立ち上がる。

「…先生。俺とデュエルしろ」

「…デュエル？」

いきなりデュエルを申し込まれた楠先生は、ふう…と、軽い溜め息をついた。

「俺は今日こそ、先生に勝つ…！！ 負けたままというのは、どうにも気分が晴れなくてな…！！」

「ふう… 良いけど、アナタ… 私に挑むのはこれで何回目かしら？」

「30回目だ！！ 入学式以来… 俺がここまで連敗を喫したのは、先生が初めてだ。それでこそ、倒し甲斐があるというものだ！！」

「…物好きね」

「それに付き合う先生もだろう？」

楠先生はそう言うと、教壇の中から自分の決闘盤を取り出した。

「このあと職員会議があるから、一回だけよ」

「構わん。一瞬で決着<sup>ケリ</sup>をつけてやる…！！」

互いに鋭い視線を交錯させる二人。

白石 VS 楠先生。

二人のデュエルが、今始まるうとしていた。

## 日常（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の話は如何でしたか？と言っても、今回の内容は次の展開へ繋ぐ為のパートです。

次回は白石と楠先生のデュエルです。

『頂を目指す者』では、最強の龍使いと称された白石は、いったいどのようなデュエルを魅せるのか？

そして、そんな彼の担任である楠先生の實力は？

頭の中ではある程度の物語の構成はできているんですが、最近仕事が多忙しくて、なかなか執筆が進んでいない状況です。

それでも、皆様が読んで面白いと思えるような作品を心掛けていきますので、応援よろしくお願いします。

## 楠ミナノ願い

デュエルモンスターが暮らす世界、精霊界。

邪神によって支配された神聖なる塔に、一人の王と呼ばれるモンスターが帰還した。

それは、人間界にて西条とのデュエルで敗れた、邪帝ガイウスである。

彼にとって、今回の敗北は予想外だった。

人間界に向かったマジシャン・ガールの動向や目的を探る為に向かったが良いが、予期せぬ相手が現れた。

いや、邪魔が入る事は、ある程度は想定していた。しかし、自分は負けた。

デュエルで負けた事により、身体が思うように動かない。

ぎこちない動作で塔を登る邪帝は、息を切らしながら、遂にある部屋の前へとたどり着いた。

その部屋の扉はとても豪華な、そして威厳のある造りをしており、この先に入る事を躊躇わせるような雰囲気醸し出していた。

その扉の前に立った邪帝は、改めて息を飲み込んだ。

それと同時に、自分自身に言い聞かせる。

(…くっ、落ち着け…気を強く持つのだ…!!)



それは恐怖心。

この扉の向こうにいる存在を恐れる気持ち。

恐怖と痛みからくる震えを懸命に抑えながら、邪帝は扉にゆっくりと手を伸ばす。

しかし、彼の手が扉に触れる事はなかった。

扉を押し開けようとした瞬間、目の前の扉がひとりでに大きな音をたてて開いていったのだ。

「…入って来いと、いう事が」

ガコオ…ツ、と完全に扉が開ききつたのを確認した邪帝は、片足を引きずりながら、ゆっくりと部屋の中へと入っていく。

黒い、黒い、辺り一面が真っ黒な霧に覆われた部屋の内部。

灯りもなく、黒い霧によって視界は殆ど皆無な為、今自分がどこを歩いているのか把握できない。

しかし、それでも邪帝は歩を進める。

この部屋の、この先にいる存在に会う為に。

どれほど進んだのかわからない。

しばらくすると、邪帝の背後から扉が閉まる音だけが聞こえてきた。

そして、扉が閉まった次の瞬間、邪帝の耳に別の誰かの声が入ってきた。

『…邪帝ガイウス…』

「っ！！」

ガバツと。

聞くもの全てを震え上がらせるような声が、耳から入り、全身に行き渡る。

名を呼ばれた邪帝は、すぐさま片膝を地に着かせ、頭を深々と下げた。

『確か貴様は…人間界に向かった者を追っていたのだったな？どうなった？何か分かった事は…？』

「…ハツ…」

聞こえてくる声や言葉に反応するように、邪帝の身体中から嫌な汗が豪雨のように流れ落ちる。

人間界に向かったは良いが、自分は向こうの世界で敗北し、そしてここに帰ってきた。

ただその事を報告すれば良いだけなのだ。

しかし、邪帝の口は思ったように動かない。

理由は分かっている。

この声の存在に恐怖しているのだ。

『…どうした？私の問いに答えられないのか？』

ゾミツ！…つと、これまで以上の重圧が邪帝を襲う。  
声の質が変化した。  
自分が直ぐに答えられなかったからだ。

「もっ…申し訳…御座いません…！！」

ようやく口から出た言葉は震えていた。

途切れ途切れな言葉や、しどろもどろになる声。

恐怖し、焦る邪帝は頭の中が真っ白になっていく事だけは、ハッキリと分かった。

「…人間界に…向かった者は、ブ…ブラック…マジシャン・ガール。しかし…かの者は…に、人間界で…西条という協力者を得ておりまして…その…」

情けない…と、邪帝は自分に対して思った。

今の自分は、仕事に失敗した事を鬼上司に報告しなければならぬ、ビクついた中間管理職のオヤジみたいな存在に思える。

「…情報を聞き出す為に…デュエルをしたのですが…」

『…負けた…のだな』

ゾクリ…ッ！！…つと、全身が震え上がるのが分かった。

黒い霧に覆われた空間の全体に響き渡るような、威厳ある声に、邪帝は更に深く頭を下げる。

「もっ、申し訳御座いません…ッ!」

『何も聞き出せなかった？貴様、それでも本当に王と呼ばれるモンスターか？王…ねえ。聞いて呆れるわ』

「……」

頭を下げる事しかできない邪帝。

確かに、自分でも情けない事だというのは理解している。

与えられた任を果たしてこそ、そして力を誇示してこそその王なのだ。

自分たちで言うならば、与えられた仕事をこなし、更に自ら進んで次の仕事に取り組むのが、社会人の仕事の基本である。

それが自分は出来なかった。

だからといって、このままで良い訳がない。

汚名を返上する為にも、ここで立ち上がらなければ、王の名折れだ。

「邪…っ、邪神様…ッ!」

声を絞り出す邪帝は、聞こえてくる声の主、邪神に向かって

「私に、もう一度チャンスを…！！　かの小娘が、人間界にて邪神様に仇なす策を練っているとすれば、早急に手を打たねばなりません…！！　もう一度私が出向き…！！」

『もう良い』

必死の思いで練りだした言葉は、邪神からの吐き捨てるかのような言葉で砕け散った。

『どうやら今回の件、貴様には荷が重かったようだ。私とした事が、部下の技量を見誤るとは…』

「あ…いや…」

『その件に関しては、別の者を向かわせよう。貴様には、別件を追って伝える。もう良いぞ？下がれ』

「…邪神様…しかし…っ！！」

『二度も言わせるな。もうこの件で、貴様に用はない』

侮蔑するような、邪神の放った冷たい言葉。

邪帝は悟る。

もう自分は、邪神にとって必要のない存在なのだ。

邪帝は、視界だけでなく、本当の意味で目の前が真っ黒になっていった。

ここ三上市は、デュエルが盛んな街として知られている。それは、街の中心に位置する場所に建つ、トリティニーグループが大きく関係している。

トリティニーグループとは、この世界に遊戯王カードを製造・販売している大企業だ。

この会社は数年前から近隣の高校の授業に、デュエルを取り込むといった事業を展開した。

これは、学生時代からデュエルに触れる事で、カードに対する興味や、トリティニーグループがに関する関心を向けさせようというのが狙いなのだ。

よって、三上市は文字通り、決闘者<sup>デュエリスト</sup>の街として繁栄している。

そんな三上市の日曜日の昼下がり。

駅前通りにある繁華街を、一人の高校生が陽気な足取りで散策していた。

彼の名は結締智恭。

この街にある第七デュエル高等学校の生徒だ。

今朝方、精霊界から来たブラック・マジシャン・ガールことマナに会いたいのが為、彼女の下に向かう前の土産を物色しようとして

いる最中なのだ。

季節は夏。

炎天下の中、結締は露天に並ぶ食べ物の数々を、視線をさまよわせる事でその情報入手していく。

(アソコはかき氷1個300円：なにになに：おっ、アツチにやあサ  
ーティワン！？ カップの方が良いか：モナカにすつか：！？)

注目のサーティワン・アイスクリームには、冷たいデザートが食べたいで客の、長蛇の列ができていた。

この暑い日だ。

きっと彼女も、冷たいデザートが食べたいに違いない。

マナが棒アイスやソフトクリームをペロツと舐める姿を想像し、アドレナリン全開となった結締は

「ウツヒヨ〜 考えただけでビンビング だぜい！！ まってるマ  
ナちゃん！！ 俺がいまー…って、なっ、何しやが…あ、ハイ…  
スイマセン。ちゃんと最後尾に列びます。列びますから、ほんと…  
はい…」

列の途中に入り込もうとしたが、それは列んでいたお姉さま方の  
厳しい視線に妨げられてしまった。

ちゃんと、ルールやマナーを守りましょう。

女性達の射殺すような視線を一身に受けた結締は、色んな意味で汗をダラダラと流し続けていた。

結締がトホホ…と列に並びだした頃。

彼が通う学校の教室では、友人である白石直也がデュエルを始める所であった。

溢れんばかりの闘志を燃やす白石。

彼の闘志の矛先は、対峙する担任教師、楠ミナに向けられていた。

白石は吼える。

「さあ先生…始めようか。俺たちのデュエルを…!!」

「……………」

白石に言われ、楠ミナは手札を五枚ドロ―する。

端正からなるスリムな顔立ち。白石とは違う、切り裂く様な鋭い眼に変わる楠ミナは、デュエルを始める前に白石に尋ねた。

「デュエルの前に……………」



「…ム」

「白石くん。あなたは私とのデュエルで…何を見いだすつもり？」

「ふうん…決まっている。この学校で、俺が最強のデュエリストである証しを立てる為だ!!」

グツと拳を握り、白石は豪語する。

「俺は今まで、全てのデュエルを勝ち越してきた。だが…この学校に来て、俺は一つの壁にぶつかった。それが…先生だ」

中学時代。

白石はデュエルで負けなしだった。

別に白石は、お山の大将になるつもりはない。

ただ純粹に、デュエルに勝ちたいだけであった。

圧倒的パワーから繰り出す、一撃粉碎。

これが彼の今までのデュエル（人生）だった。

しかし、それは高校に入ってから終わった。

入学し、早速クラスでデュエル大会が開かれた。

もちろん白石も参加し、今までと同じく圧倒的パワーで勝ち星を増やしていった。

クラス大会が終わった後、彼のデュエルを見ていた担任の教師、楠ミナから呼び出しを受けたのだ。

クラス大会で優勝した事で、賞賛の言葉が貰えるものだと思います。んでいた白石は、堂々と先生の元へと向かうと…。

『…白石くん。アナタのデュエル…今のままで良いと思ってる？』

その時、先生が告げた第一声は賞賛でなく、咎でなく、非難でなく。

その時の先生の言葉の意味が理解できなかった白石は、激昂した。

俺のデュエルにケチをつける気か！？ 俺は今まで、こうして自分の手で勝利を勝ち取ってきたのだ！！ 文句を言うのであれば、この俺にデュエルで勝ってからにしろッ！！ 先生とて、容赦はせんぞッ！！

それが、事の始まりだった。

自分からデュエルを仕掛けていったは良いが、白石はものの見事に返り討ちに遭ってしまったのだ。

その結果が、白石には信じられなかった。

今まで培ってきた連勝記録が、瓦礫のように崩れ落ちてしまった。

それから何度も、何度も、何度も、何度も…。

楠ミナにデュエルを挑んでは、白石は完敗した。

自分の培ってきた連勝記録を止めた楠ミナに、何としても勝ちたい。

今の白石を突き動かすこの想いは、ここから来ているのだ。

「…変わらないのね」

楠ミナは構える。

それと同時に、白石も腕に装着した決闘盤を構え、手札を五枚用意する。

「変わらないさ…変わるものか。これが俺なのだ。今までも、そしてこれからも…ッ…！」

互いに臨戦態勢に突入した。

そして、互いの視線が交錯した瞬間、二人のデュエルが始まった。

「いくぞ……！」

「……」

『デュエルッ…！』

【先攻】白石直也

LP / 8000

【後攻】楠ミナ

LP / 8000

遂に二人のデュエルが始まった。

先攻を奪取した白石は、早速プレイを開始する。

「俺のターンッ、ドロォッ!!」

カードをドロォした白石は手札に視線を移し、口元に笑みを浮かべる。

「ふうん…良い手札だ。最初から全力で行くぞ…!! 手札より『古のルール』を発動ッ!!」

【古のルール】

「魔法カード」

自分の手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する。

「この魔法効果によって、俺の手札に眠るレベル5以上の通常モンスターを、特殊召喚する!!!」

「……」

白石は手札の一枚のカードを掴み取る。

そのカードを高く振り上げ、白石は全身全霊の雄叫びをあげた。

「魅せてやろう…このモンスターこそ、孤高にして絶対なる存在…!!! 現れよッ『青眼の白龍』ッ!!!」

### 【青眼の白龍】

星8 / 光属性 / ドラゴン族

ATK / 3000 DEF / 2500

高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。どんな相手でも粉碎する、その破壊力は計り知れない。

カッッ…!!!

ズドドドドド…ッ!!!

白石のフィールドに降臨せし伝説の龍、青眼の白龍。

見る者を魅了する青き瞳。

強く、逞しく、しなやかな体格からなる強靱なフォーム。

白石直也の信ずる、絶対にして最強のモンスターが、いきなり登場した。

「……………」

「ふうん。この俺のブルーアイズを前に、顔色一つ変えないとは…  
さすが先生」

「アナタとのデュエルで、何度も見てきたからね……」

また、私が葬ってあげるわ。と…。

鋭い視線で語る楠ミナに、白石は絶対の自信を持って豪語する。

「今日の俺を、いつもの俺だと思っなよ？俺は今日こそ、先生を倒す！！ このブルーアイズと共にだッ！！」

グオオオオオオオ…！！

白石の想いに呼応するかのように、雄々しき雄叫びをあげるブルーアイズ。

「先攻は最初のターン、攻撃をする事はできない……」

白石はそう呟くと、手札にある一枚のカードに注目する。  
そのカードとは…。

（俺の手札には『無力の証明』がある。この効果は、相手のレベル5以下のモンスターを全滅させる事ができる強力なカード…）

【無力の証明】

「畏カード」

自分フィールド上にレベル7以上のモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。相手フィールド上に表側表示で存在するレベル5以下のモンスターを全て破壊する。このカードを発動するターン、自分フィールド上に存在するモンスターは攻撃する事ができない。

（フフ…先生がどんなモンスターを召喚しようが、この俺には通用しない…！！）

白石は不敵な笑みを浮かべると、無力の証明のカードを掴み…。

「リバーズカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！！ さあ、先生。掛かって来るが良い！！ 俺のブルーアイズが、振り返ちにしてくれるわ！！」

白石は豪語しながら、ターンを終了した。

彼から溢れ出る闘志を直に感じながら、楠ミナは動き出す。

「…私のターン、ドロー」

デッキからカードをドローする楠ミナは、改めて白石のフィールドを確認する。

【白石直也】

LP/8000

「手札」

3枚

「モンスター」

青眼の白龍

「魔法・罫」

リバースカード 1枚

白石のフィールドには、通常モンスターの中でも最高の攻撃力を誇るブルーアイズがいる。

更に、一枚の伏せカード。

変わらない…と、楠ミナは感じる。

何度も彼からデュエルを挑戦され、何度も返り討ちにしてきた。

いつもとは違つと言いながら、何が違つのか？と、疑問に感じる位だ。

「……」

「どうした？何も打つ手がないのか？」



挑発じみた言葉を発する白石。  
彼が何を狙っているのかは知らない。  
しかし、楠ミナは何もせず、ただ黙ってやられるつもりは無かつた。

『白石くん。アナタのデュエル…今のままで良いと思ってる？』

あの時、自分が彼に告げた言葉が蘇る。

彼は強い。

それは理解している。

実際に、クラスのデュエルでの成績はトップであるし、彼がその事を誇りに思っている事も知っている。

しかし、このままでは駄目なのだ。

楠ミナは思う。

デュエルに強さを求める事は良い。

それに挑戦し続ける事も良い。

しかし、それはあくまで、彼個人の気持ちだ。

対戦する相手の気持ちを汲んだデュエルを、彼は理解していない。  
実際、白石はクラス大会の時、過度なまでに自分のプレイを貫いていた。

もう相手は敗北すると分かっているながらも、とことんモンスターを展開し、攻撃し、攻撃し、攻撃し…。

下手をすれば、その行為は嫌がらせに感じる者も出てくるだろう。

つまり彼のデュエルには、相手の気持ちを理解するような精神が、感じられないのだ。

楠ミナは願う。

彼に、相手の気持ちを思う人間に育って欲しいと。

だから、楠ミナは容赦しない。

自分の生徒だから、自分もデュエリストだから…。  
その事に気付かせる為にも

「デュエルで教えてあげるわ。手札より速攻魔法『サイクロン』を発動」

【サイクロン】

「速攻魔法」

フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

楠ミナの発動したカードは、サイクロン。

この効果により、白石の場に伏せてあった一枚のリバーズカードに、鋭い雷の矢が直撃した。

「この効果で、白石くんのリバーズカードを破壊」

「ぬうッ！？俺のカードが…！！」

自身の伏せカード、無力の証明を破壊された白石だが、彼からは溢れんばかりの闘志が燃えたぎったままだ。

ブルーアイズがいる限り、絶対に諦めない。

楠ミナには、そう感じられた。

その心意気は評価できる。

しかし、楠ミナは、容赦しない。

「更に手札より、『魔法カード』『パワー・ボンド』を発動」

【パワー・ボンド】

「魔法カード」

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、機械族の融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。このカードによって特殊召喚したモンスターは、元々の攻撃力分だけ攻撃力がアップする。発動ターンのエンドフェイズ時、このカードを発動したプレイヤーは特殊召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

「このカードは、機械族専用の融合魔法カード。私は手札の『サイバー・ドラゴン』2体を、融合……!!」

「ッ!?!」

カッッ……!!

楠ミナの手札から、サイバー・ドラゴン二体が合体した。辺り一面を眩い閃光が包み、その空間の中心に、融合されたモンスターが浮かびあがる。

楠ミナが融合召喚するモンスター…それは。

「融合召喚。蹂躪せよ『サイバー・ツイン・ドラゴン』！」

【サイバー・ツイン・ドラゴン】

星8 / 光属性 / 機械族

ATK / 2800 DEF / 2100

「融合 / 効果」

「サイバー・ドラゴン」 + 「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は、上記のカードで行えない。このカードは一度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

ズドドドドド…！！

バチバチツ…！！

楠ミナのフィールドに現れたのは、双頭の機械竜。

白銀に輝くメタリックなボディからは、溢れ出るエネルギーが雷となって放出されている。

このサイバー・ツイン・ドラゴンの登場に、白石は目を見開き、一瞬、呼吸が停止した。

「パワー・ボンドで融合した機械族モンスターの攻撃力は、そのモンスターの元々の攻撃力分アップする…」

サイバー・ツイン・ドラゴンの元々の攻撃力は2800。  
このままでは、白石のブルーアイズ攻撃力3000には届かない。  
しかし、楠ミナは魔法効果によって、白石のパワーを難なく凌駕  
してみた。

【サイバー・ツイン・ドラゴン】

ATK/2800      5600

(パワー・ボンド効果)

「攻撃力…5600だと…っ!？」

「バトル。サイバー・ツイン・ドラゴンで、ブルーアイズに攻撃…  
!！」

血走った眼の白石に対し、冷徹な表情でバトルフェイズに突入した楠ミナ。

そして、その攻撃宣言。

臨界点に達した機械竜の口から、全てを破壊する光線レーザーが放出された。

「消えなさい、ブルーアイズ。…エヴォリユーション・ツイン・バースト！」

ズドバゴォォォォ！！！！！！

「なにっ！？ 又オオオオ！！！」

【白石直也】

LP / 8000                      5400

【楠ミナ】

LP / 8000

凄まじいエネルギーの光線を受けたブルーアイズは、一瞬の瞬きの間に消滅してしまった。

攻撃力3000を誇る、自身のエースモンスターが瞬殺された事に、白石は衝撃を受けた。

「俺のブルーアイズが…」

放心する白石。

しかし、その間にも楠ミナはデュエルを続ける。

冷徹な表情で、淡白な言葉で。

敢えてその様な態度で、楠ミナはデュエルを続ける。

「サイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃によって、白石くんのフィールドにモンスターはいない。これで終わりね…」

「……」

「サイバー・ツイン・ドラゴンは、一度のバトルフェイズに、2回攻撃する事ができる。逝きなさい……!!」

ゴゴゴゴゴ……!!

バチッ、バチバチ……!!

楠ミナの操る双頭の機械竜の口に、再び膨大なエネルギーが凝縮されていく。

サイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃力は5600。

対する白石のライフは、残り5400。

そして遂に、サイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃が、白石本人に向けて直射された。

「エヴォリユーション・ツイン…バーストっ!!」  
カッッ……!!

「又オオオアアッ……!!?」

【白石直也】

LP / 5400                    0

【楠三才】

LP/8000

白石直也 VS 楠三才。

今回、白石にとって三一回目となるリベンジは、結果、白石の完敗という形で幕を下ろした。

デュエルが終了した教室の中は静かだった。聞こえてくるのは、デュエルに敗北した白石の、悔しさから歯を軋らせる音か…。

「…っ」

白石は言葉が出て来なかった。

完膚なきまでに圧倒され、まるで手も足も出なかった。

わなわなと身体を震わせながら、白石は先のデュエルの内容を振り返っていく。

「また俺は…負けたと…っ、いつのか…っ…！」



ダンッ!! と…。  
行き場を失った葛藤から、白石は自分の席に拳を叩き付けた。その様子を、楠ミナは黙って横目で見つめる。口には出さずとも、楠ミナは白石に、こっ訴えかける。

これが、今までアナタがしてきたデュエルなのよ、と。  
一方的なデュエル。  
勝つ事だけを考えれば、合理的な戦術だ。  
しかし、これでは楽しいと言えるだろうか？

互いに、楽しいデュエルだったと、言い合えるだろうか？

今回のデュエルで、彼にはその事に気付いて欲しかった。  
自分の気持ちだけを貫き通すだけでは、駄目だという事を…。

楠ミナは教室から去っていく。  
一人、教室に残される白石。

机に叩き付けた拳を握り締め、白石は窓の外に顔を向けた。

「…相変わらずだ。先生は容赦ないな」

彼の目は、どこか遠い空を見つめるような…。

「だが…それでこそ、倒し甲斐がある…!!」

1ターンキルをされたにも関わらず、白石の気持ちは前を向いていた。

しかし、だからこそ気付かない。

今回のデュエルで、楠ミナが自分に何を伝えたかったのかを、白石は気付かない。

「次こそは…俺が、勝つ…!!」

両手いっぱい菓子箱の箱。

結締智恭は、炎天下の駅前通りを覚束ない足取りで歩いていた。

縦×横一メートルはある箱を抱える彼の姿勢は、すれ違う人たちが思わず避けていく位に、見ていて危なっかしく感じる。

この箱。

中には何が入っているのか…。

「お、俺とした事が…買いすぎちまったぜい」

フラフラっとしながら、何とか道なりに沿って進む結締は、友人である西条の部屋へと向かっている最中であった。

彼の部屋にやって来た、精霊界からの使者。

ブラック・マジシャン・ガールことマナに、デザートであるアイスクリームをプレゼントする為である。

箱の中身が余程重たいのか、小柄な体格の結締が持つて運ぶには、体力が保たない様に感じられる。

しかし、彼は違った。

(マナちゃんのオ…アイス貰って喜ぶ顔オ…!! マナちゃんのオ…  
…アイスをチュパチュパと舌出して舐めてくれる顔オオ!!)

彼女の事を考えれば考える程、結締は潜在能力を開放していく。

今の結締は、お相撲さんを片手で持ち上げられる位の怪力振りを発揮していた。

「待つてるマナちゃん!! この俺がッ、今ッ、冷たいアイスをお届けするぜい…!!」

ムッハー!!と鼻息を荒げながら、結締は進むペースをどんどん早めていく。

その姿はさながら、マリオがノコノコを抱えてBダッシュしているかのような。

しかし、やはりアクシデントというものはつき物である。

「このまま、西条ちゃんトコまで…最速記録だ『ドゴオ!!』ぜに  
よわああああ!?!」

箱を抱えながらな為、前方不注意だった結締は、目の前で蠢く何  
かを弾き飛ばしてしまったのだ。

ぶつかった衝撃で、抱えていたアイスの箱は大きく弧を描き、見  
事にアスファルトの地面に落下した。

「あゝあゝあゝあゝ!!! マナちゃんの為に買ったアイス  
があゝあゝあゝあゝ!!!! テメエ!!! どこ見て歩いてや  
が…おん!?!」

結締がぶつかった相手に怒鳴ろうとした時、思わず言葉に詰まっ  
てしまった。

そこにうずくまっていたのは、緑色の肌をした奇妙なデブであっ  
た。

奇妙な緑デブは、地面に転げ落ちたチンケな王冠を拾い上げ、ス  
ポツと頭に被せると。

「何をやるであるは、コツチの台詞でおじゃる!! ボクちんの高  
級な服に、泥が付いたのでおじゃる!!」

「……………」

ピンク色のタラコ唇から唾をぺっぺと吐きながら、緑のデブは結

締に向かって言い放つ。

「貴様ア、この成金ゴブリン様の話しを聞いてごじやるか!? ポクちんをこんな目に遭わせた罪…ッ!!! 精霊界なら、即刻死刑でおじやるよ!!!」

プンスカと怒る自称、成金ゴブリンは、まくし立てるように結締に怒鳴りつける。

しかし、結締はというと…。

「おじやる…おじやるって…ププ…ッ!!! 何だコイツ…見た目もだけど、頭おかしいんじゃないか?」

「し、し、失礼なっ!? ちんちくりんな奴に、こつも言われるなんて…!!! 黙ってられないでおじやる!!!」

「テメエだつて、ちんちくりんのチビデブじゃねえか!!! って…ん? ちよつと待て…お前、今…精霊界つて言つたか?」

精霊界。

成金ゴブリンがそう言っていたのを思い出し、結締は若干ではあるが冷静になる。

マナから聞いた話しでは先日、西条は精霊界の者と戦つたと言つていた。

もしかしたら、精霊界からの追っ手が来るかもしれないという事も言っていた。

そして今、自分の目の前でギョロリと睨んでくる緑のチビデブ、成金ゴブリンは、精霊界から来たと言っていた。

(まさか…コイツもマナちゃんを…?)

思考を冷静に切り替える事で、結締は様々な思案を張り巡らせながら、成金ゴブリンを見据える。

「精霊界から、何の用でコツチに来やがったんだ？ テメエもマナちゃんを狙ってんのか？ 邪神って神サンの差し金か？ それとも…」

「質問が多いでおじゃる。ま、チミの様な低脳な輩には、ボクちゃんの目的は理解できないのでおじゃる」

余程、結締が憎たらしく感じたのだろう。

イヤミばかりを言う成金ゴブリンは、フフンと鼻を鳴らしながら言葉を続けた。

「ボクちゃんは精霊界でも、大富豪として超有名人なのでおじゃる。欲しい物は全て、金で手に入れてきた、偉大なる大富豪なのじゃ！」

「……」

「そんなボクちゃんは、前々からお嫁さんが欲しくって欲しくって…。」

前にブラック・マジシャン・ガールちゃんを買おうとしたんだけど、  
ども、師匠であるブラック・マジシャンに阻まれてしまったのでお  
じゃる」

(…当たり前だぜい)

成金ゴブリンの経緯を聞き、結締はつい溜め息を吐いてしまった。  
つまりはアレだ。

この成金ゴブリンは…。

「でもでも、そのブラック・マジシャン・ガールちゃんが、人間界  
にやって来たって情報を金で入手したのでおじゃる。ボクちゃんは今  
度こそ、ブラック・マジシャン・ガールちゃんを買って、お嫁さん  
にするんじゃないもん」

(…何か…頭痛くなってきた…)

「という訳で人間。ブラック・マジシャン・ガールちゃんはどこに  
居るか知らないでおじゃるか？教えてくれたら、ボクちゃんにぶつか  
ってきた事は、特別に許してやるのでおじゃる」

さあ、どうする？と、見下したような態度を見せる成金ゴブリン  
は、ポケットから金貨をジャラジャラと見せつける。

そんな態度の成金ゴブリンに、結締は…。

「…たく…ろくでもねえ奴ってのァ、こついう奴の事を言うんだろ

うなア……」

「なに……!?!?」

「おい、チビデブ。テメエにゃ、マナちゃんは釣り合わねえ。とつとと帰んな」

「人間……その言い種からして……、ブラック・マジシャン・ガールちゃんの居場所を知っているでおじやるね?」

「……ッ!?!」

ニタア……と、醜悪な顔付きに変貌した成金ゴブリンは、どこからか取り出した決闘盤をセツトした。

「によほほほほ……!?! どうやら貴様は簡単に話してくれなさそうでおじやるからね……デュエルでおじやる……!?!」

「へっ……俺に勝って、マナちゃんの居場所を聞き出すってか? なら俺が勝ったら……マナちゃんにゃ金輪際関わるなって誓ってもらうぜい……!?!」

マナちゃんは、俺のだ!!

ブラック・マジシャン・ガールちゃんは、ボクちんだ

本人の知らぬ所で、結締と成金ゴブリン。



二人の、女を賭けた戦いが、始まるうとしていた。

楠ミナの願い（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の話はイカがでしたでしょうか・

デュエルに対する、相手を思いやる気持ち。デュエルにおいて、自分の意思を貫き通す気持ち。

それは人それぞれ、様々です。

今回の白石は、ある意味において、人としてのモラルを考えさせられる描写に仕上げました。

人からされて嫌な事。それは、自分が人になると嫌がられるのと同じです。

楠ミナはデュエルにおいて、そういった事を白石に伝えたかった訳です。

え？口で言う方が早いって…？

この小説は遊戯王の小説ですよ？

さて、次回はいよいよ結締のデュエルが始まります。

次話のデュエルは今回みたく、超あっけなく終わらせるつもりはありませんので、よろしくお願いします。

それでは、今回はこの辺りで…。

それにしても今回、主人公の西条やヒロインのマジシャン・ガールが空気だった。

ある意味で新鮮だなあ

## 結締の戦い 参上！E・HERO

日曜日の昼下がりに。

三上市の学生寮、その中にある西条の部屋では、二人の男女がいた。

一人はこの部屋の主で、三上市の第七デュエル高等学校に通う高校生、西条亨。

そしてもう一人は、幼い顔立ちながらも、可愛らしいという言葉が似合う少女、マナことブラック・マジシャン・ガールだ。

昼食を食べ終え、時間に余裕が出来た西条は、今後の事を話し合うついでに、彼女にある事をしていた。

「イタタタタつ！？ さいじょお、これ染みるう！」

「我慢しろ。こういった傷跡は、ちゃんと消毒しとかないと、化膿しちまうぞ？」

二人が何をやっているのかというと、精霊界のデュエルによって負傷した箇所の手当てだ。

マナの擦りむいた部分に、消毒液を吹きかけると同時に、彼女の元気な悲鳴が響き渡る。

「やあん！もつと優しくしてえ！」

「はいはい。よつと、後はここに…こっして…」

「ひゃう…んっ…」

「はい、終了。お疲れさん」

膝、腕、腹。

それぞれ負傷した場所の処置を済ませた西条は、消毒液や包帯、ガーゼといった道具を、救急箱の中に片付けていく。

手当てを受けたマナは、初めこそ痛がっていたものの、最後までちゃんと我慢していた。

「くうっ。手当てって分かってなかったら、思わず魔法を使っちゃう所だったんだよ」

「やたらめつたら魔法は使っちゃいけません。魔法を使って、いつも痛い思いをするのは俺なんですよ？」

「…さいじよおは、タイミング悪いだけだよ」

手当てを終え、床にぐだーつと寝転がるマナ。

大の字で寝転がる彼女の姿は、現在カードイラストに載っている様な派手な衣装ではない。

ピンク色のＴシャツに、白いカッターシャツ。

黒の学生ズボンといった、男子学生の格好をしていた。  
どうやら、思いのほか動きやすい格好だったらしく、何だかんだ  
で気に入っている様だ。

「ねえさいじょお、さいじょお。三幻神のカードの事なんだけど…」

「…ああ」

それまで、和やかだった雰囲気ピタリと止まる。

マジシャン・ガールは、精霊界に三幻神のカードを持ち帰る使命  
がある。

三幻神、つまり神のカードとは三上市の総称、大企業トリティニ  
ーグループの代名詞とも言える代物だ。

持ち帰る、と簡単に言うものの、それは容易な事ではない。

神のカードとは、それぞれ世界に一枚しか存在しない代物であり、  
現在それぞれのカードは、カードテキストを解読する為に厳重に保  
管されている。

普通に考えれば、自分のような只の高校生が、おいそれと対面で  
きるような物ではない。

「あの3枚のカードは、今この街の中心地にあるトリティニーグル  
ープという会社の中にある。それは、前に説明したよな？」

「うん。その会社の、しゃちょーさんって人が、三幻神を見つけて  
…今のさいじょお達が暮らす街があるんだよね？」

「まあ…大体あってるかな。それでだ、明日の夕方…俺とお前、そ

して中島店長の3人で、トリティニーグループに行く事になったから」

「へ？」

彼の話しを聞いて、マナはキョトンとした表情を見せる。

「てんちよーさんも？なんで？」

「何で…って、あの人は、カードショップの店長でもあり、トリティニーグループの社員でもあるからな」

中島は、カードショップ・アリスの店長という肩書きを持つ一方で、トリティニーグループの社員だ。

カードショップ・アリスとは、元々トリティニーグループが運営する店である為、当然その店を任されるのは、トリティニーグループ内の人間という事になる。

その事は三上市に住む人間ならば、誰もが知っている事なのだが、精霊界から来たマナはそんな事情など知る由もない。

「邪帝とのデュエルの後、つまり…お前が気を失っている間に、中島店長にお前の事を説明して、その時にお願いしてみたんだ」

「……………」

「…ん？どつした？」

西条の説明を聞き、マナは彼の顔をまじまじと見つめていた。自分が気を失っている間に、彼は本当に自分の為に、色々と動いてくれているんだと、マナは改めて彼に感謝していた。

今回の事もそうだ。

邪帝とのデュエルでもそうだ。

食事だってそうだ。

傷の手当てだってそうだ。

「…ホント…なんだか、コッチの世界に来てから、さいじょおにはお世話になりっぱなしだね…」

儂げな表情で、ふと顔を逸らすマナ。

精霊界に居た頃は、師匠であるブラック・マジシャンに迷惑ばかりかけてきた。

人間界に来てからは、西条に迷惑ばかりかけている。

どこに行っても、他人に迷惑ばかり。

そう思うマナの中には、自責の念が渦巻いていた。

「…ゴメンね。なんか、さいじょおにばっか、色々やってもらって

…」

「わたし。コッチに来てから、何にもできてないや…」

しゅん…と。

彼女が何を思って、そう呟いたのかは大体わかる。

彼女に出会い、まだ幾分と時間が経った訳でもないのだが、西条には彼女の気持ちが理解できた。

「…そう落ち込む事はないと思うぞ？」

「…え？」

「初めて来た場所で、最初から何でも上手くこなす奴なんて、いるもんか。俺だって、今だからこそお前の事を色々としてやれるケド、俺が最初にこの街に来た時は、ドジばかり踏んでたんだぜ」

「…え、さいじよおが…」

マナは最初、彼の言葉が信じられなかった。

自分に色々と親切にしてくれて、何でもソツなくこなしてくれる彼が、自分と同じだというのだ。

「信じられないって顔してるな」

「だって…」

マナが呟くと、西条は何か思いついたように立ち上がる。



そして、落ち込んだマナに向かって、ゆっくりと手を差しのべた。

「ちょうど良い機会だ。外に出て話そう。一緒に気分転換でもしようぜ?」

な?と。

自分に対し、優しい笑みを向ける彼に、やはり。

マジシャン・ガールは、自然と手を差し出していた。

三上市の繁華街。

その路地裏にある人通りの無い場所では、西条の友人である結締智恭の姿があった。

しかし、そこに居るのは彼だけではない。

精霊界から、わざわざマジシャン・ガールに求婚する為にやって来た、成金ゴブリンも一緒だ。

「おい、何でおじゃるか、この場所は?薄暗くて埃っぽいでおじゃる!」

「成金だか何だか知らねえが…オマエにや、この薄汚い路地裏がお

似合いだぜよ」

「ぶふんっ！？ デュエルの敗者は、この薄汚い場所でのた打ち回るって訳でおじゃるね？でも、そんな姿はボクちんよりも、チミのような庶民のがお似合いなのでおじゃる…！！」

によほほほ…と、気色悪い笑みを浮かべる成金ゴブリンの腕には、結締と同じ型の決闘盤が装着されていた。

これは、成金ゴブリンが資金にものを言って、わざわざ精霊界からアマゾンという通販を経て購入した代物である。

決闘盤を装着した短く太い腕を構え、成金ゴブリンは愉快に笑う。

「によほほほ！さあ、チミを倒して、ボクちんはブラック・マジシャン・ガールちゃんと結婚するでおじゃる！」

「クドい…ジングスカンの溜まった脂並みにクドいぜよ。マナちゃんとお近付きになるのア、この俺だ…！」

結締も、学校の鞆から取り出した決闘盤を装着し、臨戦態勢に入る。

すると、二人の足元に、薄暗い緑色をした、円形の魔法陣が展開された。

「なっ…何だこりゃ…！？ まさかコイツが…！？」

「によほほほほ！さあ、始めるでおじやる…！！ デュエルでチミを、ポッコボコにするでおじやる…！！」

意気揚々と手札を五枚揃える成金ゴブリン。

足元に浮かんだ魔法陣を見て、結締はマナが言っていた話しを思い出した。

（コイツが…精霊界独特のデュエルってヤツか…！！ 受けたライフダメージは、プレイヤーに衝撃となって伝わる…）

頭の片隅では、にわかには信じられなかった話し。

だが、実際に目の当たりにした結締は、事実を再確認する。

「…へへ。リアルが在って、面白そうじゃねえか…！！」

シュバツ！！ っと、手札を五枚揃える結締。

結締智恭 VS 成金ゴブリン

誰も知らない路地裏にて、一人の女を賭けた戦いが今、幕を開けた。

「行くでおじやる…！！」

「来い、チビデブ!!」

『デュエル!!』

遂に始まった二人のデュエル。

によほほほほ!と気色悪い声を漏らす成金ゴブリンは、決闘盤にセツトされたデッキに手を伸ばす。

「先攻はボクちんでおじゃる! ブラック・マジシャン・ガールちゃんを愛するドローっ!!」

「んなっ!?!」

【成金ゴブリン】

LP/8000

【結締智恭】

LP/8000

衝撃的なドロー宣言にショックを受ける結締を余所に、成金ゴブリンは手札から一枚のカードを掴み取る。

「ボクちゃんは、この奴隷を召喚するでおじゃる！」盲信するゴブリン  
『ー！』

【盲信するゴブリン】

星4 / 地属性 / 戦士族

ATK / 1800 DEF / 1500

「効果」

このカードは表側表示でフィールド上に存在する限り、コントロールを変更する事はできない。

成金ゴブリンのフィールドに、濃い顔付きのゴブリンが召喚された。

盲信するゴブリンの余りに気持ち悪い顔に、対峙する結締は、反射的に視線を逸らす。

「によほほほ！ボクちゃんの奴隷にビビってるのでおじゃる！」

（んな訳あるかよ…ただ単に、あの不細工ツラを直視したくないだけだぜい）

結締の気持ちなど知る由もなく、成金ゴブリンは先攻のプレイを続けていく。

「ボクちゃんはカードを1枚セットして、ターンエンドでおじゃる！」

「にやろう…余裕ぶっこいていられるのも、今の内だけ…!!」

成金ゴブリンのターンが終了し、結締のターンへと移行する。

先のターンからも分かる様に、成金ゴブリンはマジシャン・ガールことマナに、よほど執着している事が窺える。

しかし、結締も負けてはいられない。

「いくぜい！マナちゃんは俺の嫁ドロー…！」

「にやにいい!?!」

シュバツ!! つと鮮やかにドロウをする結締。

手札を確認した結締は、成金ゴブリンを成敗するべく、その行動を開始する。

「最初からカツ飛ばしてくぜい！魔法カード『融合』！」

【融合】

「魔法カード」

手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

結締は初手に、手札から融合の魔法カードを発動した。  
彼が融合するモンスターとは…。

「手札のフェザーマンと、バーストレディを融合し、現れる！」  
「E・HERO フレイム・ウィングマン」！！」

【E・HERO フレイム・ウィングマン】

星6 / 風属性 / 戦士族

ATK / 2100 DEF / 1200

「融合 / 効果」

「E・HERO フェザーマン」 + 「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

結締のフィールドに、風と炎の力を合わせた戦士、フレイム・ウィングマンが現れた。

結締の召喚したモンスターに、成金ゴブリンは一瞬だけ、片方の目をギョッと見開く。

「【E・HERO】！？ 融合召喚でおじゃるか…！！」

「おじよ。俺のHEROデッキは、強えぜい…！！」

融合召喚し、ニィッと笑みを浮かべる結締は早速、バトルフェイズへと突入する。

「バトル！行けえ、フレイム・ウィングマン！チビデブのモンスターに攻撃！！」

フレイム・ウィングマンの右腕、その先端に、炎のエネルギーが凝縮されていく。

そして、成金ゴブリンのモンスター、盲信するゴブリンに向かって、その炎が解き放たれた。

「喰らいなア！フレイム・シュート！！」

ズドンッ！！

「によわあああ！？ボクちんの奴隷が……！！」

【成金ゴブリン】

LP / 8000                      7700

【結締智恭】

LP / 8000

成金ゴブリンのモンスターを破壊し、先制ダメージを与える事に



成功した結締。

モンスターを失い、眉間にシワを寄せる成金ゴブリン。  
すると、そんな成金ゴブリンの顔に、ある影が掛かった。

「ふっ…ん？な、何だコイツは？もう貴様の攻撃は終了した筈でお  
じやる！何でコイツは、まだボクちゃんに対して構えているでおじや  
るか！？」

影の正体は結締のモンスター、フレイム・ウィングマンだ。  
フレイム・ウィングマンは、成金ゴブリンの前に立ち、右腕をゆ  
っくりと前に翳す。

「ああ、言ってなかったっけ。フレイム・ウィングマンの効果発動  
！このカードがモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモン  
スターの攻撃力分のダメージを与える！」

「ひよ！？ によにやあああ！！！」

【成金ゴブリン】

LP / 7700      5900

【結締智恭】

LP / 8000

効果によるダメージを受け、ボロ…っと焦げる成金ゴブリン。

先制に大ダメージを与えた結締は、掴みどころのない笑みを浮かべながら。

「リバーズカードを1枚セットし、ターンエンド。どうよチビデブ、俺の強さが分かったなら、尻尾を巻いて帰んな！」

「ぐにゅにゅ…っ…よ、よくもやってくれたでおじゃる…！ ああ、ボクちんの高価な服に焦げ目が…！！ 弁償するでおじゃる…！」

「知るかつつうの…！」

「ぐにゅにゅ…！！ なら、ボクちゃんがデュエルに勝って、何としても弁償させてやるでおじゃる…！！」

プンスカと怒る成金ゴブリンだが、聞いててちっとも怖く感じないのは気のせいだろうか？

結締が呆れるような溜め息をつき、成金ゴブリンのターンが始まる。

【成金ゴブリン】

LP / 5900

「手札」

4枚

「モンスター」

なし

「魔法・罫」

リバーズカード 1枚

【結締智恭】

LP/8000

「手札」

2枚

「モンスター」

E・HERO フレイム・ウィングマン

「魔法・罫」

リバーズカード 1枚

「おじやる…！ マジシャン・ガールちゃんチュツチュ、ボクちゃんのターン…！」

「てめえ……！」

「によほほ。良いカードを引けたでおじやる。その前に…先ずはこのトラップから使っでおじやる！」

成金ゴブリンは、自分の場に伏せてあった一枚のカードを発動した。

それは…。

「永続罫、発動…！ 『追い剥ぎゴブリン』でおじやる…！」

【追い剥ぎゴブリン】

「永続罨」

自分フィールド上のモンスターが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える度に、相手はランダムに手札を1枚捨てる。

「そして、ボクちゃんは『ゴブリン突撃部隊』を召喚でおじゃる！！」

【ゴブリン突撃部隊】

星4 / 地属性 / 戦士族

ATK / 2300 DEF / 0

「効果」

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

ヌツ…ヌツ…のっし、のっし…

成金ゴブリンのフィールドに、どこからか大勢のゴブリン達が、かったるそつに集まってきた。

「い…っ、下級モンスターで、攻撃力2300かよ…!?!？」

「さあお前たち！ボクちゃんの為に、粉骨碎身の意気で戦つておじゃる…!！」

『……ハア』

成金ゴブリンが揚々と声をあげるも、ゴブリン突撃部隊から聞こえてくる声は溜め息ばかりだ。

仕舞には地面に座り込み、それぞれが気だるそうな表情ばかり浮かべているではないか。

これは決闘盤によるソリッドヴィジョンではないのか？と、結締は啞然となって見つめていた。

「こらあ、お前たち！何やっているでおじゃるか！？ 立て！立つておじゃる！！」

「…チビデブ。お前…自分のカード達から信用されてねえんじゃ…」

「そんな事ないでおじゃる！！ 外野は黙ってるでおじゃる！！ そら、お前たち…金だ、金をやる！！ ほおれ、ほれほれえ！！」

ジャラジャラッ！！と、成金ゴブリンはポケットから大量の金貨をばらまいた。

その光景にドン引きする結締。

しかし、次の瞬間…。

ばらまかれた金貨を拾ったゴブリン突撃部隊は、先程の気だるそうな態度から一変し、屈強な戦士の顔付きへと変貌したのだ。

『オオオオオオオオオ！！！！！！』

「のわっ！？ 何だコイツら…急にやる気になりやがった…！！」

「それで良いのでおじゃる。待たせたな、人間…デュエル再開でおじゃる…！」

ゴブリン突撃部隊がやる気になった所で、成金ゴブリンのバトルフェイズが始まる。

「ゴブリン突撃部隊！！ あのいけ好かないフレイム・ウィングマ  
ンを、懲らしめてやれい…！！」

オオオオオオ！！！！！！

ボコボコボコボコ…！！

「だあああ！！ フレイム・ウィングマンっ！？」

【成金ゴブリン】

LP / 5900

【結締智恭】

LP / 8000

7800

ゴブリン突撃部隊の集団攻撃を受け、結締のフレイム・ウィング  
マンが破壊されてしまった。

そして…。

「よくやった、お前たち！！　によほほ…この瞬間、ボクちゃんが発動した永続罫、追い剥ぎゴブリンの効果発動！！」

「っ！？」

「追い剥ぎゴブリンは、相手に戦闘ダメージを与えた時、相手の手札1枚をランダムに捨てる事ができるのでおじやる。さあ人間！手札を捨てるでおじやる！！」

「ハンデス…っ！？」

ハンド・デストラクション  
手札破壊。

結締は、融合魔法カードを主体としたデッキを使用する。

融合モンスターには、強力なステータスや強力な効果を持つモンスターが多く存在するが、その戦術には弱点がある。

それは、カードの消費枚数だ。

基本的に、融合召喚をするには、三枚のカードを消費する事になる。

？融合魔法カード

？素材となるモンスター

？素材となるモンスター

それは、自分の手札、もしくはフィールドに、三枚のカードが揃わなければ、融合召喚が出来ないという事になる。

強力なカードを使用するには、その代償は大きい。といった具合だ。

そんな結締の手札は二枚。

ここから手札を、ランダムに一枚捨てなければならぬ。

(…今このカードが捨てられたら、正直キツイぜい…!!)

「によほほほほ。選びきれないでおじゃるか？ だったらボクちゃんが選んでやるのでおじゃる」

成金ゴブリンは陽気な声で、小馬鹿にするような表情を作りながら

「チミから見て、左側のカードを捨てるでおじゃる。ほれ、ほれほれ！ サツサと捨てる！」

「……ッ…！」

結締は手札を捨てながら一瞬だけ、奥歯をギツと噛み締める。

自分の思い通りに展開が進んでいく事で、成金ゴブリンは気色悪い笑い声をあげ続ける。

「によほほほほ…！ コレでチミの手札は、たったの一枚！ ジリジリと、少しずつ、少しずつ…身ぐるみを剥いでやるでおじゃる…！」



「…ちくしょう」

「によほほほほー！ 良い顔でおじゃる。そういう表情の輩から、色々と剥いでいくのは気分が良いでおじゃる。さて、バトルを終えたゴブリン突撃部隊の効果！ 次のボクちゃんのターン終了時まで、守備表示になる…」

「…！！」

「ボクちゃんはカードを1枚セットして、ターンエンドでおじゃる！」

成金ゴブリンのターンが終了し、結締のターンがはじまる。  
だがそれは、不利な状況からのスタートだった。

【成金ゴブリン】

LP / 5900

「手札」

3枚

「モンスター」

ゴブリン突撃部隊（守）

「魔法・罫」

追い剥ぎゴブリン

リバーズカード 1枚

【結締智恭】

LP / 7800

「手札」

1枚

「モンスター」

なし

「魔法・罨」

リバーズカード 1枚

「俺のターン、ドロー!!!」

デッキからカードをドローし、手札を二枚に増やした結締。

しかし、手札が満たされたかと言われては、そうとは言えない。

「によほほ……。【E・HERO】は融合しなければ、大した実力もない奴らばかりなのでおじやる。例えモンスターを引けたとしても、雑魚の雑魚でおじやる!!! によほほ!!!」

「によほほほ〜!!!」

「によほっ!? な、何がおかしいでおじやるか!? 気でも狂ったでおじやる!?!」

手札を減らされた事で戦術の幅が狭まり、気落ちしているものばかりと思っ込んでいた成金ゴブリンは、結締が唐突に笑い出した事に、一瞬動揺する。

「狂っちゃいないさ、チビデブ。確かに【E・HERO】達ア、融合してこそ真の力を発揮する。だけ け ど…お前が発動した永続畏、追い剥ぎゴブリンのお陰で、何とかなりそうだにゃ」

ゾミ…ッ…!

「っ!?!」

ニヤリ…と、凍り付くような冷たい視線を向ける結締に、成金ゴブリンは少しチビリそうになる。

「それじゃ、早速いくぜい!墓地に眠る、ネクロダークマンの効果  
!?!」

【E・HERO ネクロダークマン】

星5 / 闇属性 / 戦士族

ATK / 1600 DEF / 1800

「効果」

このカードが墓地に存在する限り1度だけ、自分はレベル5以上の「E・HERO」と名のついたモンスター1体をリリースなしで召喚する事ができる。

「コイツが墓地にある時に1度だけ、手札の【E・HERO】1体をリリースなしで召喚する事ができる…!! 来い、エッジマン!  
!」

【E・HERO エッジマン】

星7 / 地属性 / 戦士族

ATK / 2600 DEF / 1800

「効果」

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

ズドドドド…ッ…!

追い剥ぎゴブリンの効果で墓地に送られたネクロダークマン。

その効果で、結締がリリースなしで召喚したカードは【E・HERO】の中でも最上級モンスターのエッジマンだった。

攻撃力2600の強力モンスターの登場に、成金ゴブリンは鼻水まで垂れ落ちそうになる。

「にゃにいい!?!」

「散々、人を馬鹿にしゃがって…。チビデブ、容赦しねえぜよ…!」

エッジマンを召喚した結締は、怒りで震える拳を握り締め、バトルフェイズへと突入する。

「行けッ、エッジマン！！　ゴブリン突撃部隊に攻撃！　パワー・エッジ・アタック！！」

ズガガッ！！

ドゴオオオオ！！

「ぎによええええ！！」

【成金ゴブリン】

LP / 5900                      3300

【結締智恭】

LP / 7800

エッジマンの強力な一撃が、守備表示のゴブリン突撃部隊を蹴散らした。

その衝撃に吹き飛ばされ、成金ゴブリンは一回、二回と派手に転がり、近くのゴミ置き場に衝突する。

「むぎゅっ！？　ぶへえああ！！　あ臭っ！？　なんでおじやるか、ココは！？」

「エッジマンは、攻撃力が相手の守備力を上回っていた場合、その差だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。って…聞いたじゃないねな」

「ぎにゃっ!? 変な汁が服に付いて、臭いが取れないでおじゃる!!! ああッ!!! ボクちんの高級なズボンに穴が!!!」

ぶちん

「ゆ…ゆゆゆっ…許さないでおじゃるっ!!! ボクちんをこんな目に遭わせた報い、受けてもらうのでおじゃる!!!」

頭にバナナの皮を乗せたまま、ムキーツ!!!と憤慨する成金ゴブリン。

もはやその姿は大富豪とは呼べず、見事に落ちぶれた浮浪者に見えなかった。

「…あ、マナちゃんを愛する俺のターンは、これで終了だぜい」

「ムツギイイイ!!! マジシャン・ガールちゃんは、ボクちんのお嫁さんになるんだって言うているでおじゃる!!! その減らず口…叩き潰してやるのでおじゃあある!!!」

ズドドドドドドド!!!

全身から怒りのオーラを噴出する成金ゴブリン。

しかし、頭にはバナナの皮が乗ったままであるという事には気付いていなかった。

日曜日の街中は、大勢の人で賑わっている。

真夏だというのに、強い日差しを浴びながらも、大通りを行き来する若者たち。

窓際から中の様子が伺える飲食店では、客たちは冷房の効いた部屋で、冷たいデザートを食べて満足そうな笑みを浮かべている。

その様子を覗き込んで、口元からヨダレを垂らしながら、マジシヤン・ガールことマナは、西条の後について回っていた。

「ねえ…さいじょお、さいじょお！あのお店のー…」

「だめ」

ピシヤリと、マナが全てを言う前に、西条はたったの二文字で黙らせる。

「ちょ、さいじょお！それはあんまりなんだよ！まだ私は、あのお店のー…」

「だめ」

また全てを言い終える前に、たったの二文字で遮断された。

「…ちゃんと話し聞いてくれないと、魔法…使っちゃうよ？」

「だめ」

「~~~~~っっ」

「だああああ、待て待て待て！！ 杖は仕舞え！！」

背後から漂う不穏な気配をいち早く察知した西条は、慌ててマナに向き直る。

「デザートとかなら、後で買ってやるから！こんな街中での魔法は勘弁してくれ！！」

「むう…気分転換で外に来て、暑いだけなんだもん。さいじょおの部屋みたいに、どこか涼しい所ってないの？」

わたしは今にも干からびそうなんだよ！と、マナは訴えかけるような視線を西条に向ける。

遡ること数分前。

部屋で今後の事を話していた二人だったが、マナは西条に対し、申し訳ないと感じている事を吐露した。



この世界に来てから、彼にばかり迷惑をかけていると。そんな風に気を落としていく彼女を見て、西条はこの街に来たばかりの自分と重なって見えた。

見知らぬ場所で、最初から何もかも上手く行く訳がない事を、西条は知っている。

知らなければ、何も分からないままだという事を知っている。

この世界で、少しでも彼女が行動できる範囲を増やす為に。

彼女がこの世界で、少しでも自分の力で成し遂げる事ができる為に、西条はマナを街へと連れ出したのだ。

「安心しろ。もう直ぐ、涼しい場所に到着するから。それまでの辛抱な」

「もう直ぐ……って……。わたしは、まだこれからドコに行くのか、知らされてないんだよねえ、ドコに向かっているの？」

「それはだな……」

西条は、現在マナが着ている服を見つめる。

黒の学生ズボンに、ピンクのTシャツの上から白のカッターシャツを羽織るその姿は、男子学生の夏服そのものである。

というよりは、彼女が着ている服は全て、西条の私物である。

彼女が持っている服は、カードイラストに描かれた派手な露出度の高い衣装しかない為に、彼が余りの服を貸し出したのだ。

しかし、今度二人はトリティニーグループに向かい、神のカードを見せてもらう事になっている。

自分は服を持っているが、彼女は持っていない為、この機会に彼女の服を買ってあげようと考えているのだ。

改めて視線を彼女に向ける西条。

男物の服というのは、やはり女性には大きすぎるのか、上から下までダボダボなゆったりスタイルになっている。

それでも上手に着こなす辺り、彼女はやはりオシャレなのかもしれない。

「ちょっと、さいじょお。やらしい目でド〇見てるの?」

「ん? いや別に...ただ...」

「...ただ...?」

「シャツは大きいかもしれないけど、胸とかキツくないか? お前結構大きいし(ポイン、ポイン)」

「なっっ / / / /」

「ほら... 女物の服って、胸とか大きさ考えて作られてるだろ? 今お前が着てる服は俺のだから、サイズは大丈夫だと思ってたけどー」

「...」

「せっっ、セクハラ!!! その発言はセクハラなんだよ、さいじょお!!!」

「えっ!? セクハラって、ちょ、お前どこでそんな言葉を覚えてー...って、待て待て待て待て待て!!! 杖を出すな!!! 魔法は

使っちゃ駄目だつつつのおお!!」

三上市の街中を全力で逃げ回る西条。

片や、全力で彼を追いかけ回すマナ。

しばらくして、三上市のとある一角で、西条の断末魔が響き渡った。

三上市の路地裏にて繰り広げられる二人のデュエル。

【成金ゴブリン】

LP / 3300

「手札」

3枚

「モンスター」

なし

「魔法・罫」

追い剥ぎゴブリン

リバースカード 1枚

【結締智恭】

LP / 7800

「手札」

1枚

「モンスター」

E・HERO エッジマン

「魔法・罨」

リバーズカード 1枚

ライフアドバンテージを大幅に広げた結締のターンが終了し、成金ゴブリンのターンに移行する所から始まる。

路上のゴミ置き場に衝突した際に、頭に被っていた王冠がバナナの皮に変わっている事に気付かないまま、成金ゴブリンは力任せにカードを引く。

「おによれええ…っ、マジシャン・ガールちゃんと や、  
したいボクちんのターンッ!!」

「なッ!! テメエ、放送規制掛かってんじゃねえか!!」

「五月蠅いでおじゃる…貴様はボクちんの手で、ボッコボコのギッタギタにしてやるのでおじゃる…!!」

余りの怒りによって、血走った眼球を結締に向ける成金ゴブリン。そして、成金ゴブリンの反撃が始まった。

「先ずはこのカードから使うでおじゃる!! 魔法カード『ハンマーシュート』を発動するのでおじゃる!!」

【ハンマーシュート】

「魔法カード」

フィールド上に表側表示で存在する攻撃力が一番高いモンスター1体を破壊する。

「この効果で、フィールドで最も攻撃力が高いモンスター1体を破壊するのでおじゃる!!」

「今の場にモンスターは、俺のエッジマンだけ…!？」

ヒュウウウウ…

ズドゴンツツ!!

「のわああっ!?! エッジマン…!?!」

結締のエッジマンの頭上に、巨大なハンマーが叩き付けられ、破壊された。

これにより、結締のフィールドからモンスターは全て消え、残されたのは一枚のリバースカードのみとなった。

【成金ゴブリン】

LP / 3300

【結締智恭】

LP / 7800

「これで邪魔者は消えたでおじゃる…！！ によほほほ、覚悟するでおじゃるよ…！！」

今が攻め時とばかりに、成金ゴブリンは次々と手札のカードに手を伸ばす。

「いでよ…！！『ゴブリンエリート部隊』…！！」

#### 【ゴブリンエリート部隊】

星4 / 地属性 / 悪魔族

ATK / 2200 DEF / 1500

「効果」

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。次の自分のターン終了時までこのカードは表示形式を変更できない。

成金ゴブリンのフィールドに召喚されたのは、下級モンスターにして攻撃力2200を誇る、ゴブリンエリート部隊だ。

「しゃらに、ボクちゃんは今こそ、このカードを発動するでおじゃる…！！ 永続罫『リビングデッドの呼び声』を、発動でおじゃる…！！」

#### 【リビングデッドの呼び声】

「永続罫」

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「によほほ…！！ ボクちゃんはこの効果で、墓地のモンスター1体を復活させるでおじゃる！！ もう一度働くでおじゃるよ」ゴブリン突撃部隊』！！」

【ゴブリン突撃部隊】

星4 / 地属性 / 戦士族

ATK / 2300 DEF / 0

「効果」

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

リビングデッドの呼び声の効果により、ゴブリン突撃部隊までもがフィールドに特殊召喚された。

攻撃力2200と2300のモンスターが出揃い、結締はギョツと目を見開く。

「まだまだなのでおじゃる…！！ 手札の装備魔法『巨大化』を発動なのでおじゃる…！！」

【巨大化】

「装備魔法」

自分のライフポイントが相手より下の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。自分のライフポイントが相手より上の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。

「この装備魔法を、ゴブリン突撃部隊に装備するのでおじやる。装備されたゴブリン突撃部隊の攻撃力は、倍になるのでおじやるあある！！」

【ゴブリン突撃部隊】

ATK / 2300                      4600

(『巨大化』装備)

「んなっ！？ 攻撃力が…っ！？」

「念には念を、でおじやる。ボクちゃんが攻撃した時に、チミの伏せカードで防がれたら厄介でおじやるからねえ…」

「っ！？」

「不安要素は、排除するのでおじやる！！ 手札の速攻魔法『サイクロン』を発動でおじやる！！」

【サイクロン】



「速攻魔法」

フィールド上の魔法または罠カード1枚を破壊する。

バコオオ!!

結締の場に、切り札のつもりで伏せていた罠カード『ヒーロー見参』が破壊されてしまった。

これにより、結締を守るカードは何も無くなってしまった。

結締の引きつった顔を見て、成金ゴブリンは愉快に目元をニヤつかせる。

「これでチミのフィールドからカードは全て消えた。さあて…ボクちんが味わった痛みを、倍返しにしてやるのでおじやる!! やれえ、お前たち!!」

バトルフェイズに突入した成金ゴブリンは、結締に対して一斉攻撃を仕掛けてきた。

「まずはエリート部隊からおじやる!! 突撃いい!!」

「っ!! のおおああああ!!?!?」

【成金ゴブリン】

LP / 3300

【結締智恭】

LP/7800

5600

エリート部隊に囲まれ、集団で攻め入られた結締は、苦痛な叫びと共に路上に吹き飛ばされた。

「がっ！！ ガハツ…っ！？」

吹き飛ばされ、全身を襲う激しい痛みにも、結締は体中から嫌な汗が噴き出してくるのを感じた。

(んなっ！？ ソリッドヴィジョンじゃ…ねえのかよ…っ！！)

初めてダイレクトアタックを受けた事で、結締は精霊界のデュエルというのを、本当の意味で実感する。

(こんなデュエルを…西条ちゃんはやってたっつてのよ…！！)

マナは言っていた。

彼は自分を助ける為に、デュエルを挑んでいったと。

彼は怖くなかったのだろうか？

逃げ出したくならなかったのだろうか？

このデュエルの意味を本当に理解した瞬間、結締は恐怖心で冷静ではいられなくなってしまった。

「によほほほほ！！ 無様な格好なのでおじやる！！ でも、忘れて貰っちゃ困るのでおじやるよ。永続罫『追い剥ぎゴブリン』の効果果！！」

【追い剥ぎゴブリン】

「永続罫」

自分フィールド上のモンスターが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える度に、相手はランダムに手札を1枚捨てる。

「……くっ……」

「によほほ……これでチミの手札は0。もうこれで、チミは一文無しでおじやる……」

(…スパークマンのカードが墓地に送られちゃった。どうするぜよ…もう他にカードがねえっ！！…)

「さて、さてさて…ここからが本番でおじやる」

「っ！？」

ズン、ズン、ズン、ズン…と。

膝を着く結締の周りを、巨大化したゴブリン突撃部隊が包囲する。

そうだ。

まだ成金ゴブリンには、ゴブリン突撃部隊の攻撃が残っているのだ。

その事実を認識した瞬間、結締は血の気が静かに引いていくのを感じた。

「…やべ」

「さあ、お前たち。ソイツをたああツプリと痛めつけてやれ。マジシャン・ガールちゃんに、遭わせる顔がない位に、な」  
「ーッッッ!?!?!?!」

瞬間。

声にならない結締の叫びが、路地裏に響き渡った。

【成金ゴブリン】

LP / 3300

【結締智恭】

LP / 5600      1000

「…にょほほ。もう良いぞい、お前たち」

成金ゴブリンがそう言うと、結締を取り囲んでいた突撃部隊は成

金ゴブリンのフィールドに戻っていく。

がら空きの結締のフィールド。

そこにあつたのは、全身がボロボロになり、目も当てられない位に無惨な姿になった、結締の姿であつた。

「によほほ　なんともお似合いな格好でおじゃる。やっぱりチミは、そつやって地べたで這いずり回っている姿が、一番様似になつているのでおじゃる」

「……」

「ぶふふん」

得意気に鼻を鳴らす成金ゴブリンは精々したのか、先程とは打つて変わったような態度で独りずに喋りだした。

「さて、さてさて…。チミをデュエルで倒したらマジシャン・ガールちゃんを迎えに行くのは当然として…。ボクちん達が結婚したら、どんな　をしようか…」

「……」

「朝のオハヨウでは、ガールちゃんに　しながら起こして貰つて、目覚めには熱い　。食事の時には勿論お互いに　しながらで、作ってもらっている時には　が良いでおじゃるね。きつとガールちゃんは何を着せても似合うのでおじゃる」

「……ッ」

「夜にはやっぱり、  
ボクちんの  
してー」  
な  
でもらうのが当たり前でおじゃる。  
で、ガールちゃんは大喜びで

「……えか」

「ーん？」

一人、放送禁止用語を連発する成金ゴブリンは、地面に横たわる結締が何を言っているのか上手く聞き取れなかった。

「何でおじゃる？チミみたいな輩には、ボクちんのガールちゃんに対する愛情の差がー」

「気色悪イって言うてんだよ。聞いててヘドが出そうだけい」

ハッキリとそう告げた結締は、まるで何事も無かったかのような、軽快な動きで立ち上がる。

「んにゃっ！？ あれだけ痛めつけても、まだ立ち上がれるのでおじゃるかっ！？」

「痛えっちゅうの。今も頭はフ〜ラフラ。立ってるのが、やっとこ」

さな感じだにゃ〜」

ニィ…と笑みを浮かべる結締に、成金ゴブリンは一瞬ではあるが  
気圧された。

なぜ、この男は立ち上がれるのか？

この男の体力は、底無しなのかとさえ、思えてしまう。

「出来れば今は、ゆっくり体を休めたい所なんだけどな…聞いちま  
ったからよ」

「…!？」

結締の静かな言葉が、逆に大きく聞こえてくる。

ギンツ!! と、結締は射殺すような鋭い視線で、成金ゴブリン  
にハッキリと告げる。

「自分が好きな娘を…そんな風に言われたままっつのア、漢として  
駄目だろ？お前をマナちゃんに合わせる訳にやいかねえ…!!」

「ひい…!？」

「このデュエル…俺ア何が何でも、負ける訳にやいかなくなっちま  
った…!! 覚悟しろよ、チビデブ」

フィールドにカードもなく、手札もないこの状況で。

結締は宣言する。

このデュエルで、絶対に自分が勝つという事を。

【成金ゴブリン】

LP / 3300

「手札」

なし

「モンスター」

ゴブリンエリート部隊

ゴブリン突撃部隊（巨大化）

「魔法・罫」

追い剥ぎゴブリン

巨大化

【結締智恭】

LP / 1000

「手札」

なし

「モンスター」

なし

「魔法・罫」

なし



「俺ア、お前を倒す。絶対にだ……!!」

圧倒的不利な状況から発した結締の言葉。

一瞬、その覇気に気圧される成金ゴブリンだったが、フィールドを見渡す事で、冷静さを取り戻す。

「勝つ……？この状況で……？手札も、モンスターも、魔法も、畏もないチミのその状況で？ライフがのこりたったの1000しかないその状況で？」

「……ああ」

彼の瞳に宿った光は色褪せない。

「……っ!! 馬鹿も休み休み言うでおじやる!! この状況で万が一、奇跡が起きたとしても、チミが勝つなんて有り得ないでおじやる……!!」

「……確かに、確率は低い。それも突き抜けてな」

そんな事は言われなくても、彼自身が一番よく知っている。しかし、負ける訳にはいかない。マナを、こんな奴なんかに取りられたくない。

「ヒーローってのはな…最後まで、諦めちゃいけないだよ。ヒーローが諦めちまったら、そこで物語は終わっちまう」

「…何をいってやがるでおじゃる？どう足掻こうと、チミの負けは決まっているのでおじゃる！！」

結締の言葉が気に食わない。

結締のその目が気に食わない。

自分では理解していなかったが、成金ゴブリンは明らかに動揺していた。

「…俺のデッキよお、ヒーローとしての力を、今こそヤツに魅せてやるっぜい！！」

キツと、表情を引き締めた結締は、デッキトップに指を添える。本当は怖い。

負けるかもしれない、という恐怖。

狙ったカードが引けないかもしれない、という恐怖。

マナがこの変態チビデブに好きなようにされるかもしれない、という恐怖。

しかし、それを乗り越えてこそそのヒーロー。

最後まで諦めないのが、結締が信じるヒーロー。

「行くぜい…俺のターン、ドローッ…！」

シュバツ!!

「……!!」

「無駄でおじやる……」

ゆつくりとドロカードを確認する結締。  
彼が引き当てた、最後の一枚とは……。

「ーッし!! 来たきた来たああ!!」

「ひよ?」

「最高だぜい、お前たち!! 俺は手札から、バブルマンを特殊召喚!!」

【E・HERO バブルマン】

星4 / 水属性 / 戦士族

ATK / 800 DEF / 1200

「効果」

手札がこのカード1枚だけの場合、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に自分フィールド上と手札に他のカードが無い場合、デッキからカードを2枚ドロする事ができる。

結締が引き当てたのは、バブルマンのカードだ。  
バブルマンを守備表示で特殊召喚した結締は早速、バブルマンの特殊能力を発動する。

「バブルマンの効果！！ コイツが特殊召喚に成功した時、手札とフィールドに他のカードが無い場合、デッキからカードを2枚ドロ―できる！！」

「にやにいい！？」

「ドロ―ッ！！ へへ…チビデブ、魅せてやるよ。これが【E・HERO】デッキの奇跡だ！！」

手札を二枚に増やした結締は、奇跡を起こす。  
そのカードは。

「手札から『ミラクル・フュージョン』、発動！！」

【ミラクル・フュージョン】

「魔法カード」

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「E・HERO」という名のついた融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「墓地の【E・HERO】を除外し、そのモンスターを融合させる  
!!! 俺は墓地のフレイム・ウィングマンと、スパークマンをゲ  
ムから除外:!!!」

「ぼっ、墓地融合:っ!?!」

「融合 召喚 ツ!! 現れるツ!!」E・HERO シャイ  
ニング・フレア・ウィングマン『!!!」

【E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン】

星8 / 光属性 / 戦士族

ATK / 2500 DEF / 2100

「融合 / 効果」

「E・HERO フレイム・ウィングマン」+「E・HERO ス  
パークマン」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの攻撃  
力は、自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカード  
1枚につき300ポイントアップする。このカードが戦闘によって  
モンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力  
分のダメージを相手ライフに与える。

結締のフィールドに現れたのは光り輝く戦士、シャイニング・フ  
レア・ウィングマンだ。

そのモンスターの登場に、成金ゴブリンは口をあんどりと開けた  
まま、動く事ができなかつた。

「シャイニング・フレア・ウィングマンは、墓地の【E・HERO】の数だけ、攻撃力を300ポイントアップさせる」

【E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン】

ATK/2500      3700

攻撃力を上昇させるシャイニング・フレア・ウィングマン。

だが結締は、更に残った手札のカードに手を伸ばさず。

「更に、手札から魔法カード『H・ヒートハート』を発動!!」

【H・ヒートハート】

「魔法カード」

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は500ポイントアップし、そのモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「このカードは、モンスター1体の攻撃力をエンドフェイズまで500ポイントアップし、守備表示モンスターを攻撃した際に、貫通ダメージを与える!!」

【E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン】

ATK / 2500                    3700                    4200  
(H・ヒートハート効果)

「こ…っ、攻撃力4200の貫通持ち!？」

「お前のモンスター達は自身の効果により、全員守備表示だけい

成金ゴブリンのフィールドには、守備表示のゴブリン突撃部隊と  
ゴブリンエリート部隊のみ。

このターン、結締の攻撃を防ぐ手だては残っていないかった。

「しょんな…：しょんな馬鹿にやああ!！」

「覚悟しろ、チビデブ!! 行け、シャイニング・フレア・ウィン  
グマン!！」

結締のターン、その最後のバトルフェイズ。

【成金ゴブリン】

LP / 3300

【結締智恭】

LP / 1000

「シャイニング・フレア・ウィングマンで守備力0の、ゴブリン突撃部隊を攻撃!!」

高く跳躍し、その手に光のエネルギーを凝縮させていくシャイニング・フレア・ウィングマン。

そして遂に、その一撃が成金ゴブリンのモンスターに炸裂した。

「今回はお前がフィニッシュャーだ!! 喰らえ、シャイニング・シユート!!」

カツッ!!

ズシャゴオオオ!!

「ギエピイイイイ!!」

【成金ゴブリン】

LP / 3300 0

【結締智恭】

LP / 1000

ゴブリン突撃部隊を破壊し、その貫通ダメージを与えた結締。煌々と立ち込める土煙の中、最後に立っていたのは、結締智恭だった。



結締の戦い 参上！E・HERO (後書き)

今回は後書きというよりも、ちょっとした愚痴。

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン…

文字書き込む時に、文字数が多すぎて困る(汗)

## 動き出す闇（前書き）

最近、仕事関係の用事が増えてきて、なかなか執筆作業が進まない……！！

ああ、どこかに思った事を文章化してくれる便利な機械ってないものか……！！

今回の後書きで、ちょっとしたアンケートを用意してあります。  
気が向いたら良いので、ご参加宜しくお願いします。

## 動き出す闇

三上市の一角に、一件のカードショップが建っている。その店の名は、アリス。

トリティニーグループが経営する系列店であり、様々な種類のカードが売られているとして有名な店舗である。

日曜日の午後という事も相俟って、今日も商売繁盛。

店内は沢山の客で賑わっていた。

買ったばかりのカードのパックを開けて、ワクワクする子供たちや、自分のデッキを持ち込んで、店内の奥でデュエルをする若者たち。

皆が皆、見ているこちらが思わず笑顔になりそうなくらい、イキイキとした表情をしていた。

そんな客の笑顔を堪能しながら、この店の店長である中島は、相変わらずプロレスラーが被るようなマスクを着用しながら、終始ご機嫌な様子で鼻を鳴らしている。

「んふんふん 今日沢山のお客さまが来てくれて、アタシもうダメ嬉しくって、はちきれちゃいそう!」

「抑えてくれ。店長のようなオカマがはちきれたら、俺たち客にとっては地獄絵図だ」

興奮する中島に物言つのは、白石直也だ。

学校で担任教師とデュエルをした後、何気なく立ち寄ったばかりであった。

くねくねと体を動かす中島に溜め息をつくと、白石は軽く咳払いをしながら、中島に尋ねた。

「所で店長よ。例のカードは届いているか？」

「届いているわヨ ハイ、このカード3枚よネ」

中島は自分の履いているズボンの股間から、艶めかしい動きで三枚のカードを取り出した。

「ホツカホカよ」

「その言葉は要らん。とにかく、礼を言うぞ店長。このカードが俺のデッキに入れば、俺のブルーアイズは更に強くなる…!!」

「『伝説の白石』…ホワイト・オブ・レジェンド。前から白石ちゃん、欲しがってたもんネ」

白石が中島から受け取ったカードは『伝説の白石』と呼ばれるモンスターカードだ。

白石は前々から、このカード欲しさに、パックを大量に購入していた。

しかし、パックを開けても開けても、このカードは姿を現さなかった。

特別なレアカード、という訳ではないのだが、この時ばかりは物欲センサーがフルに発動していたとしか言いようが無かった。

「それよりも白石ちゃん、楠センセとのデュエルで負けてきたんでしよう?」

「ムッ!? 何故それを…」

「言わなくても分かるわヨ 白石ちゃんが眉間にシワ寄せて来店してきた時は、決まってデュエルに負けて来た時ばかりだもの」

「むぐぐ…っ、そうだったのか」

自分では気付かない癖を言われ、白石は来店してきた当初の自分を思い出す。

思い返せば、こみ上げてくる悔しさから、難しい表情をしていたのかもしれない。

「そんな怖〜い顔してちゃ、誰も寄って来なくなるわヨ?」

「ふうん…それに寂しさを覚えるのは、凡人の考えだ。俺には何ら関係のない事だ」

「そもも言つてられなくなるわヨ？人生はまだこれからなんだから」

マスク越しに深みのある視線を送る中島。

彼はまだ若い。

だからこそ、まだ知らない事も沢山ある。

今の台詞のまま彼が大人になった時、困るのは一体誰なのか？

中島は敢えて、これ以上の事は言わないでおいた。

この年頃は、人に言われるのではなく、自分で気付いて大人になつていくのだから。

「ふうん…店長の言うことだ。間違つた事は言つてはいないのだから…。…むう、どんな顔をすれば愛想が良いというんだ？」

「こんな顔ヨ」

「いや、マスク越しでは判らんぞ…」

中島に手鏡を用意され、鏡に映る自分とにらめっこする白石。

鏡の中の自分を見て、白石は改めて感じる。

(…何だコイツは。目つきが悪いな)

自分の顔にそう思うと、とりあえず口元を笑わせてみる事にした。

(…目が…笑っていない…)

乾いた笑みとは、正にこの事なのだろう。  
これでは愛想が良いとは、到底いえない。

(ならば今度は、目尻を垂らすか…ぐぐうつ、何だこのマネケ面は  
!?)

口元だけでは駄目だった。  
目尻だけでは気色悪かった。  
バラバラだから駄目なのだ。

「白石ちゃん。人生の先輩から、とおっておきのアドバイス」  
「…ご教授願おう」

「笑顔って言うのはネ、心が籠もってなくっちゃ駄目なのヨ。本当に楽しいと感じた時、人は自然と笑顔になるでしょう?」

「むう…確かに…」

「だから、白石ちゃんも楽しまなくっちゃ駄目ヨ」とは言っても、直ぐに気持ちが追い付く事なんて難しいだろうし…」

中島は少し考えると、何か思い付いたのか。  
ポンツと手のひらで相槌を打ちながら

「そうだわ！白石ちゃんが、やって楽しい事を想像して　そうすれば、気持ちも軽くなる筈ヨ」

「なる程、その手があったか！！　よし…ならば早速…！！」

白石は考える。

白石は想像する。

白石は妄想する。

これまでに自分がやってきて、心の底から愉快に笑った時の事を

…！！

「……………むむう…っ！！」

白石の額に脂ぎった汗がキラリと光る。  
握り締める拳はプルプルと奮える。  
噛み締めた奥歯はギシギシと唸る。

(お…っ、おもいうかばないい……ッ！！)

「し、白石ちゃん…大丈夫？今のアナタ、物凄く芸術的な顔になっ



てるわヨー!」

(ぐぬぬ…ッ! この俺にとって、楽しいという事は、一体なんなのだ!?! …むっ!?!)

芸術的な表情で訝しむ白石は、そこである事に気付く。

それは、店内の壁に設置された小窓だ。

普段なら、何ら気になる事のない、換気の為に開けてある小窓。その向こう側には…。

「ぶぶ…何だ白石、お前その顔…ククツ、腹いてえ…!」

「え、なに、さいじょお?どしたの、何か変なのでもあるの?」

そこには、窓の向こうから白石の芸術的な顔を、指さして笑う西条亨の姿があった。

マナの声も聞こえてきたが、どうやらマナはコチラの様子に気付いていないらしい。

「あひゃひゃ…!…! なぁ白石、もう一度やってくれよ!写メに撮っとくからさ」ザシユツ!…!…! って、ぐぎゃぁぁあ!?!」

「ああっ!?! いつの間にか、さいじょおの眉間にカードが刺さってる!?!」

窓越しに、見事なカード手裏剣をキメた白石は、こめかみにうつすらと血管を浮かばせながら

「西条オツ！！ 貴様いつからソコに居た！！ 又ウウ…よもやヤツに辱めを受けようとは…っ！！ どう責任をとるつもりだ、貴様ア…！」

「し、白石ちゃん…！！ 言葉だけで聞いたら、爆弾発言ヨ！？」

日曜日の昼下がり。

カードショップ『アリス』は、今日も賑やかです。

カードショップ『アリス』の店内、奥にある事務所には、中島を含め西条等四人が揃っていた。

腕を組み、不機嫌そうな表情で鼻を鳴らす白石の対面には、マナに絆創膏を貼ってもらう西条。

そんな様子を微笑ましく見つめる中島は、マナの着ている服に注目した。

「それにしてもマナちゃん いつの間に、そんなオシヤレな服を？ と…っってもステキじゃない」

「む、そう言えば…！！ 前に西条の部屋で会った時は、どちらかと言えば男物の服だった…」

中島に言われ、白石もマナに視線を移す。

ピンクのTシャツに、デニム生地の子スカート。

ラメの入った煌びやかなサンダルに、可愛いハートのシルバ―が着いたネットクレス。

マナ自身の可愛いしさも相まって、すれ違う人の全てが振り返るような、美少女になっていた。

「ふうん…なかなか似合っているではないか」

「えへへ、そうかな？」

「ええ キューティクルでエキサイティング アタシが男だったら、もう食べちゃいたいくらいヨ」

「いや、店長…男でしょ？なに言ってー…」

「（ウルセエぞ、コラ…ブチ殺すゾ…！！） ホント素敵ヨ、マナちゃん」

「…（。。。）ガタガタブルブル」

西条の言葉を、眼力だけで黙らせた中島。人には、触れてはならない部分があるのだ。

中島の強烈なガン飛ばしにビビる西条を知らず、マナは照れながら舌をペロツと出した。

「えへへ。実はこれ、さいじょおに買ってもらったんだ！明日はこの服を着て、幻神獣に会いに行くんだよ！」

彼に買ってもらった服が気に入ったのか、マナは嬉しそうにポーズをキメる。

そんな彼女を誉める中島を余所に、白石は西条に尋ねてみた。

「西条よ。マナが、幻神獣に会いに行く…と言っていたが、どういう事なのだ？」

「ああ。マナの事情を知ってるお前だから言うけど…コイツが俺達の世界に来た目的は、もう知ってるだろ？」

「確か、精霊界…だったか。そこで我が物顔をしている邪神とやらに一泡吹かせる為に、神のカードをアチラの世界に降臨させる…か」

結締と一緒に、マナから話を聞いていた為に、西条が話す内容を確認するかの様に呟く白石。

「ああ。明日は終業式で、ソコから夏休みに入るだろ？だから、明日の学校が終わってから、中島さんをお願いして、トリティニーグ

ループに行く事にしたんだ」

「…ふうん。行動が早いな…」

なる程、と白石は状況を理解する。

明日、トリティニーグループに乗り出す西条の行動の早さに、白石は感心する。

感心する反面、しかし…と思う部分もある。

「しかし、大丈夫なのか？世界に1枚ずつしか存在しない神のカードを、トリティニーグループが譲ってくれるとは思えんが…」

白石の言う事は最もである。

神のカードは、カードテキスト解読の為に、今もトリティニーグループの研究機関にて解読中なのだ。

更に言えば、神のカードはトリティニーグループの発展を担ってきた、社にとって重要な代物。

それを一般人である自分たちにホイホイ貸し出すとは、到底思えなかった。

「そりゃそうだろ。そんな事、お前に言われなくても分かってるさ。だけど、もしも…」

「…？」

「もしも、“神のカードに書かれているテキストが、解読できた”

としたら…どうなると思っっ？」

「っ！？ 馬鹿な…！！ そんな事、俺達に出来る訳が…ッ！！！」

西条の言葉に、思わずいきり立つ白石は、そこである人物に注目する。

それは、西条の隣で今も中島とお喋りをしているマナだ。

「まさか西条…、マナが…！？」

「ああ。まだ確証は持てない…だけど、希望はある。神のカードに記されたテキストは、もしかしたら“精霊界の文字”なのかもしれない、って…」

「……！！！」

なる程、と。

ここまで来て、白石はようやく納得した。

もし、マナが神のカードに記されたテキストを解読した場合、一時的に神のカードに手を触れる事が出来るかもしれない。

「ふうん…、面白い…！！！」

白石は口元をニヤリと釣り上げ、言い放つ。

「明日のトリティニーグループの件、俺も同行させてもらおう」

「え？」

「興味深い内容だ。俺の決闘者としての血をたぎらせる…！！  
西条よ、何を言っても無駄だ。俺は行くと決めたのだからな！！」

「…白石。ああ！明日は、宜しくな！」

暗雲が空を覆う精霊界。

ここは、精霊界にある虹の都市と呼ばれる場所。

この都市は、宝玉獣と呼ばれるデュエルモンスターが生息する場所であり、ここからは様々な宝石が採掘される場所として有名な所である。

都市の中心地には、大きな闘技場が建てられており、採掘だけでなく、デュエルという文化も栄えている事が窺える。

しかし、静かだ。

今のこの都市にデュエルモンスターの姿は、全くと言って良い程見当たらなかつた。

荒れ果てた建築物。

薙ぎ倒された草木。

そして、至る所に転げ落ちている宝玉の数々。

都市の中心地にある闘技場でも、それは同じだった。しかし、違っている点が一つだけ。

それは闘技場に、二人のモンスターが確認できる事だ。

一人はスレンダーな体型をし、腰まで伸びた艶やかな髪を靡かせる美女。

そしてもう一人は、彼女の腰位の背丈で、手入れがされていない長い髪をした、薄汚れた感じがする少女。

銀の髪をたくしあげ、地に転がる宝玉を拾い上げる美女は、隣に立つ少女に話し掛ける。

「そう言えばクルス…あの話し、聞いた？」

「……」

尋ねられたにも関わらず、クルスと呼ばれた少女は口を開かない。しかし、それに構う事なく、銀髪の美女は話しを続ける。

「人間界で、邪帝のヤツがやられちゃったみたいよ。良い気味だと思わない？」

「…他人の不幸は…蜜の味」

ポツリと、そう呟いたのは、クルスと呼ばれた女性だ。



そんな彼女は、手で顔を隠すようにしながら、上目遣いでその美女を見上げた。

「貴女もそう思う？フフ…最高に笑い種だわ。私、邪帝ってキラいなよね。堅物で頭でっかちで…何をやるにしても邪神、邪神、邪神様って…口うるさいったら、ありゃしない！」

拾い上げた宝玉を、まるで石ころの様に放り投げる銀髪の美女は、隣で自分を見上げるクルスに向き直る。

「ねえ、一体どんなヤツが邪帝を負かせたのか…興味ない？」

艶めかしい笑みを浮かべる銀髪の美女に、クルスは顔を隠したまま、コクリと肯く。

「ここでの仕事、飽きちゃった…玩具…すぐ、壊れちゃうんだもん」

顔を覆う指の隙間から、クルスは辺りをぐるりと見渡す。

荒れ果てた闘技場の内部には、至る所に宝玉が転がり落ちていた。

「そうよね。まさか私も、こつも早く仕事が終わるなんて思ってもみなかったし…。ここの連中、歯こたえ無さ過ぎだわ」

至る所に転がる宝玉の数々。

それは【宝玉獣】と呼ばれるデュエルモンスターが討滅させられた事を意味していた。

つまり、この虹の都市は、たった二人のデュエルモンスターによって壊滅させられたという事なのだ。

「…ねえ、ルイン…行こうよ。人間界に…」

クルスは、隣に立つ銀髪の美女、ルインに呟くように口を開く。

「あつちで、新しい玩具で…遊びたい」

「フフ…ええ、行きましようクルス。人間界に…」

ルインと呼ばれた美女は、妖美な笑みを細く浮かべながら、クルスの頭を優しく撫でる。

闇は動き出す。

西条たちの事情など知る由もなく、闇は自らの欲求を満たす為に、動き出す。

その日の夜。

西条は自室の部屋で、自分のデッキを広げながら、唸るような声をあげていた。

テーブルに目一杯広がるカード。

それらを眺めながら、考え込む彼の隣で、マナはウキウキしながら

「ねえ、さいじょお、さいじょお。なにをそんな考えてるの?」

「んー…デッキを見直してんだよ」

「え…なんで…?」

「なんで…?って、なんで?」

「だって、さいじょお…デュエル強いじゃん。あの邪帝に勝っちゃう位なんだよ?今のままで、別に良いと思うんだけど?」

マナには、彼の行動が理解できなかった。

邪帝は、精霊界の中でも王と呼ばれる実力者なのだ。

その邪帝を打ち破ったデッキだ。

なぜ、それを今更変える必要があるのか、マナは分からなかった。

そんな彼女の疑問に、西条は真剣な表情で、視線をカードに向けながら

「…あのデュエル。俺は必死だった」

彼の脳裏に浮かぶのは、邪帝とデュエルをしていた時の事。

「余裕なんてこれっぽっちも無いって位に…俺は、全力で戦った。勝つには勝ったけど、でも…だからと言って、それで良い訳じゃない」

邪帝は言っていた。

自分の他にも、マナを狙ってくる者が現れるだろうと。

邪帝には勝てた。

だが、次にデュエルした時に、勝てるかどうか分からない。

もし、他の王クラスの實力者が現れた時に、太刀打ちできるか分からない。

(その事を、コイツは知らない。不安にさせない為にも、いつ、どんな時でも…お前を守ってやれる位に強くならなくちゃいけないんだ)

邪帝とのデュエルを終え、そう決意したからこそ、西条は自分<sup>デッ</sup>自身と向き合うのだ。

「邪帝とのデュエルで、俺もまだまだって思ったからな。決闘者として、精進したいんだよ。俺は…」

「……そっか」

彼の話しを聞き、マナは精霊界にいた時の事を思い出す。

魔術の修行をしている時、師匠も彼と同じ様な事を言っていた事を思い出す。

（お師匠サマも、自分から進んで魔術の修行をしてたな…さいじょおも…決闘者として、こっちやって修行してる。やっぱ、凄いよ。さいじょお…）

彼の背中と、師匠の背中が重なって見えたマナも、自分自身と向き合う事にした。

自分はこの世界で、神のカードと呼ばれる幻神獣を持ち帰らなければならぬ。

その為に、西条は資力してくれている。

ならば、次は自分が彼の力になってあげたい。

そう決意したマナは彼の隣に座り、一緒になって考える。

「…マナ？」

「わたしも手伝うよ。さいじょおのデッキ作り！どこまで…力になれるかどうか…分からないけど…」

意気込んで飛び込んだは良いが、自分の力に自信が無いのか、マナの言葉は語尾に近付くにつれて小さくなっていく。

しかし。

「…ありがとな、マナ。一緒に強くなるうー！」

「…さいじょお」

一緒に強くなるうー。

彼が、自分の気持ちを察したのかは分からない。

しかしその言葉に、マナは心の底から嬉しく感じていた。

「うん」

とびっきりの笑顔と共に。

## 動き出す闇（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の話で新たな敵が二人登場しました。

以前執筆していた時と、登場する敵が違ったりしていますが、物語の進行に影響を及ぼすような違いはないかと思えますので、この作品はこの作品として楽しんで頂けたらな、と思っています。

最近、更新が不定期です。

まあ今に始まった事ではないのですが、この小説を執筆し始めた時は定期的に更新できていたのですが、仕事やプライベートの都合上、遅れてます。

その事については、素直に申し訳なく思っています。

そんなプライベート。

最近になって、フットサルをやり始めました。

近くにフットサルができる場所があるので、職場の人に誘われてやり始めたのですが、これがまたハードでして…（汗

そして今月に入って、今度はフットサルも兼ねながら、野球をやるうという事になりました。

運動自体は好きなので、「喜んで!!」と参加を表明しましたが、スポーツに掛かるお金がヤヴァイ事に…orz

さて、ここらで愚痴は終わりにして…

皆様に一度、簡単なアンケートを取ってみたいと思います。

内容は簡単です。

『この小説で登場する敵モンスターとして、誰に登場してもらいた

いですか？』といった内容です。

アンケートに答えてもらう際に、そのキャラが使用するデッキコンセプトを記載してくれると、大変ありがたいです。

感想板にでも、メッセーじボックスにでも良いので、何かご希望があれば書き込んで下さい。

皆様と一緒に、作品を仕上げたい。

それが、僕が執筆する上で力になりますので、どうか宜しくお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0485w/>

---

決闘者の道

2011年10月12日14時08分発行